

機械仕掛けの人類へ

トクサン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そこは人類が亡び、アンドロイドだけが取り残された世界だった。

目次

堕ちた人類	1
未来人形	24
もうひとつの可能性	40
禍根	56
母なる機械	70
ヒトならざる者達へ	86
空を覆う天蓋	109
人間のカタチ	123
虚栄	151
迅雷	175
絶望に至る巨影	197
機械仕掛けの人類	220

墮ちた人類

気付いた時、銀次は荷物の散乱する船内の中で倒れ伏していた。自分の上に壁に張り付いていた筈のバックバックが覆い被さっていて、銀次は起き上がりながらバックバックを横にはねのける。頭がずきりと痛んで、見れば兜が展開されていなかった。手で額に触ればぬるりとした感触、額を切ったのか血が出ていた。

記憶があやふやだった、船内の貨物は全て地面に転がっている。重力制御が行われているのかと一瞬思ったが天井のライトが点灯していない事から電力が死んでいるのは明らかだった。

「おい……おい、誰か、居ないのか」

銀次は首を竦め、首元のマイクに向かって話しかける。幸い纏っていた鎧武者は無事だった、これが無ければ今頃自分は貨物にシェイクされて磨り潰されていたか、或は圧死していただろう。船内の電力は死んでいたが、幸い鎧武者の動力炉は生きている。外傷らしい外傷もない。

「銀次……?」

「四郎ー！」

銀次が声を上げれば後方から聞き慣れた呻き声、振り向き駆け寄ってみれば同じ調査隊の四郎が地面に転がっていた。四郎はきちんと兜を展開していた様で面頬とモノアイが微かな光を放つ。銀次が手を差し出すと四郎は確りとその手を握り、僅かにふらつきながら立ち上がった。

「銀次、一体何があつたんだよ……スゲエ、気分悪いぜ……」

「分からない、船内の電力が死んでいる、確か——確か、そう、俺達は長距離跳躍を行った筈だ」

銀次は鎧武者に記録されているログを洗って自分達の最後の行動を確認した。長距離跳躍による惑星間移動、異空間門を開いて船は光航行に入った筈だった。そして目的地に到着したならば安全装置が働いて自動的に惑星外周に出現——そのまま着地し調査を進める予定の筈。

「失敗したのか?」

「……………かもしれない」

軽く兜を叩いた四郎が問いかけ、銀次は頷いた。長距離跳躍が失敗する確率なんて一体どれほどか、兎に角運が悪いと言うしかない。船内の様子を見れば銀次と四郎の姿しかない、見れば壁の一部が隔壁に切り替えられており船に穴が空いていたのだと理解し

た。周囲の内壁は罅割れており破片もそこらに散らばっている。銀次は障壁に手を当てながら自分達の座っていたシート脇にあるコンソールへとアクセスした。

「他の船員は何処だ、何で俺達しか居ないんだよ」

「隔壁が作動している、多分外に放り出されたんだ」

「マジかよ……なんてこった」

「これで良く分からない宇宙空間に放り出されているなら終わりだな——けれど此処には重力がある、だから……」

銀次はそう言いながら船体の状況確認を行う。鎧武者の手首からホログラムが投影され、船体の大まかな状態が目に見え込んで来た。

「これは……酷いな」

「殆どアブロックだけじゃねえか」

投影された船体は十分の一も残っていないかった、こうして自分達が生きている事さえ奇跡に近い。大気圏突入があったのなら燃え尽きてもおかしくない程の損傷具合。銀次と四郎の配置されていたアブロック、それに付随した通路と船体右舷が僅かに見える、その一部の残骸のみ。後は砂嵐のようにぼやけて見えない、恐らく反応がない部位。

「空中分解したのか？」

「惑星周辺に出現したならそうなる、もしくは運良く惑星表層に不時着した衝撃か……どっちにしろ生きてるのが奇跡だな」

「電波橋がやられたなら救援信号も遠くまでは届かねえ、自力で最寄りのFOBに辿り着くしかねえな」

「幸いなのは此処が宇宙空間ではなく惑星の地表だつて事だ」

銀次は船体状況を置くと共に外部環境解析を行う。空気中の成分解析から地表、障害物の有無、直近の生命探知等々。表示された結果は脅威判定なし、人類活動領域内。辛うじて酸素濃度が濃いようだが直ちに影響が出る程でも無い。環境としては地球に近いのかもしれない、珍しい事この上なかつた。ホログラムを覗き込んだ四郎が問いかける。

「動けそうか」

「大丈夫だ、けれど念の為兎は装着していた方が良い、解析ノズルが故障していないとも言い切れない」

「了解、武器はどうするよ？」

「ガレージを開けてくれ、標準兵装は全てウ号ブロックにあった、緊急用の武装だが無いよりマシだ」

そう言つて端末からケーブルを抜き出すと、四郎が部屋の奥に埋め込まれていた横長

のコンテナ——ガレージと呼ばれた箱を解錠する。内部には確りと固定された武装が六つ、もしブロックが孤立した場合に備えて配備された武装だった。こんな物を使った記憶は一度もなかったが存外マニュアルも役立つ時がある。

「使えそうなモンは、中巻野太刀と脇差……旧兵装かよ、デケエのは屋外戦闘用か？」
「素手よりは全然良い、リンクしておけ」

「へいへい」

四郎は肩を竦め野太刀——一メートルほどの長さがある刀を投げて寄越す。受け取ったソレはズシリとした重さを感じたが鎧武者の筋力補助は完璧だ、瞬時に重さを感じなくなりそのまま野太刀とパスを繋ぐ。

大和合戦兵装【中巻野太刀】、製造されてから二十年近い骨董品だがそんなものだろう、予備を新調する余裕は大和には無い。

次いで脇差も受け取って同じようにパスを繋ぐ、これでいつでも武器の状態がリアルタイムで知る事が出来る。損傷状況の把握などは大切だ、特にモノを乱雑に扱えない探索任務では。

「パスは？」

「通った……つか、お前額切れてんじゃねえか」

「ん？ ああ……」

こちらを見た四郎が銀次の額を指差しそう口にする。痛みより優先する事があって後回しにしていた、けれど手当は周囲の状況確認が済んでからでも遅くはない。傷自体は大して深くなかった。

「大丈夫だ、表面だけだよ、派手に見えるけれど大して痛みも無い」

「ホントかよ」

「本当だって、手当は周囲の安全が確認出来てからするさ」

そう言つて銀次は兜を展開する。背骨の辺りから順に収納されていた兜がせり上がり、面頬と合わさつて完全に銀次の顔を隠す。鎧武者のシステムは健在、銀次の網膜にディスプレイが投影された。

「鎧武者の損傷無し、動力炉問題無し、兵装確認——四郎、行けるか？」

「当然」

中巻野太刀を背中に装着し、脇差を腰に取り付ける。一応いつでも抜刀できるように脇差には手を掛けておく。廊下へと通じる扉には非常灯の赤い光だけが見えた。側面には緊急解除用のパネル、薄いカバーで守られた赤いスイッチを押し込めば扉の内部にある圧力装置が働いて外部に扉を吹き飛ばす。

「行くぞ四郎」

「おうよ」

銀次は一度四郎の方を見てからスイッチを殴り付ける様に押し込む。瞬間、バクン！と扉が音を鳴らして振動し、そのまま空気の抜ける音と共に外へと吹き飛んだ。豪と強い風が二人の体を揺らす。が鎧武者を装着した二人の軸は微塵も揺らがない。二人は扉の脇にへばりつき、恐る恐る外を覗き見た。

「……………森林？」

「自然だ、こりゃあすげえ」

視界に飛び込んで来たのは半ばで折れ曲がつて千切れた廊下、そしてその先に広がる緑一色の光景。樹など余りにも大きく二人の母星である地球でも中々見ない程。自然のある環境となると生命体も存在するだろう、空を見上げれば太陽となる星が見える、恒星があつて助かった、もし無ければこの世界は極寒の内に在つただろう。

こんな星があつたなんて二人は驚愕した。

「データベースに繋がれば此処がどこの星か分かるかもしれないねえな」

「いや、でも自然の存在する星なんて……………こんな地球に似た惑星は聞いた事が無い」
「華神の時もそうだっただろう、もしかしたら人間さまがいるかもな」

「まさか」

もしそうなら銀次たちは宇宙人に他ならない。こんな雑でハプニングまみれなファーストコンタクトは嫌だった。しかし完全にはないと言い切れない事も事実で、銀次

は内心で生命体が居ない事を祈りつつ地面に探知用の打ち上げ装置を埋め込んだ。

「上げるぞい」

「了解」

野太刀の柄に手を掛けた四郎に一声掛け、銀次は足で装置の小さなペダルを踏み込む。瞬間、ドン！ と破裂音が鳴り響き小さな影が頭上に打ちあがり、爆発。周囲に青白い粒子を撒き散らした。

微細な電子機器、名を極小鳥と呼ばれるナノマシンの一種。これで周囲の生命体を探り危険が無いかを確かめる。

打ち上げを終えた後は兜のデイスプレイで極小鳥の結果を見る、散布された場所から徐々に範囲を広げていくナノマシンは周囲に生体反応がない事を認めていた。正確に言えば小型の小動物と思える反応は存在する、しかし大型の反応は皆無だった。

「大型反応なし、周囲三キロは安全だ」

「生き物は無しか……そうなるとどうする、たった二人で探索は無謀だろ」

「そうは言ってもな、増援がある訳でもないし……食料だって限りがある」

銀次は振り向いて残骸と成り果てた船体を眺める。銀次たちが籠っていたブロックの中には総員六名分の食糧が入っている。しかし食糧は一人三日分、六名分を二人で分けても九日しかもたない。何とかして調達しなければ餓死するだけだった。

「水の供給システムはブロックの電源を何とかすれば良いけれど、食事だけは何とか確保しなきゃならない、それに電波橋が無いんだ、救難信号もF O Bや他艦隊には届かない」

「宇宙船でも作んのか？　こんな場所でウイル・Oエンジンを作れるとは思えねえ」

「当然だな、だから俺達を作るのは電波塔だよ、此処にいるのを知らせるんだ」

船体のデータベースと座標プログラムは船橋が無い時点で使えない。故に此処がどこか分からない、長距離跳躍を行う為のエンジンがない以上この場に留まって何とか惑星間通信を行うしか方法は無かった。銀次の言葉を聞いた四郎は恐る恐る問いかける。

「……銀次、お前通信塔なんて作れんのか？」

「作れるかどうかは関係無い、作るんだ」

じゃなければ一生この星で生きていく事になる。未開の地で果てるなど冗談じゃない、調査班としての本懐を果たすならばまだしも跳躍失敗で不時着し所在不明のまま死ぬなど。

「前途多難だな」

「墜落した時点で分かるだろう」

肩を竦める四郎、銀次は淡々と口にしながら船体の中へと戻っていた。

まずは食料の確認、それから拠点の作成。やる事は調査任務と同じだ、本来ならば母船となるこの船——神楽が拠点代わりとなる筈だったが、今この場にあるのはその残骸、それも精々ブロックひとつ分。必要最低限の機能が働いているかも怪しい、兎にも角にも今最も優先して確保すべきは電力だった。

「暫くは鎧武者の動力炉で代用しよう、交互に使えば何とかなる」

ブロック内へと戻った銀次は壁にあるコンソールからアンビリカルケーブルを抜き出し、そのまま自分の背中の外部装甲を開き差し込む。延髄及び脊椎から伸びる動力ライン、其処にブロックのパスを捻じ込んだ。鎧武者に流れていた動力のほぼすべてがブロックに吸い取られる。暫くすると天井のライトがパパッと点滅し、そのまま貨物の散乱するブロック内を明るく照らした。

「これで必要な分の水は生み出せる、ついでに船内機能の確認もしてしまおう」

「その間は待機か？ それで水が手に入ったら周囲を探索、と」

「そうなるかな」

「なら俺は見張りでもするか」

そう言つて四郎は野太刀を背中から取り外し、手に持つて扉の近くに座り込む。調査、探索は基本的に二人一組、欲を言えば三人一組が望ましい。単独で探索を行うなど自殺行為も良いところだ。故に銀次がこうして動力を供給している間、四郎も動く事は

出来なかつた。

「しかし、一緒に居たのが銀次で助かつた、コレが他の奴だつたら絶対パニックだつたぜ」

「まあ、気心知れた仲つていうのはデカいな」

「違うない」

座り込んだ四郎は立つたまま電力供給を行う銀次に語り掛ける。二人はこの調査隊に組み込まれる前から友好関係を結んだ馴染みであつた。同じ中等教育、高等教育を受け大和特派調査隊に志願した人間だ。ある意味この二人が生き残つたのは僥倖でもあつた、互いに互いを知り尽くしている。

「元々人類生存圏から外れた場所を探索するつもりだつたけどよ……まさか全く知らない星に来ることになるとはな、散々読み込んだ指示書とデータが全部パアだぜ」

「確かに読み込んだ資料は全て水の泡だけれどア号隊に入つたのは正解だつた、コレが補助用の強化外骨格だつたら生き残るのも一苦勞だつた」

「それはあるな、こいつを着ていれば巨人野郎とも殴り合える」

四郎はそう言つて鎧武者の板金を叩いた。ガン、と音を立てる鎧武者の装甲、戦闘用の強化外骨格としてコイツ以上に頼りになる物はない。量産型の一つに過ぎないが、あるとないで雲泥の差だ。

「欲を言うなら火砲が欲しかったな、刀振り回すのも嫌いじゃないが、ドデカイのをぶち込む方が性にあってるからよ」

「……だから合戦の成績が悪いんだろう、四郎はもう少し技を学べ」

「仏様は俺に言つて下さった、火力こそ正義だと」

「なんて奴だ」

面頬の奥で押し殺した笑い声をあげる四郎、銀次はそんな四郎を呆れた目で見ていた。やけに射法ばかりに傾倒すると思つていたが、そんな事を考えていたとは。確かに火力も大切だが銃器には弾数という縛りがある、その点緊急時に重宝されるのは何度でも使える兵装だ。ガレージに野太刀や脇差と言つた旧兵装——それも頑丈さを売りにした兵装が詰めてあつたのはそういう観点からだろう。

「頼むから火砲を見つけても俺の背中では撃つてくれるなよ」

「そんなへまする訳ねえだろ、何年バディ組んでいると思つてんだ」

野太刀を抱えてそう口にする四郎はしかし、不意にピタリと動きを止めて僅かに腰を浮かせた。纏つていた霧囲気が一変する、その姿を見て銀次は嫌な予感を覚えた。

「どうした？」

「——金属反応だ」

その言葉を聞いた瞬間、銀次は背中中のアンビリカルケーブルを排出し、素早く背中中の

野太刀に手を掛けた。金属反応、こんな人類未到達の星に？

「数は」

「一だ、今鎧武者の探知機能に反応があった、全枠設定にしている良かつたぜ……熱源規模中、これは限りなく灰に近い黒だぞ」

「鉱物の可能性はないのか？」

「熱源反応があるんだぞ、ハッキリと【動力機関】があるんだ、これは確実に機械の類だぜ」

「……こんな星にか」

「——こりゃあ、若しかすると冗談抜きで宇宙人デビューかもしれないな」

四郎の言葉に銀次は内心で焦りを覚える。機械を作り出すだけの文明がある、それはつまり人間に限りなく近い知的生命体が存在しているという事だ。そして自分達は不時着した身、連中からすれば不法入国に等しい。

自分達の対応一つで星間戦争にすら発展し得る。しかし何の準備も無しに交渉に入れるとは思えない、そもそも未だ他の惑星に於いて人間と同列の知的生命体など発見されてないというのに！

「……やるのか？」

「自分の身は自分で守る、まずは様子見だ」

「下手すりや戦争だな」

「謝って済めばそうするさ」

あり得ないと思いつつも軽口を叩く。そして二人揃って船外に飛び出すと、そのまま接近する熱源の出現に備えた。センサーの反応対象を全てに設定した瞬間、銀次のモニタにも金属反応の文字。どうやら誤作動ではないらしい。

「熱源規模中って、どれくらいだ？」

「全長二メートル前後、人間と同じか少し大きい程度」

「戦車とかだったら大か」

「そうだ」

銀次は野太刀の鞘を解放、横合いの外装が開き刃をスライドする様にして抜刀した。続いて四郎も野太刀を抜き放つ。武器を手にしてファーストコンタクトを果たすと言うのも印象最悪だが、何かあってから武器を抜くのでは遅いのだ。これは過去の探索任務で学んだ実体験である。

武器を抜く一秒、それ以下の時間で生死が分かれる事さえある。

「来たか」

四郎が呟いた。船体が地面に衝突した衝撃で僅かに盛り上がった地面、その向こう側に生い茂るブッシュがガサガサと揺れる。距離凡そ十メートル、倒壊した木々の合間を

縫つて来たのか速度はそれ程でもない。

銀次と四郎の二人は野太刀を構えたまま動かない、しかし鎧武者の筋力補助は既に合戦時へと切り替わっている。完全な戦闘仕様、場合によっては開幕速攻、斬り殺す事さえ厭わない。無論最初は様子を見るつもりだ、しかし相手が武器を突き付けて来たのなら——容赦はなし、一気に制圧する。

緊張が高まる、二人の手が野太刀を握り締めギシリと音を鳴らし。

葉の中から一つの影が躍り出た。

驚いた事にソイツは人型だった。身長は二メートル以上あり大柄ではあるものの、凡そ『人間だ』と判断出来る程度には似通っていた。足は二本、腕も二本、目は二つで鼻と口は一つ。その人型はブツシュから飛び出し、銀次と四郎を目視する。

銀次と四郎は一瞬動揺した、まさか人型が出て来るなんて微塵も考えていなかったが故に。しかし大和の人間という訳では無いだろう、目の前の存在は強化外骨格を纏っていないかった。そうなると探索隊の者ではない、この星の「機械」だ。

見た所武器らしい武器は持っていない、拳も握っていない。

四郎と銀次は素早く視線を交わし、ゆっくりと——本当にゆっくりと野太刀を下ろす。しかし完全に戦闘態勢を解いた訳ではない、言つてしまえば武器を下ろした「フリ」だった。

「——これは想定外だったな、銀次」

「ああ……人間の形をしているなんて、想定外も良いところだ」

「このトップも【人間】なのか？」

「ペットのな位置かもしれないぞ、犬みたいな」

「マジかよ」

短く言葉を交わしてじつと相手の出方を見る。二メートル超えの体軀、頭には髪の毛だつて生えているし皮膚も見える。服——というよりはアーマードレスだろうか、大英帝国の方で見た事があるデザインに近い服。見た目は殆ど人間と同じだ、けれど熱源反応と金属探知からは逃れられない、コイツは生物ではなく機械だ。

女性型の機械はじつと此方を見たまま棒立ちで固まり、キュイイイと甲高い音を鳴らした。何らかの駆動音、二人の腰が落ち野太刀の切っ先が浮く。もし武器の類だったら瞬時に斬りかかるつもりだった。

相手は瞳に該当する部位をぐりぐりと動かし二人を観察する。そして不意に口を開くと何事かを口走った。

『人間……嘘、本当に、人間？』

「……駄目だな、何を言っているのかサツパリ分からねえ」

「当然だな」

言語が偶然一致するなんて事はあり得ない、故に落胆や失望は無い。銀次と四郎は互いに野太刀を構えたまま動かなかった。本来こういつた場合に備えて船体にはフリーストコンタクト用の思念伝達装置や絵図で意図を伝える道具がある。しかし銀次達の居たブロックには搭載されていない、故に完全に手探りで意図を汲み取るしかなかった。

『わ、私、私は違う、貴方達に危害を加えない!』

「……何か、手振ってんぞ」

「……襲つて来る気配はないな、どう思う?」

「同じく」

「了解した」

二人は互いに頷きあつて握つていた野太刀を完全に下ろした。刃は抜き身のままで切つ先は地面に着けて杖代わりにする。四郎はワタワタと忙しない機械を前に首を傾げ、銀次は真剣にその行動から意図を読み取ろうとしていた。

「全然何をしたのか分かんねえな、単純に見た事ねえ連中発見して慌てているだけか?」

「礼を礼として受け入れる文化があつて初めて意味を為すと言うが、この場合は俺達がコイツの文化を欠片も理解していないのが原因だな、全く以て何をしたのか分からな

い

「結局同じじゃねえか」

「襲われただけマシだ、絵画ツールは？」

「んなモン持ち込む訳ねえだろ、任務の合間にお絵かきする趣味はねえ」

「……だよな」

しかし絵画ツールがあつたとしても意思疎通は困難だと理解していた。そもそも yes か no かの二択すら難しい。○という概念が肯定で×という概念が否定、という前提条件すら向こうには存在しないのだ。握手をすれば友好か？ それに向こうで侮辱に値しないとどうして言い切れる？

銀次は野太刀を一振りして鞘に納刀した。ガシヨン、という音と共に納刀した鞘の側面が閉じる。「おい」と何か言いたげな四郎を手で制し、銀次はその場に屈みこんだ。

「何かあつたら頼む」

「……合戦はお前の方が上手だろう」

「絵に自信は？」

「あると思うか」

「なら守ってくれ」

銀次近くに転がっていた木の棒を掴むとソレで地面をガリガリと削り始めた。如何

に離れた存在だろうと絵の概念位はあるだろう。片方が地面に何かを描き始めたのを見て、機械は慌てふためくのを止める。そしてゆっくりとした動作で銀次の方へと近寄って来た。

「……………万が一の時は斬るぞ」

「ああ」

野太刀を杖代わりにして——しかしいつでも全力で振り抜けるように鎧武者の筋力補助は合戦仕様のまま。銀次の数歩先で立ち止まった機械はゆっくりと屈むと銀次の手元を覗き込んだ。

地面に書き込まれたのは簡素な樹の絵、銀次は木の棒で絵を指し示し、それから近場の樹を指した。機械は暫く目を点にして固まっていたが、絵と近くの樹を見比べて、それから『樹』と小さな声で呟いた。

銀次はそれを聞くと何度か自分の中で咀嚼し、同じ発音で繰り返す。すると目の前の機械は意図を理解したのかブンブンと首を縦に振った。

「……………意思疎通しようとしている事は分かって貰えたと思う」

「随分人懐っこい、つうか感情豊かな機械だな、俺達の人工知能とは偉い違いだ」

「技術力は俺達よりも上かもしれない」

「ゾツとしねえな」

銀次は一先ず敵対関係ではないと決定付け、何とか友好を示そうと思った。機械相手に友好もクソもないかもしれないが連中のトップが知性を持った存在なら歩み寄る姿勢を見せるに越したことは無い。

「握手も駄目、ハグも駄目、ハートなんぞ書いても相手が意図を理解しなければ意味がない、友好を端的に表せる絵か行為を知っているか四郎」

「あー……キス?」

「論外だ」

銀次は少しの間考え込み、不意に機械に向かって背を向けると四郎に抱き着いた。突然の事に四郎は驚き、「お、おい? 何だよ」と困惑の声を上げる。困惑した雰囲気を感じない四郎を他所に銀次は次いで四郎の手を無理矢理引っ張り自分の手と握手をさせた。

そして振り向き、今度は機械に向かって両手を広げる。

「これで分かってくれ」

「……ああ、そう、実演ね」

なら一言欲しいと内心で四郎は愚痴る。しかし意図は伝わったのか、目の前の機械は恐る恐る銀次の体を抱きしめた。そしてパッと一瞬で離れると、銀次は手を差し出す。機械はその手を握ると上下に一度だけ振り、そのまま一步離れた。

「こうして見ると中々あれだな、民族の習慣みたいな」

「普及してればそれは一つの挨拶だ、ともあれこれで友好を結べた訳だが」

「俺達今日から友達ってか、これが友好の証だと思ってる顔じゃねえぞアレ」

「……………言うな」

儀式的な行為にしか見られないのは同意する、しかし人間は肉体的接触によつてある程度パーソナルスペースが狭くなるという話も——いや、相手は機械だった。銀次が何とも言えない微妙な表情を面頬の下で作っていると、目の前の機械はおずおずと自身の背後、森の方を指差した。

そして緩慢な動作で後退ると背を向けて数メートル程歩き、それから銀次と四郎の方を見る。その動作だけは何となく意味が分かった。

「ついて来いつてか？」

野太刀の切っ先に付着した土を払い、肩に担いだ四郎が訝し気に言う。機械はじつと此方を見るばかりで動く気配はない。自分達がついて行く意思を見せるまで動かないつもりらしい。

「どうする？ 敵対したいつて訳じゃなさそうだが、察するに行先はお仲間の所じゃねえか」

「だろいな……………いきなり向こうの領域に引つ張り込まれるのは得策じゃない、万が一の

時は瞬殺しにされて終わりだ」

「なら突っぱねるか」

「いや……どつちにしろ此処は割れてしまったんだ、遅いか早いかの違いだと思う」

なら少しでも良い印象を与える為に自分達から足を運ぶべきだ。そう銀次は思った。

一步踏み出して銀次が先を行けば、遅れて四郎が渋々と続く。その様子に機械は、パアと表情を明るくすると心無し軽い足取りでブツシュを掻き分け森に入って行った。一応見失わない様につき、しかし近付き過ぎないように距離も取る。そうしていると後ろに続いてきた四郎がそつと銀次の傍に寄り、言った。

「……毘だつたらどうする」

「電磁榴弾で動きを止めて離脱だ、最悪神楽の残骸も諦める、背囊だけ回収して逃亡だろうな」

「分の悪い話だ」

こつそりと交わされた会話、面頬の中で吹き銀次も同意する。しかし接触してしまつたのなら仕方ない。せめて初見で襲われなかっただけでも喜ぶべきだろう。銀次は脇差の柄に手を乗せながら息を吐き出す、よもや本当に他文明との接触を果たせるとはある意味調査隊としては最上の結果なのだろうが。

「きつかけを考えると、素直に喜べないな」

「……何か言ったか？」

「いや、何も」

未来人形

森を抜けた先には街が広がっていた。否、正確に言うのであれば嘗て街だったモノ——即ち廃墟である。周辺には蔦や苔、木々がびっしりと生え揃い宛ら打ち捨てられた世界そのもの。大樹となった木々は葉を傘の様にして大地に影を落としていた。銀次は前を歩く機械に目をやりながらも周囲の景観に驚きを隠せなかった。こつそりと足元に転がっていた破片を拾い、まじまじと見つめる。それは見間違いでなければ見慣れた材質のもの。少し力を入れればパキリと半ばから折れ、灰色の粉塵が指先に付着した。

「銀次……この建物は」

「ああ、鉄筋コンクリート造りだ——文明が余りに酷似している」

「トツプが人間だからか？」

「だからと言つて此処まで似るか普通？ 俄かには信じられない、実は既に地球と友好関係を築いていたと言われた方がまだ納得できる」

破片を地面に放りながらそう口にする。建物はビル形式で窓も存在している。既に廃れて廃棄されてはいるが今でも地球に存在する建物だ。鉄筋コンクリート造り、どう

みても地球文明の技術である。

しかし信号や標識、車といった存在は見られない。まるで住む事だけを考えた様な作り方だった。銀次は訝しむ、しかし完全に疑い切れないのも事実。何せ今まで同規模の文明を築いた存在と人類は出会った事がないのだ。そもその判断基準が無かった。

「銀次、金属・熱源反応だ」

「……分かつている」

「多いぞ」

周囲を観察しながら進んでいくと視界の隅に熱源探知の文字が躍る。数は十、二十、三十まだ増える。銀次は自分の体が硬くなっていくのが分かった。多勢に無勢、もし連中が襲い掛かって来たら二人だけでは撃退できないだろう。いや、相手が戦闘用機械人形でなければ或は。

街の中心には一際大きな樹が生えていた。そしてその大樹の麓に数え切れないほどの機械が集っている。整然と並んでいる訳では無い、ごちゃごちゃと群衆のように蠢き合っている。外見だけは限りなく人間に近い、それだけ見るとただの人間の集まりに見えた。

「出迎えか……四郎、野太刀は掴んでおいてくれ」

「了解、銀次も万が一の時は頼むぜ」

「当然だ、こんな所で死にたくはない」

そう言いながら金属反応に目を向ける。生体反応はない、奴らは全て機械だった。人間は——連中を作り出した生命体の存在は見えない。隠れているのか、或は全て丸投げしているのか。自律機械を作るだけの文明なのだ、当然離れた場所でやり取りが出来る無線の類も作つてあるだろう。

既に連中の創造主には存在を知られていると考えた方が良い。

『皆！ 人間、人間見つけたよ！』

前に行く機械が何事かを口にする。すると蠢いていた機械の群衆がピタリと動きを止め、それからグルンと一齐に此方を見た。その迫力は一瞬銀次と四郎の足が止まってしまう程。一齐に甲高い駆動音が鳴り響き、幾つもの瞳を象つた無機質な目が二人を射抜いた。否が応でも緊張が高まる、四郎は担いだ野太刀を掴み、銀次もまた脇差を強く握った。

『ホントだ、人間だ！ 生きている人間だ！』

『嘘じゃなかったの!?!』

『死んでなかった！ 死んでなかった！』

『人間？ 本当に人間!?! 嘘ッ！』

瞬間、わっと歓声のような声上がる。それは喜びの声の様で、群衆は屯していた大

樹の麓から一斉に二人目掛けて駆け出した。多くの人型が自分達目掛けて殺到してくる、その姿は恐怖を駆り立てるには十分過ぎる。

「銀次ッ！」

「まだだつ、まだ構えるな……ッ！」

言いながらも鯉口を切る銀次、コレが攻撃の前兆ならば迎え討たなければならない。囲まれたら終わりだ、銀次は腰部の携帯小箱から電磁榴弾を取り出し、ピンに指を掛ける。万が一の時は地面に叩きつけて動きが止まった瞬間に逃走するつもりだった。

群衆は砂煙をあげながら二人の近くまでやってくる、もしそのまま突撃してくるようなら即座に起爆させる。銀次はディスプレイ操作で対電磁波用のコーティングを施すと衝撃に備えた。

「四郎、プロテクトは」

「もう終わってる……ッ！」

その答えを聞いた瞬間、こちらに駆けていた群衆は凡そ二メートル程の距離でピタリと足を止めた。

あと少し進んでいたらピンを抜いて起爆させる所だった。四郎は野太刀を両手で掴み今にも斬りかかりそうな気迫。銀次も後ろ手に電磁榴弾を隠し、もう片方の手は脇差を掴んでいた。

止まった？ 四郎と銀次の心臓がバクバクと鳴り響く。兵装を握る手には力が籠った。

『わあ、凄い、本当の人間を見たのは初めてだよ！』

『ねえ、どうすれば良いの？ 人間を見つけたら保護しなきゃだよね？ 守らなきゃだよね？』

『わ、私も分からない、けど守らないって選択肢はないよ……』

『私達の言葉が分かかってないみたい、星の外の人？』

『ずっと昔に宇宙に飛んだ人間かもしれない！』

『パトリア・パトリオットがあるの？ そんな事したら死んじゃうよ』

『散布される前に出たのかもしれない、きっと地球に戻って来たんだ！』

ワイワイ、がやがや、機械同士の何らかのやり取り、それを銀次と四郎は冷たい汗を

流しながら見守っている。何を言っているのかは分からない、しかし誰も彼もが武器を

持たず攻撃的な意志は見せていなかった。

「お、おい……銀次、こういう場合はどうすりゃ良いんだ」

「慌てず、騒がず、慎重に、とはよく言うけれど……取り敢えずいつでも逃げられるよう

にはしておくんだ」

それしか出来ない。囲まれてはいないが逃げるのは難しいかもしれない、銀次は近付

いて来た事で連中の素体をじつくりと観察する事が出来た。遭遇した時の機械一体だけならば特殊機体という可能性もあったが、そうではないらしい。目前に並べられた機械はどれもこれも人型。

余りにも人間に近い——いや、近すぎる。皮膚と言ひ眼球と言ひ、その見た目は人間に近いなんてモノじゃない——人間そのものだ。

「探知機能が無かつたら完全に騙されていたな」

ポツリと呟く、それは四郎にも聞こえない声量。

こんな人間に近い機械は四郎達の母国である大和、それどころか世界どこにも存在しなかつた。見た目だけならば迫る事も出来ただろう、けれど連中の感情豊かな表情、行動、仕草、どれも凡そ機械とは思えない程に「生物的」だった。

こと自律機械の技術に於いて明らかに自分達の星よりも技術が発達している。下手をすると鎧武者の出力よりも上かもしれない。人工知能、無人機の強さは中身を考えなくて良い事だ。

そんな事を考えていると不意に、群衆の中から一体の機械が歩いて来た。外見は皆似たようなものだ、恐らく幾つかの型が存在しているのだろう。ソイツは銀次と四郎が最初に遭遇した機械に酷似していた。

『——まずは中央管理局に連絡を、それから指示を仰ぎましょう、市街全域に緊急警報発

令、搜索全隊に帰還命令、各員無いとは思いますが脅威に備え市街守備に回って下さい、貴女達が失敗すればこの人たちが死にます、鼠一匹通さないで下さい」

『わ、分かった！』

『うん！』

集っていた群衆がバツと一齐に散っていく。その様は正に蜘蛛の子を散らす如く。やけに気合の入った、という表現は少しおかしいか。しかし機械たちは何か使命に満ちた様な表情で一齐に駆け出した。ビル群の隙間を潜り、壁を蹴って屋上に跳躍。目の前にいた存在が一瞬で消えて居なくなる。地面を蹴った次の瞬間には六、七階建ての建築物を易々と飛び越えていく。その様子を銀次と四郎は呆気にとられた様子で見っていた。

その運動能力——凡そ鎧武者とは比べ物にならない。

「な……………何だ、今の」

「……………」

正しく二人にとっては悪夢だった。自分達の誇る大和製強化外骨格〔鎧武者〕、戦闘用のパワードスーツとしては量産型として最高傑作と呼ばれる程の性能を持つ。しかしその鎧武者と比較しても、つい今しがたまで屯していた機械達の運動性とは雲泥の差があった。

この鎧武者では逆立ちしたってあんな、三角飛びやビルを易々飛び越えるような真似

は出来ない。これは戦闘になったら一気に押し込まれて終わる、例えば火砲があったって連中を捉えられる気はしなかった。

この場に残ったのは大型の機械が一体、そして両脇に同型の機械が二体。両脇の二体は銀次と四郎、両名と同じ程度の大きさだった。しかしそれでも戦うとなれば苦戦——否、逃げる事さえ困難だろう。

『二人はこの場で待機を、アクセスポイントを開いてこの方達と意思疎通を図ります』

何事かを口にした大型の機械は銀次と四郎に歩み寄って来る。此処まで来て銀次は腹を決めた、これ程の技術を持った文明である。電磁榴弾程度では運動機能をマヒさせる事も難しいだろう、何らかの形で対策を行っていると思っていた方が良い。

銀次は脇差から手を放し榴弾を収納、完全に戦闘態勢を解いた。その様子を見ていた四郎が「おい！」と声を荒げる。突然の声に歩み寄っていた機械が足を止め、銀次は四郎の方に顔を向けた。

「銀次、何してんだよ！ 兵装から手を離すんじゃないやねえ！」

「四郎、腹を決める、多分俺達じゃ逆立ちしてもコイツ等には敵わない、なら少しでも警戒する姿を見せず友好的に振る舞った方がマシだ」

そう言つて銀次は機械に向かって一歩踏み出す。四郎は銀次の言葉に未だ納得出来ないのか、野太刀を掴みながら唸っている。何かあった場合は銀次を救出できるように

合戦仕様のままだ。反して銀次は内部機能を通常仕様に戻す、これで大した出力は出ない。そして徐に脇差の鞘を腰から取り外し、そのまま機械の足元に放った。

ガシャン！ と音を立てて地面を転がる兵装。それをマジマジと見つめる機械。

「俺達の兵装だ、通じていないとは分かっているが、戦う気はない……どうか殺さないで欲しい」

そう口にして銀次は背中の中巻野太刀も続いて排出、鞘から刀身を僅かに覗かせ武器であるとアピールする。そして納刀した状態のソレを同じように機械の足元に放る。そして完全に丸腰になった状態で両手を挙げ、そのまま相手の出方を伺った。

『キルヒ、これは』

『……恐らく武器です、この方達の』

『こんな金属の塊が？』

『ええ、多分——戦闘の意思がないと伝えたいのかもしれませんが、二人とも、武装の解除を』

『でも後ろの人間はまだ……武器、危ないよ、傷付く前に武器だけでも壊すから』
『……なら私だけ武装を排除します』

瞬間、銀次に歩み寄っていた機械の両掌に穴が空き、そこからシリンダーのような円筒がゴトン！ と地面に落下した。次いで両足の脇からボックス型の何かが排出され

る、それを見た四郎が警戒を露にするが銀次は動じることなく見守った。

そして機械は銀次と同じように両手を挙げて見せる。銀次は目の前の機械が兵装を排除したのだと理解した。

「四郎、コイツは兵装を棄てたぞ」

「何で分かる？」

「熱源探知だ、熱量が下がっている」

銀次は言いながら一歩踏み出した。そして向こうも一歩踏み出す。

そうして互いに一歩ずつ歩み寄り、手を差し伸べる距離になると恐る恐る両者は腕を下げた。心臓がバクバクと音を立てている。機械は四郎に手を差し出した、そして手首の皮膚が僅かに凹み、溶けるようにして消える。中から金属製のポートが出現した、それも一つだけではない、幾つかの時代を感じさせるようなポートだ。見た事のない様な差し込み口さえあった。

「——UAPか」

銀次は呟き、鎧武者の手首、その内側からケーブルを抜き出す。幸い機械の手首に並ぶポートには差し込めるタイプが存在した。ここまで用意周到だと何とも、寧ろこの星の生物は人類の創造主か何かかと疑ってしまう。人はソレを何と呼んだか。

「銀次、オイ、下手に接続してウィルスでも流し込まれたら……」

「大丈夫」

例え鎧武者を失ったとしても生身と大して変わりない、コイツ等の前であるのならば等しく狩られる側だ。

銀次がケーブルを手首の差込口に差し、そのまま接続を試みる。最初は意味不明な数字と文字の羅列であった。銀次は電子科の人間ではない、故にプログラム方面には全く明るくない。なすがまま、なされるがまま。元々人間が機械に対して処理速度で勝てる筈が無いのだ、だからこそ人間は機械に自我と感情を与えなかつた訳だが——いや、きつとそうでなくとも人は機械に感情を理解させる事など出来なかつた。

暫くその文字と数字の列を眺めていると、ポーンという軽快な音と共に幾つかのウィンドが開いた。

「これは……位置情報？」

立体化された周辺の地図、そこに表示される赤い点が三つ。恐らくこれが機械の位置、そして暫くすると青い点が二つ表示された。これはきつと自分達だろう、この短時間で目の前の機械は鎧武者の全機能、信号を暴いた様だった。

『大和製強化外骨格〔鎧武者〕、システム掌握、機能情報参照、該当言語探知、データベースアクセス申請、検索、ヒット——第七回特派惑星調査隊、第一艦隊神楽所属、ア号隊特別戦闘員藤堂銀次、中央情報統合所アクセス、情報開示申請、検索、該当なし、言語

情報対象、ダウンロードを開始します』

次いで一つの大きなウィンドが開く。銀次がソレに目を向けると見覚えのある文字が目飛び込んで来た。文字列は『これは貴方の纏っている衣服から情報を引き出し、データベースより作成した文章です、意味は通じていますか』とあった。銀次は一も二も無く頷いた、その様子を見た目の前の機械は嬉しそうな表情を浮かべ再び文章を構築する。

『解析とダウンロードが、まだ完全ではありません、同時進行で、この文章は作成されています、不出来はご容赦を——まず、私達は貴方、貴方達、貴方方に危険、害を加えません、その意思を持ちません、私達は守ります、守護する立場にあります』

害を加えない、その文書だけで一先ず銀次は胸を撫で下ろした。守護する立場というのは良く分からないが、敵対しないという事だけが今は大切だった。守護する立場という

『貴方達を拠点、支部に連れていきたい、決して害さない事を誓います』

「拠点……支部？」

思わず疑問の声を上げると位置情報を表示していたマップが動いた。俯瞰視点だった画面は横から眺めるアングルへ。断面図のように映し出された画面には地下に巨大なスペースが存在していた。この大樹の地下に凡そ考えられない程の巨大な施設があるのだ、銀次は驚愕した。この広さは街を一つ収納できそうな程——一体どれほどの年

月をかけて完成させたのか。

「……四郎、今から情報を送る」

「おう」

銀次と機械をじつと見つめ、異変があれば直ぐに斬りかけられるようにしていた四郎は銀次の声を聞き頷く。数秒して送られて来た情報は自分達の位置情報、そして巨大な地下施設の存在。四郎は驚いた顔で銀次を見た。流石に四郎もこれ程巨大な地下施設は見た事がなかった様だ。

「此処に俺達を連れていきたくないらしい」

「……オイオイ、いきなりそんな、まさか行くつもりじゃねえよな？」

「その気なら連中は無理矢理にでも連れていけるさ、危害は加えないと言っている」

「言葉を交わせたのか？」

「ああ、どうやら向こうのデータベースには此方の言語情報すらあるようだ」

銀次は面頬の中で唇を噛んだ。人類はこの星を知らないというのに、コイツ等は人類の知識を得ている。つまり一方的に観察、あるいは観測する為の手段が存在しているという事。それも自分達の存在を隠したまま——いや、もしかしたら上層部だけが知っている星の存在かもしれない。

仮にそうだとしても秘匿されるという事はそれなりの理由が存在するという事だ。

この時既に銀次の中でこの星の文明は完全に人類のソレを上回った。

「これは、本当に上位者か何かかもな」

「天照神座とかいう眉唾物か?」

「覚悟だけはしておいた方が良く、『私は世界を創造した神だ』と宣う存在が出て来てもおかしくない、それで腰を抜かしたら笑いものだ」

「……了解」

機械達は何かやり取りを行う二人を心配げに見つめている。言葉がきちんと通じているか不安だったのだろう。四郎は担いでいた野太刀をゆっくりと下げると、そのまま背中の鞘に納刀した。流石にこれ程の技術力を持つ星と敵対する事は避けたい、もし人類に見つからない様にするための術を持っていたとしたら完全に勝ち目はなくなる、元より銀次達に母星へ連絡を送る手段など無いのだから。下手をすると一方的に星を破壊されかねない。

四郎も自分達の言語情報を持っているという言葉が決め手だった、自分達は知らない、相手は知っている——この差は大きい。

それも圧倒的な技術力を持つ相手ならば尚更。

四郎が兵装を収納した事で機械達の雰囲気心なしか柔らかくなり、どこか緊張気味な機械に向かって銀次は頷いて見せた。今更だが頷きが肯定である事は既知の事らし

い、不思議なモノだ。

『良かった、感謝します、拠点は此方です』

そう文字を並べた比較的大柄な機械は銀次に背を向け、残った二体の間を通って歩き始めた。二体の機械は四郎と銀次を見て動かない。先に行けという事なのか、銀次は放り捨てた兵装を回収しつつ先導する機械の後に続いた。四郎も警戒しながら恐る恐る銀次に続く。その背後に二体の機械が付き、まるで捕虜のような形で連行された。

足早に隣へと並んだ四郎が銀次に問いかける。

「銀次、おい、本当にこれで良いのか？」

「……こいつらの運動性能は見ただろう？ 幾ら鎧武者が傑作機だからと言って無茶だ、アレは既存の強化外骨格で戦えるレベルじゃない、最低限拡張強化装備が要る、肉の体じゃない分自滅する可能性もないからな、人間が耐えられない速度でもビュンビュン飛び回るぞ、こんな野太刀程度振り回したって当たらない」

「だとしてもだ、連中がヤバイ技術力を持っているのも分かった、けれどこのまま素直に連れてかれて拘束なんてされてみる、何されるか分からねえぞ？」

「危害は加えないと奴は言った、それを信じるしかない」

「機械の言葉なんぞ信じられるか」

「ならどうする？ 逃げるか、今なら二対三だからな、電磁榴弾と奇襲で離脱は可能かも

しれない、けれどそれからどうするんだ……？　あの大勢の『強化個体』^{ラシカ}から逃げ続けるのか」

銀次は淡々とした口調でそう言い募る。所詮機械の言葉だ、信じられないという四郎の気持ちも理解出来る。そして連中の要求を蹴った場合の事を考え、銀次はついていく事を決めたのだ。四郎もあの大群に追われる想像をしたのだろう、ビルを跳躍で飛び越えるような連中だ、恐ろしく速く自分達を追い立てるだろう。四郎は小さく身を震わせた。

逃げ切れる気がしない、それが結論だった。

だったら最初から大人しくして居た方がまだ温情がある。

もうひとつの可能性

大樹の麓まで近付くと、不意にアスファルト舗装された地面が動き出した。一体何事だと四郎と銀次が驚けば、何と地面がそのまま地下の方へと降下を始めたのだ。頭上からは閉まるシャッター、裏側を見れば合金特有の鈍い光沢が見える。地面そのものが入り口だったのか、振動一つ感じなかった。

「まるで映画の中に飛び込んだ気分だぜ……」

「映画なら良かったな、けれどコレは現実だ」

降下する地面、凡そ三十メートル四方の巨大なシャフト。赤い光が降下する速度に合わせて上へと流れていく。降下は三十秒程だろうか、速くもなく遅くもなく、丁度エレベーターより少し遅い程の速度だった。

到着すると同時に一気に視界が開け、思わず愕然とする。広い、それが最初に抱いた感想だった。シャフトと空間を遮るものはなく、隔壁一枚存在しない。大きさは奥行きだけで百メートル以上ある、そこに整然と様々な機械が所狭しと並べられていた。壁と床は白一色、まるで病棟のような配色だった。

並ぶ機械群は見た事のない車両、あれは兵器だろうか？ それに人型の大型機械も存在する。けれど無人機ではない、誰かが乗り込む形の有人機だ。それが膝を着いて保管されていた。数は十、二十、いや百、もつと存在するかもしれない。

拠点、その言葉の意味を正しく理解する。此処はコイツ等の軍事基地なのだ、もしこの光景を見せて自分達の反抗心をへし折る作戦だったのなら褒めてやりたい、その目論見は達成しているとも。

銀次と四郎が肩を寄せ合い、ごくりと唾を呑み込む。

「まるでアバランシエ特派艦隊のハンガーみてえだ……いや、兵装の規模で言えば艦隊どころじゃねえ、大和の京中央都並みだ……ここが連中の本丸なのか？」

「——いや、連中は此処を支部と言った」

つまりここは数ある基地の一つ、そういう事になる。こんなものがまた、星各地に存在するとなると恐ろしくなった。連中の技術を考えるに此処の兵器一つで大和級の艦船を墜としそうな気配すらしてしまう。そんな筈がないと思いはするけれど、自分達の常識が通用しないのは嫌でも理解させられていた。

連中は危害を加えないと言った、しかしどうしても万が一敵に回った事の事を考えてしまう。ある意味リスクを最も重視する調査隊らしかった。

格納庫らしい巨大な空間には何人もの機械達が存在していた。そして連中は車両の

影に隠れてじつと此方を眺めている。地上で見たどの型でもない、恐らく整備用か支援用として製造されたユニットなのだろう。心なしか体格も小柄だった。

『人間……本当に、本当に見つかったの?』

『データベースでしか見た事無かった、私達と同じなのに生体反応がある』
『今までの活動は全部無駄じゃなかったんだ!』

上の連中と比べて此処の機械達は随分と慎重だった。勇んで突撃して来る事も無い、ただじつと此方を見るばかり。囲まれるよりは良かった、まだ見られるだけの方がマシだ。

ズンズンと進んでいく大柄な機械、銀次と四郎はその背に続き、後ろの二人もゆっくりと歩く。銀次と四郎には無数の視線が集中しており居心地が悪かった、ここまで大勢の存在に見られる事は二人の経験上余り無かったが故に。

『此方です』

ウィンドに文字が表示される。先導する機械が足を止めたのはハンガーを真っ直ぐ突っ切った所にある幾つもの扉の前、見る限りどれも同じ扉だった。どうやら一つ一つがシャフトとして機能しているようで、人の移動は全てエレベーターで行われているらしい。扉の脇についたボタンを押すと一秒足らずでポーンと軽快な音が鳴った。

先導する女がまず乗り込み、銀次と四郎が続く、そして最後に二人組が乗り込んだ所

で扉が閉まった。エレベーター内は広がった、二十人程度なら入りそうだ。ボタンは驚く程多く、一番端のボタンには『50』の文字、その文字を見つけ連中が数字の概念を用いている事を理解した。いや、元々自分達の言語情報を知っているような連中だ、当然と言えば当然だろう。意外だったのは連中の扱う文字が人類の扱う文字表記と同じ事であった。

最下層である50のボタンを軽く押しした機械はそのまま扉を閉め、静かにエレベーターは降下を始める。その間銀次と四郎は無言であった。

「——あー……あ、あ」

「ー」

エレベーター内で降下を待っていると不意に大柄な機械が声を上げた。突然の事性情けなくも肩をびくつかせる銀次と四郎、そして暫くそうやって何かを呻いていた機械だったが、「あいうえ、あいうえお」と二人の母国語を妙なイントネーションで続ける。そうすると段々抑揚がつき、自然な形で発音できるようになった。

「突然失礼しました、たった今言語情報のダウンロードとインストールが完了したので……改めまして、私達の拠点へようこそ、藤堂様とご友人の方」

突然ペラペラと理解出来る言葉を話し出した機械に四郎は面食らう、しかし銀次は予め電子世界で言語情報の件を聞いていた為に動揺はしない。だが名前まで知られてい

とは思わなかった。衣服——鎧武者から着用者情報を引き出したのだろうか、覚悟はしていたとは言え気分が良いものではない。

「大和の言葉が使えたのか……」

「データベースに登録されている言語ならば全自動機械人形がダウンロード・インストールを行って使用出来ます、先程は申し訳ありません、何分人間との接触は百五年と八ヶ月ぶりです、島国である大和の言語情報を取得するのに手間取ってしまいました」

申し訳無さそうな表情でそう言う。どうやら此処の連中はあらゆる国の言語を揃えているらしい。人類だけではない、或はまだ自分達の知らない星の情報すらあるかもしれない。銀次は会話が出来るならば勇んで矢継ぎ早に質問を投げかけた。

「……俺達はこれからどうなる？ 此方に敵対の意思はない」

「私達は人間に危害を加えません、ただ保護させて頂くだけです」

「母国へ帰して貰えるのか？」

「それは——どうでしょう、確約はしかねます」

それはどういう意味でか、銀次と四郎には分からない。先に上司を何とかしろと言う事なのか、四郎と銀次は何とも言えない表情を面頬の中で作った。

「今は何処に向かっている？」

「この拠点の地下五十階、大和の言葉で言うなら天下堅牢と呼ばれる場所です、この拠点の中で最も強固な防壁と迎撃設備を備えた階層となります」

「……其処に、お前達の創造主が居るのか」

「いえ、今はもう使われておりません、もう百五年前からずっと」

「なに？」

最も堅牢な場所、そう聞いて拠点のトップの人間が居座っているのだと思つたが——
どうやら違うらしい。一体なぜという疑問を抱くと同時、エレベーター内に電子音が鳴り響いた、最下層に到着したのだ。

そして扉が開くと同時に一階の格納庫に負けず劣らずな空間が顔を出す。白一色の部屋、宛ら巨大な箱。しかし広大なその場所には格納庫と違って何も無い、車両も、兵器も、機械の姿も。ただ薄暗い白色が一面に広がっていた。

「この場所は友軍信号を持たない存在が侵入した場合、四方に設置された迎撃装置が一斉に攻撃を開始します、目には見えませんがエレベーターの扉から一直線、この一列のタイル以外には全て武装が仕込んであると思つて下さい」

「……物騒だな、それに俺達はお前達の友軍じゃないだろう、何故攻撃されない」

「人間は最初から攻撃しない様に創られております」

「……………」

何か引っかけかりを覚える。しかしそれを口に出す前に機械は部屋に踏み出す。その背中を真つ直ぐ、それこそ中央のタイルだけを踏む様に注意しながら部屋の中を歩いた。「別段、普通に歩いて貰ってかまいませんよ、攻撃はしてきませんから」と奴は言うが、不用意に兵器に触れたいとは思わなかった。

真つ直ぐ真つ直ぐ、広い部屋を突つ切ると広大な部屋とはあまりにも不釣り合いな小さい扉の前に出る。横合いに認証用のディスプレイが一つ、後は両開きの白い何の変哲の無い扉。そのディスプレイに機械が手を翳すとピピピと言う音と共にガチャンと扉が音を立てた。

「さあ、どうぞ」

「……………四郎」

「わあつてる」

機械は扉を開けたままドアマンの様に待機していた。銀次は一声かけてから部屋に踏み入る、その背に四郎が続き、それから二人組の機械、そして最後に大柄な機械が部屋に入る。大柄な機械が後ろ手に扉を閉めるとやけに音が響き、四郎と銀次は飛び込んだ部屋の中を見渡した。

巨大な廊下だ、天井には小さな照明が点々と存在し白い地面を照らしている——そして左右に等間隔で扉が備え付けてあった。それぞれプレートが存在し、『001』、『00

2』といった風に記載されている。

四郎と銀次はその長い廊下と立ち並ぶ扉の数に困惑を隠せなかった。

「これは……」

「お好きな部屋をどうぞ、どこも清掃は定期的に行っていますので直ぐに使用可能です、ご希望があれば出来得る限り応えます、ただ部屋の改築等はお時間を頂く事を御理解下さい」

「どういう事だ」

銀次は振り返って三人の機械を見る。四郎も銀次の隣に立ち、訝し気に連中を見ていた。大柄な機械はニコニコと微笑むばかりで何も答えない、左右の機械に至っては安堵の表情を浮かべている。理解出来ない、銀次は続けて問いかけた。

「これは、捕虜という事だろうか？」

「いいえ、最初に言った通りです、私達は貴方達を保護し、守護する存在だと」

「……お前達の創造主に逢わせて欲しい」

銀次は一步踏み出してそう言い放った。しかし目の前の機械は眉を下げ、どこか寂しそうな声色で告げた。

「申し訳ございません……私達の創造主たる『人類』は百五年前に絶滅致しました」

「——今、なんと言った」

「私達の創造主たる人類は、百五年前に絶滅致しましたと」
人類。

目の前の機械は確かにそう言った。つまりこの星を有していた知的生命体は自分達と同じ存在だったという事か？ その時銀次を襲った衝撃はどれほどか、少なくとも一瞬全ての思考が止まってあらゆる感情が吹き飛んだ。

人類——それは自分達を指す存在。

この機械の姿形を見ただけで凡そ二本の足、二本の腕、目は二つで鼻と口は一つだと分かる。即ち連中の言う人類とは己の存在そのもの。

それが意味する事は一つ。人類は既に月と火星以外に居住可能な星を開拓していたという事。こんな広大な基地を作る程にか？ それも——百年以上前から。

「それは……つまり、俺達人類が百年前から此処に来て開拓したって言うのか？ ——馬鹿な、あり得ない」

瞬間的に廻った思考、しかし銀次はそんな筈はないと断じた。百年前、その頃はウィル・Oエンジンの開発すらされていなかった時期だ、精々出来てロケットエンジンを積んだ原始的な宇宙航行が限度だろう。大和は宇宙航行を可能とする艦船を作る技術力で列強に顔を並べた技術大国である。そんな大和が初の近距離跳躍を可能とする『宇宙航行艦船・新海』を作り上げたのが凡そ八十年前。そこから更に星々を股にかける程の

長距離跳躍を行えるようになるまで二十年、まだ見ぬ第二の地球を見つける為に、そして宇宙を開拓する為に特派遠征連合艦隊、俗にいう調査隊が生まれたのが五十年前の事だ。

最初は人死にも出した特派遠征、生物の存在する星を見つけれられるのは本当に稀だ。だからこそ人の住める星の発見は話題にもなるし、凡そ秘匿する事は叶わない。連合艦隊はその名の通り母星である地球から国境を越えて集められた人材で構成されている、故にどこかの国が星を占有する事は叶わない。元々それらに關しては協定が結ばれているのだ、長距離跳躍による調査は各国から出し合つた資源と金銭、人材によつて行われる世界規模のプロジエクト。

衛星を打ち上げるのとはワケが違う。

けれどそれ以外には考えれなかつた、考えられなかつたが——その思考を銀次は自ら否定した。

「人類つて俺達の事だろう？ 百五年前に絶滅——つまり俺達が本格的に宇宙へと進出する前に、この星に居た創造主、人間は滅んだつていうのか？ ロケットエンジンの機体で？ 一体どれ程の時間航行すれば到着するつて言うんだ！」

「……いや銀次、考え方を変えてみる」

あり得ない事だと機械三人に吼える銀次の肩を四郎が掴む。四郎は冷静であつた、無

論彼も銀次の思考に追従している。此処には人類が居た、そして滅んだ——人類という言葉に四郎も自分達を想定した。遙か昔に人類がこの星に辿り着き、そして強大な文明を築いたのだと。

しかし可能性はそれだけではない、興奮する銀次を前に四郎は淡々とした口調で言い聞かせた。

「気持ちには分かるぜ、俺も人類がそんな前に、それこそ百年以上前からこの星に来るなんてあり得ねえと思ってる、ロケットで来れるような近い場所にあるんなら今まで調査隊が気付かぬ筈が無い」

「ああ……ああ、その通りだ」

「けどよ、仮にだ、仮にだが……俺達と全く同じ地球がもう一つあるって可能性はどうだ？」

「なんだと」

四郎の言葉に銀次は強い口調で返す。「確かにスゲエ確率かもしれねえけど、ゼロじゃねえだろ」と言つて四郎は続けた。

「そつちの学問はからつきしだから詳しい事は分からねえけど、人間——猿以外にも賢い動物は多い、例えば蝟だ、大昔の宇宙人が蝟みてえな格好しているのは連中頭が良くて、もしかしたら海から地球を支配したかもしれねえからだと聞いたぜ？　だから地球

がもう一度やり直すことになったら人類以外の存在が支配する可能性だってある」

「何が言いたい？」

「だからよ、逆に言えばもう一回やり直しても『人類が支配する』可能性だってある訳だ」

「……………」

銀次は四郎の言葉に黙り込んだ。四郎が言いたい事は理解した、つまりこの星は『もう一つの地球』であると。地球と似たような環境、同じように人類が発達し、星を支配し、母星である地球よりも早く技術を発達させて——そして絶滅した。

そんな事があり得るのか、銀次は自分自身に問いかける。ゼロではないのだろうか、しかし確率は決して高くない。そもそも地球と同じ様な環境の星というだけで確率は凄まじく低い。人間が生きていけるような星、その存在がこの五十年の調査で見えられた数は片手の指で足りる。けれど人類のような知的生命体の存在は終ぞ発見されなかった。

そこで更に人類が生まれ育ち、同じような道を辿り、技術を発展させる。それも我が母星よりも遙かに早い速度で。

一体どれほどの確率か、それに連中は大和の言語情報すら持つていたのだ。それが地球を観測して得た情報なのか、それとも人類が発展する上で自然に生み出されたものなのか。全く違う星の同じ生命体が同じ言葉を話すか？ 銀次は頭を抱えて唸った。

「一体どんな確率だ……そんな事が、あり得るのか」

「考えたって分からねえよ、実際、此処には百五年前に人類が居て、それでスゲー技術を持つていた、今はもう居ない、そんだけだ」

「……お前は何でそんなにケロツとしているんだ」

「いや、だってよ、同じ人類だと思つたら何か気が抜けて、クソでかいエイリアンが出て来るならまだしも人間だぜ？ 連中が作った機械だ、なら俺達を保護するつてもマジだろう」

「……………」

銀次は完全に警戒を解き、呑気に腕を組んでゆらゆらと体を揺らす四郎を見る。しかし四郎の言う事も事実、同じ人類だと分かつた途端胸を覆つていた靄のようなモノは晴れていた。得体のしれない巨大な何かではない、等身大の同じ人類だと分かると妙な安心感があつた。

見れば三人の機械は先程とうつて変わつて心配そうな表情で此方を見ている。自分が剣？な雰囲気で叫んだからだろう、銀次は一つ息を吐き出すと天井を見上げて言つた。

「……なら当面は、母星に救難信号を出す事が目的か」

「存外簡単にいけそうだけどな、通信塔なんぞ建てなくても此処の設備でどうとでもな

りそうじゃねえか、此処に人間が居ないっていうならこの文明もそっくり全部俺らのモンになるんだろう？ これって勲章ものじゃないか？」

「せめて死に掛けた甲斐はあつたと言う事か、だとしても実力でも何でもない所が痛いな」

銀次は呟いて三人に顔を向ける。そして徐に手を胸に当てると、そのまま兜の解除信号を送った。瞬間、パシユンと音を立てて面頬と兜が畳まれていく。頭頂部から首回りにかけて展開していた装甲が重なり畳まれ、脊椎の方へと姿を消した。そして面頬が鎖骨の辺りに収納され銀次の素顔が露わになる。

「久々に吸い込んだ空気は随分と美味く感じた。籠っていた熱気が外に排出され僅かに汗ばんだ頬を拭って銀次は三人を見据える。考えたってしかたない、その言葉には賛成する。所詮頭の中で思考を重ねようと現実にならぬのであるかどうかは聞いてみなければ分からない、兎に角此処はかつて『私達の知らない人類』が存在していた星、そしてこの機械達はその遺産という事だった。

「……そこの大柄なお前は知っているだろうが藤堂銀次だ、母星へ戻るまでの間、世話になる」

「勘解由小路四郎、藤堂とは馴染みなんだ、世話になるぜ」

四郎は兜を展開する事無く銀次の隣に並びそう自己紹介する。機械の三人はしかし、

二人の挨拶を他所に銀次の顔ばかり見ていた。浮かべるのは驚きの表情、何か顔についているのかと訝しむと——三人の顔からサツと血の気が引いたような気がした。

震える指先で大柄な機械が銀次を指差す。

「ああ、あ……血が、血が……ッ！」

「血……？　ん、ああ」

額を軽く擦って見れば指先に凝固した血液が付着していた。そう言えば墜落時に頭を打ったままだった、本当ならば治療してから動くべきだったのだろうがすっかり失念していた。幸い大した怪我ではない、消毒でもしてガーゼでも貼っておけば勝手に治るだろう。

そう思つて口を開こうとすると。

『緊急通達！　優先度等級一、指定された医療ユニットは直ちに最下層人類居住区まで急行せよ！　通達内容、保護した人類に負傷を確認、繰り返す、人類に負傷を確認！　人類医療班の出動要請、メディカルセンターの起動、並びに最悪の事態に備えカプセルの解凍指示！』

拠点内に警報が鳴り響いた。天井の照明が一瞬で赤色に染まり白一面だった世界が赤に切り替わる。一体何事だ、何が起こったと銀次と四郎の二人は浮足立つ。そうこうしているとエレベーターへと続く両開きの扉が物凄い勢いで開け放たれ、そこから白い

衣服を身に纏った機械が数人雪崩れ込んで来た。

『医療ユニットM020から025まで、到着したわ!』

『フルフェイスを被っていない方です、急いで! 額から出血しています!』

『! カーゴはやくつ!』

『分かつている!』

『装甲服はどうするの!? このままじゃカプセルに入らないよ!』

『カプセルは最終手段! 兎に角急いで、傷の具合を確かめるのツ!』

えっ、えっ、何?

そう言いながら右往左往する銀次。そんな彼の体を四方八方から囲んだ機械達は持ち運び可能な寝台——カーゴと呼ばれたソレに銀次を無理矢理寝かせた。そして恐ろしく速い手際でベルト固定され、そのまま半重力で浮遊するカーゴは銀次を乗せてエレベーターまで飛んで行つた。後に残されたのはハラハラとその様子を見守っていた三人の機械と四郎。

「……………え?」

四郎は呆けた声を出して、そのまま何も出来ず突っ立っていた。

禍根

傷は銀次の見立て通り大して深いものでもなかった。表面を軽く切つて流血した程度だ、既に血液も凝固して傷口も広がり様がない。それでも機械達は人類が怪我をした、負傷だと騒ぎ立て何十人という機械に囲まれ治療を受ける流れとなった。

もう全身消毒されそうな勢いで傷口に消毒剤を吹きかけられ、念入りに、それはもう念入りに傷の確認をされた後に抗菌テールと人工皮膚を張り付けられて終わった。実際に治療を行ったのは機械の中の一人だ、それ以外はそわそわと落ち着かない様子で心配げに銀次を見るばかり。

カーゴに固定されていた銀次はそれを死んだような眼で眺めていた。

「いや、大変だったな銀次……ぶふっ」

「四郎、お前半分面白がつて見ていただろう」

「いやいやいや、そんな事はねえつて！ でもなあ、そんなちよつと額切つた位でオペダナノマシン治療だつて……ぶふお！」

「思いつきり笑っているじゃないか！」

場所は最下層の人類居住区、その内の一号室、最も手前にある部屋だ。其処に銀次と四郎、そして大型の機械——『キルヒ』と呼ばれた機械が顔を突き合わせている。部屋は食事が作れる台所にシャワー室とトイレ、それに大きなリビングルームと小部屋がついており、一人で暮らすならば十分な大きさだった。

そのリビングルームに備え付けてあったテーブルに三人で座り、銀次は額に張り付いた人工皮膚を指先で摩りながらむくれる。因みにキルヒが特別な機械、即ち司令ユニットであり特別名があるだけで他の機械は等しく型版と製造順で呼ばれていた。本来ならば機械に名を付ける方が珍しいのだ。

「申し訳ありません、何分百五年——いえ、正確にはそれ以上前から探して漸く見つけた人類の生き残りでしたので、私達機械人形も少々過敏に反応を……」

「お前達の境遇を考えれば分からなくもない、だがな、流石にあれは」

「良いじゃねえか銀次、大掛かりとは言えちやんと治療して貰えたんだしよ」

申し訳無さそうに頭を下げるキルヒ、銀次は思う所があるのか先の医療行為に言及しようとして四郎が窘める。一度言葉を引つ込めた銀次は息を吸い込んで肩を竦めた、「いや、四郎の言う通りだな、もう何も言うまい」と深く椅子に背を預ける。連中に他意は無い、ただ純粹に銀次の身を案じた結果だった。

「ただ次からはもう少し落ち着いてくれ、命に影響のある負傷ならば兎も角、かすり傷程

度であんなに騒がれても心臓が悪い」

「はい、今度からは怪我の具合に応じて慌て方を変更します」

「……いや、そういう意味では無いのだけれど」

「ぷはっ」

機械相手に話す事ではなかったか、この頭の固さは母星のAIを彷彿とさせる。最も向こうの方は口調も機械的でこれ程感情豊かではなかったが。そもそも表情を変えるなんて機能は搭載されていない、過去に慰安目的で開発された機械人形は存在したがそれ以外の目的で利用される機械人形は例外なく無機質であった。

「……まあ良いさ、それでキルヒ、色々教えて欲しい事、知りたい事が沢山あるんだけれど——それよりも、俺達はやらなくちゃならない事がある」

「やらなくてはならない事、ですか？」

銀次はテーブルに肘を着いて手を組む、そんな彼をキルヒは不思議そうに見ていた。

この星の事、機械人形の事、どれ程の勢力で幾つの拠点を持っているのか。直ぐにでも自分達の母星と連絡は取れるのか、或は宇宙航行可能な艦船でも構わない。聞きたい事、知りたい事は山の様にある。

けれどそれより早くやるべきことが銀次と四郎にはあった。

「ああ、神楽に残して来た物資の回収か？」

「そうだ、元々俺達はあのブロックを拠点にしようとしていた、パーソナルデータもそうだが食料や予備のパーツ、諸々捨て置くには惜しい物がある」

「確かに、資源が多いに越したことはねえな、俺達の私物もある事だし」

四郎は腕組しながら頷いた。調査隊には例外なく長期の他星滞在が求められる、それ故に母星である地球から必要な私物を一式持ち込む訳だが——当然銀次と四郎も私物を船に持ち込んでいる。外壁に穴が空いた時宇宙空間に放り出されていなければ未だ内部に残っている筈だ。

「神楽……お話の内容から察するに、報告にあつた巨大艦船の残骸でしょうか？」

「そうだ、アレが俺達の母船だった、尤も今は一部しか残っていない上に屑鉄でしかないが……それでも奇跡的に俺達の搭乗していたブロックは無事だったんだ、物資もまだ残っている」

「なくなるとは思ってねえけど、個人的な思い出の品とか……あー、家族の写真とかあるんだよ、そういうのを回収しに行きてえんだが、構わねえよな？」

「私物ですか、成程」

キルヒは二人の言葉を聞きながら僅かな時間考え込み、頷いた。そういう事ならばと手を叩き、「なら回収班を用意しましょう」と。回収班？ と銀次が疑問の声を上げる。「なんだ、単なるお使いみてえなモンだし、まさか行くなつて言うのか？」

「正直なところを言えば私達機械人形だけで済ませたいのですが……」

「残骸全てを引つ張つて来るなら兎も角、何が必要か何てお前達には分からないだろう」
「ですので妥協案として護衛——回収班を同行させます」

宜しいですよねとキルヒは微笑んだ。機械人形だが其処には有無を言わせぬ圧力がある。銀次と四郎は軽く顔を見合わせ、まあ護衛位だったらと頷いて見せた。この星の原生生物がどんなものかは分からないけれど、護衛が一緒なら戦力としても心強い。何よりあの戦闘体であれば銀次と四郎よりも強いだろう。

「私もお二人に幾つか聞きたい事があります、帰還の折には是非お伺いしたく」

「お前達が俺達に聞きたい事？」

「ええ」

神妙な顔で頷くキルヒ、てつきり自分達の母星については見当がついているとばかり——いや、そうであるのなら百五年も指を啜えて見ている筈が無いか。人類を探していたと言っていたのは彼女達だ、ならば地球の存在を知った時点で接触を凶つて来るのが自然。

「……疑問がまた一つ増えたな」

もし銀次の考えが全ての外れで、大和の言葉もこの星独自に生まれたモノだったとすれば。銀次は小さく息を吐き出して首元を擦る。考えが正しければ単純に地球を知ら

ないのか、或は地球にコンタクトを取れない何らかの理由があったのか。それも彼女達から聞き出さなければならなかった。

「よっしや、なら善は急げだ、さっさと済ませちまおうぜ」

「了解しました、直ぐに班を編成します、五分程時間を頂けますか？」

「おう」

四郎が席を立ち上がって軽く伸びをする。キルヒは目を閉じて口を噤んだ、恐らく機械人形のネットワークにアクセスしているのだろう。

今更だが四郎はこの拠点に入ってからずっと兜を脱いでいない。単純に未だ疑っているのか、或は忘れているだけか。体温にもよるが強化外骨格の鎧武者は装着者の快適性に配慮されており兜展開時の着け心地も悪くない。何せ調査任務は星の環境によって一日中兜を展開しなければならいと言うのもザラだ、外せるのは拠点である艦船の中だけ、ならば当然装着の着け心地も重要になってくる。しかし銀次は兜を被る感触が余り好きではなかった。

「四郎」

「あん？」

「兜は解除しないのか」

とんとん、と軽く額を突く仕草を見せる銀次。すると四郎は今気づいたとばかりに頭

を揺らし、「そーいや出したまんまだったか」と面頬を擦った。

「つってもなア、調査訓練の時からコイツを着けてないと落ち着かなくてよ、視界が開けていると不安なんだわ、生身だと落石一つで頭潰れるしよ」

「完全な仕事中毒ワーカーホリックだな、偶には空気の入替えでもしないとリラックスできないだろう？」

「いや、酸素供給はちゃんとされているし……」

「精神的な話だ」

「人の好みだ、別に良いだろう？」

肩を竦めてそう言う四郎、まあ本人がそう言うのならと銀次はそれ以上言及する事を控える。視界が制限されて落ち着くと口にするのは四郎位なものだろう。大抵、調査隊の面々からはこの兜も評判が悪い。

「回収班の編成、終わりました」

「おお、速いな、流石じゃねえか、そんで人数は？」

「凡そ二十名ほどを選抜しました、五名が偵察用の探知ユニット、残り十五名が戦闘を主にしたマルチドレスです」

ひゅうと口笛を吹く四郎。あの運動性能を持った機械が十五名、探知特化の機械が五名。中々の戦力だ、恐らく銀次と四郎の艦隊からすればちよつとした主力級の力を持つ

だろう。と言うより数を聞く限り此処の防衛隊の一角を丸々削つたのではないだろうか。拠点の防衛そつちのので人数を割くとは、銀次は不安になり声を上げた。

「少し多すぎないか……拠点の防衛はどうなる?」

「私達の存在意義は人類を守り、生きさせる事です、何よりも優先させるべき存在があるのならば当然それ相応の人数を割きます」

泰然とした態度でそう口にするキルヒ。彼女達の創られた理由を聞けば納得は出来る、余りゾロゾロと供を連れて歩きたくない銀次であったがキルヒの真剣な目を見て諦めた。恐らく彼女達は人類関連の事ならば絶対に自分を曲げない、そうプログラムされているのか、或は感情的な枷が存在しないからか。

恐らく両方だろう。

「人数が多くて困ることはねえし……まあ、良いんじゃないの?」

「そうだな」

四郎の言葉に頷きながら銀次も席から立ち上がる。部屋の隅に積んでいた兵装を背中と腰に装着し直すと何となく安心出来た。成程、四郎の言っていた事が少しだけ理解出来たような気がする。この絶妙な重さが安心感に繋がる、良くも悪くも自分は調査隊の一人と言う事だろう。キルヒを伴って部屋を後にした二人はそのまま迎撃部屋を通じてエレベーターに乗り上へ、格納庫へと到着すると大勢の機械達が三人を出迎え

た。一瞬何事かと驚く二人だったが、大凡の人数が告げられたものと一致するので回収班であると直ぐに見当がついた。

「キルヒ！」

「ご苦労様、皆ちゃんと言語のインストールは済ませましたか？」

「当然だ！」

胸を張ってそう宣言する機械、その言葉は銀次達が理解出来る物に置き換わっている。「お前達は……」と銀次が言葉を紡げば、一斉に背筋を正した機械達が自己紹介を行った。

「人類警護隊、D型機械人形群、筆頭の0010です！ 指揮官型ではありませんが人類

警護隊D型の中では中央個体を務めております！」

「早期警戒・偵察隊、S型機械人形群、筆頭の0300です、同じく早期警戒・偵察隊S型機械人形群の中央個体を務めています」

「……中央個体というのは？」

「部隊規模で行動する場合の情報統合機体、小隊長のようなものです」

キルヒの言葉に成程と銀次は頷く。声を張り上げたのはそれぞれ群となった塊の先頭に立つ二人。それぞれ戦闘と偵察の長なのだろう、個体としては同じなので見分けはつかない。見分けるとしたら態度カラベルを見るしかなかった。

「道中の護衛は私達が務めます、命に代えても御守りするのでご安心を……文字通り替えの利く体です、盾としてご活用下さい」

「護衛か……そうは言うが、この星はそれ程に危険なのか？」

銀次は直立不動で並ぶ機械人形を見ながら隣のキルヒに問いかける。正直この人数だけで小規模な戦争なら起こせそうな戦力だ。安全なのは良い事だろうが、ただの生物に遅れを取る様な連中ではないだろう、銀次は彼女達が一体何に備えているのか気になった。

「野生生物などは大して、私達が一人居れば簡単に対処可能です、ただ……」

「ただ、なんだよ？」

どこか言い淀むキルヒ、そこに四郎が言葉を挟むと眉を下げたキルヒが悲しそうな声色で説明した。

「絶滅した人類が戦時中に作り出した自律機械、通称「マザー」、これが姿を見せた場合は最低十人以上の機械人形が居なければ対処できません」

「マザー？」

四郎と銀次の声が重なる、聞いた事も無い兵器だ、言葉の響きはそれ程強そうには思えなかった。しかしあれ程の運動性能を持つ機会人形が十以上必要と言うのだ、並大抵の兵器ではないのだろう。

「それは一体なんだ」

「地球大戦で用いられた各国特有の超大型兵器です、個体によつて性能や脅威度は異なりますが……最弱クラスのマザーでも足止めだけで最低十名、逆に連合の作り出したマザーともなると私達機械人形がどれだけ束になった所で敵いません、中央管理局——私達の誇る最大規模の拠点、その防衛設備を最大限駆使して撃破出来るかどうかという所でしようか」

「——とんでもないな」

そんな恐ろしい兵器が周囲を闊歩しているのか、銀次が顔から血の気が引いた。このトンデモ性能の機械人形が束になつても敵わない兵器とは一体どんなものか。コイツ等なら大型艦船でさえ張り付いて破壊できそうだというのに。

「地球大戦……つていうのは大体予想がつかぬ、どうせ地球全土で戦争でもやっちゃまつたんだらう？　どこの人類も一緒だ、こっちは昔世界大戦つてのをやったけどな」

「はい、地球大戦はほぼ地球全土を巻き込んだ歴史上最も大きな戦争でした、人類がその種を途絶えさせた原因は概ねこの地球大戦にあります、マザーの駆逐対象も生産可能である機械人形よりも創造手である人間の方が優先度が高く設定されておりまして……お二人だけで活動するのは余りに危険です」

「だろぅなあ……」

「マザーとやらはそんなに多く製造、投入されたのか？」

銀次の脳裏に浮かんだのは数多の機械怪物が跋扈する世紀末、もしそんな星であるのならば正直あまり外を出歩きたい気分ではない。しかし銀次の言葉にキルヒは小さく首を横に振った。

「いいえ、マザーは文字通り国の信頼と栄光を背負った決戦兵器、凄まじい戦闘性能を誇りますがその分製造コストが私達機械人形の比ではありません、そう何機も製造できる代物ではありませんので精々国一つで一機、大国であつても小国を殲滅する為に兵装のコストが高く二機が限界でした、そのマザー達も多くが地球大戦で撃破、消滅しております」

「……じゃあもう大して残ってねえンじゃねえの？」

肩透かしだなとばかりに鼻を鳴らす四郎。確かにキルヒの言葉を聞く限り残っているマザーの数はそれ程多くないのだろう。しかし逆に言えば今存在しているマザーは全て、そんな化け物兵器が歩き回る大戦を生き残った【選りすぐりの怪物】である。正直此処の機械人形にすら勝てる気がしないというのに、銀次は恐怖に吞まれぬようにぐつと腹に力を込めた。

「詳しい話は追々だ四郎、まずは物資の回収に向かうぞ」

銀次は軽く頬を叩いてそう口にする。とんでもない怪物の存在は恐ろしいがやるこ

とは変わりない、多くが撃破されたと言うのならそれ程遭遇する確率は高くないのだから？　と銀次が問いかければ、「数年に一度探知されるかどうかです」と言う回答を頂いた。最悪見つかっても最弱レベルであれば撃退——或は遅滞防御が可能な人数、その為の護衛である。

「万が一の時は拠点の方から増援を飛ばします、お二人は兎に角逃げる事だけに専念して下さい」

「了解了解、大丈夫だって、これでも俺達調査隊なんだからよ」

軽口を叩いて歩き出す四郎、その背に銀次も続く。樂觀視する訳では無いが今まで幾度の調査を乗り越えて来た自信と自負がある、ちよつとやそつとの修羅場でくたばる程軟弱では無いと思っていた。

「では、お気をつけて」

「ああ」

「回収班——くれぐれも油断せぬよう、お願いしますよ」

「当然」

それぞれ一声を添えてキルヒは皆を送り出す。地上へと続くシャフト、その巨大なりフトに乗り込んだ回収班の面々は格納庫の機械達に見送られ、一斉に地上へと押し上げられた。銀次は開ける空を見上げながら兜を展開する。面頬が口元を覆い、頑丈な装甲

が頭部と目元を隠した。電子音と共にディスプレイが点灯、世界が色を取り戻す。

「何だかいつもこの調査より肌がざわつくな、緊張するぜ」

「最初から脅威がハッキリしているからだろう、いつもは手探りだ、それに相手がべらぼうに強いと分かっているからな……原生生物なんて比較にもならない」

野太刀の柄を擦りながら落ち着かない様子の四郎、それは銀次も一緒だった。無意識の内に腰の脇差を逆手で掴んでいる。調査中はいつもこうだった、兵装に手を添えていないと心がざわつく。

「すまないがもしもの時は頼む、無いとは思うけれど、そういう時に限って出て来るもんだ、備えるに越したことは無い」

「勿論です、何を犠牲にしても必ず守り抜きます」

淡々とした口調、しかしその裏に鋼のような硬い意志を感じさせる声で機械人形は答えた。まるで軍隊——いや、事実軍隊なのだろう。何せ戦うために生まれて来た個体ばかりなのだから。

母なる機械

地上へと到着したりリフトは大した振動も音も立てずに停止する。地上とリフトの境目は酷く曖昧だ、こんな所にも星の技術力の高さを感じる。地上に他の機械人形の姿は見えない、全て周囲に散っているのか。

「艦船の場所は分かるか？　こちらは既にマーキングを済ませてある、必要なら転送する」

「いえ、コマンダーより既に位置情報を取得しております、問題ありません」
「そうか」

返答を聞き銀次は機械人形たちに頷いて見せる。すると偵察隊のS型個体が先行し素早い動きで散って行った、ビルを飛び越え森林の中へと消えて行く。残ったのは中央個体と呼ばれた隊長のみ。

「マザーを発見した場合は直ぐに知らせます、生物であれば各々単独で仕留めますので
ご安心を」

「……徹底しているな」

そう呟いて銀次は四郎と並び歩き始める。その周囲にはぐるりと円型に展開した戦

闘個体の面々。まるでVIPにでもなった気分だ。調査隊でも指揮官が出る場合はこれに近い隊形をとることもあるが、ここまで露骨ではない。守られる側ではなく守る側であつた二人には何となく居心地が悪かつた。

暫く全員無言で歩く、周囲に目を配る戦闘体の皆は一様に真剣であつたし脅威の存在を知つた銀次達もまた万が一が起き得る場所で和氣藹々と喋つていられる程お氣樂ではなかつた。先が見えぬ探索であれば精神的な負荷を考えてある程度樂觀して氣を抜く事も大切なのだが、あくまでこれは回収のための行動、明確な終わりとは行動理由が存在していた。故にこそ氣を抜く事は一切ない。

比較的ゆつくりとした行軍で十数分、森を抜け特に何事もなく神樂の残骸へと辿り着いた面々は四郎と銀次を中心に防衛陣を構築、「私達は此処で周囲を見張ります」と口にした中央個体に礼を言つて二人はブロックの中へと踏み入つた。

実に数時間ぶりの帰還、気分としては日を跨いだ感覚だ。当然だが誰かに荒らされた痕跡も無い。

「さて……私物は持つていくとして、後はどうするよ銀次？」

「訓練通り、食料と水、パーソナルデータの消去と回収、後は使えそうなモノを全て」

「ブロックの蓄電池とかか？　こんなもん要るのかよ、連中にとつては塵みてえなモンだろ」

「連中にとつてはな、俺達にとつては貴重な予備電源だ」

散らばった貨物から必要な物資を手早く抜き取っていく銀次。私物の詰まった背囊を回収し、後は既に亡くなった同胞の背囊、その中身をひっくり返して活用する。家族の写真などがあれば回収して背囊のサブポケットに仕舞った。調査隊で死亡者が出た場合は母星である地球に戻ってから遺品を埋めるのだ。骨等は回収しない、本来であればドッグタグを拾ってやりたいところだが——死体すら残っていないのだ、土台無理な話だった。

「データの回収、削除……終わったぜ」

「了解、こつちの水の回収が終わったら出よう」

時間にして五分、取捨選択の決断は早い。調査で敵勢力の襲撃にあつて拠点を放棄しなければならぬ場合、そう言ったケースを何度も訓練で味わつて来た。故に僅かな時間で最低限の装備を確保する、その行動は手慣れたものだった。

ノズルから流れて来た水を一滴まで絞り出した銀次はボトルのキャップをきつく締め、背囊の脇に差し込む。得られた水は凡そボトルにして二本、まあこんなものだろう。パンパンになった背囊を二つ、中身はありつたけの食糧と私物、それからブロックに残つていた蓄電池や携帯補修装甲の類。鎧武者のメンテナンスに必要な道具だ、それらを優先的に掻き集め計四つの背囊をそれぞれ分担して背負つた銀次と四郎はブロック

を後にした。

艦船の外には森林を見張っている回収班の機械達、出て来た二人を見た中央個体が「もう宜しいので？」と聞く。銀次は頷いて見せた、余り欲張る気はない。此処で入手できなくても上位互換の道具が拠点にはありそうなものだ。

「ああ、大体の物は回収した、拠点に戻ろう」

「了解しました、では——」

そう言つて中央個体が帰還指示を出そうとした途端、ピタリと彼女の動きが止まった。見れば周囲を見渡していた殆どの戦闘体が不自然に静止している。一体どうしたのか、疑問の声を上げるより早く彼女達の体が動いた。

『信号受信、位置情報更新、拠点への救難信号発信完了——命令、019と020を除いた全ユニット、マザーへの遅滞防御を開始、偵察隊からの情報だ、間違いない、盾としての役割を果たせ』

『命令受諾、019及び020は中央個体指揮下を離脱、以後護衛対象の指示に従い行動します……(武運を)』

『指令、護衛対象の拠点收容支援、全制限解除、あらゆる手段で対象を帰還させる、私達は此処で足止めするから、人類を絶対守つてよね！』

『了解、最後の盾は私達が務める』

耳に届いたのは恐ろしく圧縮された言語、凡そ一秒すら必要のない会話だった。銀次は勿論、四郎も何を言われたのか分からない。恐らく大和の言葉ですらなかった、その会話を交わした戦闘個体は次々と森の中へと陰の様に溶けて消えて行く。

光学迷彩だ、銀次は呟いた。

残った中央個体が一つ息を吐き出し、振り向くと二人の顔を真つ直ぐ見て言い放った。

「敵マザーが出現しました、私達はこれより増援到着、お二人が帰還するまで遅滞防御を行います」

「マザーだ?!」

「はい、時間がありません、二体護衛を残していきます、どうかお早く」

中央個体の言葉に四郎がかみつく様に叫べば、淡々とした口調で彼女は答えた。そして中央個体である彼女も一瞬で風景に溶け込み、森の中へと消えて行く。そしてその背に何か声を掛けようとした銀次は何か強い力に引つ張られ仰け反った。

見れば飛び出さなかった二人の機械人形、それが銀次と四郎の腕を引つ張っている。

「拠点まで撤退します、敵マザー脅威レベルはⅢ、現戦力では足止め——いえ、正直に言えばそれすら難しい状況です、今の内に少しでも距離を稼ぎます」

「っ……………」

銀次は腕を取られたまま呻く。相手が機械人形だとは分かっている、連中に命なんてものは存在しない。機械、AI、しかしその感情豊かな存在が喪われるのは酷く胸が痛んだ。まるで人に対するソレだ。こうなる事は予め決まっていたのと言うのにいざその場面になると足が動かなかった。自分達が誰かの為に命を擲つならば兎も角、その命を擲たれる側に立つと——その両足が何と重い事か。

微動だにしない銀次の姿を見た機械は掴んだ腕を引き寄せ、至近距離で顔を覗き込み言った。

「鉄の体は幾らでも直せますし、替えられます、けれど貴方達人類の体はその一つだけ——私達は何度でも、幾らでも死ねます、けれど貴方達は一度、たったの一度きり、貴方達が死んだら終わりなんです、何もかも、人類も、機械人形も！」

「!」

半ば叫ぶような声色、そして真摯に自分を見つめる機械の姿に銀次は強く唇を噛む。すまないと言零し、此方をじつと見ていた四郎に頷いて見せた。そして護衛を伴った四人は拠点へ向けて一斉に駆け出した。

「敵の位置は?!」

「墜落現場から凡そ十キロ後方、詳細は位置情報を送ります」

「——反応がデカイな、詳細は分かるのかよ?」

送られた位置情報を眺めながら四郎が叫ぶ。巨大な木の根を飛び越えながらウィンドを見ると追加で幾つもの電子情報が送られて来た。内容を見てみれば巨大な蜘蛛型の兵器、その画像が目飛び込んで来る。

「大和での名称は【大断蜘蛛】オオダチツモ、六本脚に計十二門のレーザー兵器を搭載したマザーです、搭載されたレーザー兵器は上部、下部からそれぞれサブアームで制御され五メートル前後のエネルギー束として放出されます、あらゆる装甲、兵装、皮膚を溶断する高出力兵器です、レーザー兵器であるという性質上遠距離に攻撃が届かないのが欠点ですが、搭載されたプロテクト・イーリス、電磁障壁が凡そ考える限りすべての攻撃を防ぎます」「バカスカ撃たせて、自分の攻撃が届く範囲になったら一気にぶった斬るってか……良くそんな兵器と戦って今まで生き残ってたな！」

「真正面から戦う事はありませんでした、連中は機械であれば攻撃を加えない限り大抵無視します、脅威でも何でもない訳ですから、けれど今は人類の反応がある、だから……」

「ツ！」

森林を駆け抜ける四人の背後から凄まじい轟音が鳴り響く。思わず振り返れば緑色の葉傘、その向こう側に幾つもの大樹が宙を舞っていた。凡そ非現実的な光景、隣で四郎が息を呑む。

「敵のレーザー兵器です！ 足を止めてはいけません、走ってッ！」
「クソ、数年に一度じゃなかったのか……！」

悪態を吐き更に加速する。しかし付随する二体の機械人形に対して銀次達の纏う鎧武者の性能は御世辞にも高くない。調査隊に在籍していた頃にすら出していなかった最高出力、出力回路を脚力に全て切り替え自壊寸前まで酷使する。まるで矢の様に駆ける四郎と銀次、しかしその横に並ぶ彼女達からすれば大した速度ではない。凄まじい速度で駆ける鎧武者、その両足関節部位が発熱し徐々に赤色を帯びる。

「！ 拠点より増援到着、遅滞防御を行っている部隊と合流しましたッ！」

「早いなッ——キルヒ、あいつ、俺達に内緒でぜってえ予備隊を尾行させていたぞー！」
「味方が合流出来たなら文句は言わないさー！」

これで幾分か連中の生存率が上がれば儲けもの——そう思った次の瞬間、フツと四人の頭上に影が落ちた。自分達を中心に十数メートル程の大きな影、一体何だと頭上を見上げた瞬間。

自分達を見下ろす六つの赤いモノアイと視線が交差した。

「……ッ!?!」

四郎が叫んだ。同時に恐ろしく大きな機体が森林に落下、地盤を捲り上げ樹々をなぎ倒す。六本の足が轟音と共に土柱を発生させ、凄まじい風圧が体に叩きつけられた。そ

の力に抗う事も出来ず四郎と銀次の体が後方へと吹き飛ばされる。地面に叩きつけられる寸前で警護隊の二人が銀次と四郎を抱き留めた。土埃が視界を遮り世界が鮮明さを失う、しかしその中で機械人形だけはじっと落下してきた影を凝視していた。

『ツ……キロ単位の跳躍移動なんてツ、情報に無かったツ!』

『救難信号ツ、此処で一秒でも多く足止めする!』

抱き留めた四郎と銀次を背中に回し、二人の機械人形がマザーへと立ち向かう。土埃が晴れると巨大な機体の全貌が見えてきた。

初めてこれ程巨大な兵器を見た、惑星間移動を行うための艦船ならば兎も角自立型の戦闘兵器として生まれた物体の中で凡そこれ程の大きさを誇る兵器を銀次は知らない。その巨大さに圧倒された、見惚れたと言っても良い。

太く機械的な六本足、胴体はズんぐりとしていて本当に蜘蛛のような形をしていた。しかし腹部と背部に設置された幾つものサブアーム、その先端に備え付けられている長方形の射出口——ソレの存在が兵器としての存在感をこれでもかと言う程に醸し出していた。殺す為に創られた兵器、機械人形は人に似せてつくられた存在。だからこそ役割に応じた性能とユニットを持つ、ある意味親近感を沸かせる為の形。

けれどこの機械は違う、ただ効率と恐怖だけを追い求めた一つの究極系。マザーだ、コイツが大断蜘蛛だ。銀次はそう確信した。

「逃げて下さいッ！」

マザーへと駆ける警護隊が銀次達にも分かる言葉で叫んだ。銀次が意識を取り戻すと四郎が銀次の腕を掴み、「逃げるぞ！」と叫んだ。銀次は座り込んだ状態から慌てて立ち上がり、そのまま後ろ髪を引かれる思いで駆け出す。

全力で駆けながら背後を見れば六つの赤い目は自分と四郎——いや、見間違いでなければ銀次を注視していた。標的にされたのか、ひやりとした汗が背中を伝う。足元まで接近した警護隊の二人は一気に飛び上がり、銀次へと向かう六つのモノアイの前に飛び出す。少しでも自分達に注意を向けせようと必死だった。

『視界機能を奪う、脚を！』

『分かってるッ』

飛び上がった一人はモノアイに向けて手のひらを翳し無数のエネルギー弾を放出した。銀次達の星では見なかった技術だ、それは細長い弾丸のような形でマザーのモノアイ周辺を一気に攻撃、目の眩む光量を生み出した。

もう一人は六本脚の内的一本、その関節部位目掛けて腕を振るう。直前で手の甲が白い光に包まれ甲高い音と共に火花が散る。驚いた事にただの手刀が鋼鉄をも両断し得る攻撃になっていた。

しかし光が収まった時、向こう側に見えたモノアイは——全くの無傷。その結果に思

わず顔が歪み、構わずエネルギー弾を撃ち続けようとする警備隊。しかし直前でサブアームが蠢きモノアイに飛びつこうとした彼女を青白い光が両断した。

綺麗に上半身と下半身が分かれ、無数の部品が腸から飛び散る。

『がッ、あッ——』

空中で両断された彼女は何度か口を戦慄かせ、そのまま地面に残骸となつて墜落。土埃をあげて転がった下半身と上半身、それを腹部に搭載されていた兵装が幾度も両断、粉々にしていく。機械人形を壊すだけに留まらず地面に深い傷跡を残すエネルギー兵器の威力は凄まじい。

脚に取り付いたもう一人はその光景を目にしながら決して恐れず手を関節部位に押し入れた。収束したエネルギー塊は動力炉に直結し凄まじい熱量を誇っている。それはマザーの弱点部位、関節を覆う合金ですら溶断できる程。しかし如何に可能とは言え時間が掛かる、彼女もまた鬱陶しそうにマザーが上部のサブアームを動かし、無造作に打ち下ろされた打撃に顔を捉えられ地面に叩き落とされた。

『かはッ』

直前で顔を腕で守ったモノの、守った腕ごと破壊される。地面に叩き落とされた機械人形に無数の攻撃——エネルギー刃が殺到。原型も残らぬ程に引き裂かれ、両断される。しかし立ち上る砂塵の中から左足と右手、ついで胴体に深い傷を負った警備隊が飛

び出す。彼女は飛来したエネルギー刃、その直撃を辛うじて避けていた。

『倒そうとなんて思わない、けれど、せめて人類あの人たちの逃げる時間を——ッ!』

動く残った一本の足で跳躍、足りない分は垂れ下がった右腕を千切り、それをマザーの表面装甲に突き刺す事で足場とする。マザーは彼女を見ようとしもない、そもそも電磁防壁を発生させていない事から彼女を敵と認識しているかすら怪しかった。

先の一撃以降、マザーは背を見せ逃げ惑う二人を注視している。

『こつちを……見ろッ、デカブツ!』

咆哮、そして彼女は自分の残った足を蹴り潰す勢いで跳躍し——マザーのモノアイ前面に飛びついた。そしてへばり付く様にして視界を遮った彼女は自分の心臓、動力炉に向けて自分の手を突き入れる。握り締めるのは機械人形の命、全てが詰まっている核、動力炉。

鬱陶しそうに顔を振ってサブアームを動かすマザー、その様子を見て思わず笑う。

『人類に尽くす——悪くない、ここ数十年で一番良い気分だ』

握り締めた動力を一息に潰し——爆散。

行き場を失ったエネルギーがその場で四方八方に飛び散る。白い光と火炎がマザーの機体を炙り、爆音が周囲に鳴り響いた。その爆圧に内臓を揺さぶられながら銀次が叫ぶ。

「四郎ッ!」

「ああ、分かつてるよクソツタレ!」

最後の盾が消えた。

立ち上った白煙を突つ切る様にしてマザーが動き出す。奴には傷一つない、最後の自爆は電磁障壁によって完全に防がれていた。彼女達二人が稼いだ時間は一分にも満たない、その時間で稼げた距離は如何ほどか。銀次は死んでいった二人の機械人形に何とも表現し難い申し訳なさとしさを抱き、叫びながら中巻野太刀の柄を握った。

「あんな馬鹿デカイ体のくせに、何であんなに速く動けるんだよ!」

「デカけりや遅いなんてのは前時代的な考えだッ、構えろ四郎、来るぞオッ!」

死んだ二人への感傷は直ぐに消える、次の瞬間には自分が死ぬかもしれないという恐怖。巨体が六本の脚を器用に動かし森林を壊しながら突つ込んで来る。そしてその距離が数百メートルにまで近付くとサブアームからエネルギー刃を射出した。

実体を持たない兵装特有の射撃音、プラズマが瞬き機械の正確無比な斬撃が銀次を襲う。避けようなんて思わない、機械人形ならば兎も角人間の反応を遥かに上回る速度で飛来する攻撃だ。

銀次は背を見せながらも中巻野太刀を抜刀、振り向きざまに持ち替え、逆手でその長い刀身を地面に突き刺した。そしてぐつと腰を落として野太刀を掴み衝撃に備える。

瞬間、凄まじい閃光と衝撃が鎧武者の表面装甲を叩く。エネルギー刃は地面に突き刺した盾代わりの野太刀に着弾し、炸裂した。

「ぐあッ！」

地面に突き刺した野太刀が震え、そのまま地面ごと後方に吹き飛ぶ。きつと重心を低くしていなければ空高く打ち上げられただろう。地面を転がりながら、しかし銀次は決して野太刀を手放さない。

皮肉な事にこの星の兵装は銀次と四郎の持つ旧型兵装との相性が最悪だった。エネルギー刃をそのまま兵器として運用する技術。銀次の母星である地球でも開発されていた兵器だが、地球ではエネルギー変換効率の悪さから実弾兵器の利用が殆どだった。故に対マザー用兵器としてただの鋼鉄、合金に耐エネルギーコーティングを施しただけの武器など想定されていない。予備兵装である中巻野太刀の特徴は『ただ頑丈である』事のみ、どんな過酷な状況だろうと使用できる兵装として選ばれたソレはマザーのエネルギー刃と競り合っても尚健在だった。

「銀次ッ！」

四郎が吹き飛ばされた銀次を見て足を止める。そして倒れ伏した銀次に向けて次々とエネルギー刃が射出された。どれか一つでも掠れば致命傷になりかねない、四郎は野太刀を抜刀し銀次の前に飛び出す。

「おおおオオオッ！」

叫び、飛来するエネルギー刃に向けて野太刀を奮った。何かを斬るような感触はない、兎に角凄まじい衝撃と閃光が視界と体を染める。一発弾だけで精一杯だった、弾いた瞬間に四郎の体が後方へと弾き飛び銀次を巻き込んで転がる。転がった拍子に続くエネルギー刃が地面に着弾し、土煙が盛大に舞った。辛うじて避ける事が出来た、殆ど幸運だったと言って良い。

「げほっ、かつ、四郎、生きているか!？」

「ぐッ……当たり前だが、死んでたまるかよ……!？」

二人は互いに手を貸し合って立ち上がる。そして土煙を割く様にマザーが二人の前に立ち塞がった。追いつかれた、背中を見せた所でエネルギー刃を射出されるのが目に見える。四郎と銀次は中巻野太刀を構える。自分達を見下ろす赤い瞳、まるで巨大な建築物に戦いを挑む様な気分だった。

「ははは……やべえな銀次、こんなピンチ、今まであつたか?！」

「いや……こんなに追い詰められた状況は初めてだ」

銀次と四郎は互いに肩を並べて兵装を構える。しかし目の前の敵に比べて自分の持つ武器の何と頼りない事。まるで恐竜相手に爪楊枝で挑む様な無謀、自然恐怖に足が竦む。

しかし挑まねばならない、生き残る為にも時間を稼がなければ。

ヒトならざる者達へ

そう考えていた四郎と銀次の元にドンツ！と大気を震わす火砲の音。次いでマザー側面に凄まじい爆音と火炎が舞った。

「増援かッ!」

『死んでも守れッ、自壊してでも足を止めろオッ!』

轟音と衝撃に四郎と銀次はその場に這い蹲り、撃ち出された方角に目を向ける。其処には幾両もの戦闘車両と大勢の機械人形達の姿。恐らく足止めに赴いた警護隊と拠点から出動した増援部隊だ。

次々と轟音が鳴り響きマザー側面に砲撃が着弾、フロートタイプ的高速戦車、それらが一列に並んで森林の中を駆け巡っていた。マザーは立て続けに着弾する砲撃にモノアイを狭める。電磁障壁で直接的な被害は防いでいるものの衝撃は貫通するらしい。雨の様に降り注ぐ榴弾に六本脚が沈んでいた。

電磁障壁にとってエネルギー兵器は最も対応し易い武器、対して実弾は実体を持つ以上衝撃を逃がす事が出来ない。こいつが出て来たと聞いて直ぐに用意したのだろう、流石はAI、素晴らしい対応だ。

「銀次様、四郎様！ 撤退を、お早くッ！」

「銀次！」

「ああ！」

追い付いた機械人形の一人が叫び、銀次と四郎は背を向けて一目散に逃げだす。野太刀を納刀し振り向きもしない、この時銀次と四郎の二人は理解していた。自分達ではこの巨大な怪物に勝てない、寧ろこの場にいるだけで機械人形達の戦術を狭めてしまう。自分達は足手纏いなのだ、銀次と四郎はマザーという脅威の存在をその肌で感じ自分達の役割を良く理解していた。

背後から鳴り響く轟音、地面の碎かれる音、火薬の炸裂する音、エネルギー刃が射出される音。機械人形達は恐れずマザーへと立ち向かう、その背に人類を背負っているとただで彼女達は死を恐れぬ鋼の盾となるのだ。

今となつては貴重な兵装を惜しまず注ぎ込み、例えエネルギー刃で割かれ六脚で踏み潰されようと動力炉の動く限り戦い続ける。マザーは漸く見つけた人類を駆逐しようと駆け出そうとするも、周囲の機械人形が決してソレを許さない。

『ッ——跳ぶぞ、何が何でも撃ち落とせッ！』

『火砲、装填完了した車両から良いから、斉射して！』

次々と繰り出される捨て身の攻撃にさしものマザーと言え碌に動く事が出来ない。

何よりエネルギー兵装が主力となったこの星で骨董品とも言える実弾兵装を積んで来たのが効いていた。動こうとする度に横合いから砲撃を加えられ衝撃に足が取られる、人間で言えば歩こうとする度に横から硬球が飛来して来るようなモノだ。マザーはその環境を嫌い、大分離れてしまった人類との距離を詰めようと跳躍姿勢を見せる。

しかしさせるものかとマザーの巨軀に砲撃が殺到、車両や拡張兵装に搭乗していない機械人形は必死の形相でマザーへと取り付き自前の兵装で電磁障壁を破ろうと躍起になる。跳躍どころか歩行一つ許さない、そんな気概が機械人形から感じられた。

銀次と四郎は必死に駆ける。基地まではもう直ぐだ、熱量度外視で駆けた甲斐あつて来た時の半分近い時間で拠点周辺に到着した。

見覚えのある大樹を目視した時、不意に銀次は泣きたくなつた、別段恐怖に吞まれた訳でも安堵したからという訳でもない、ただ自分達の背で健気に命を投げ捨てながら数秒を稼ぐ機械人形達を想い、泣きたくなつたのだ。故郷にいたAIとは違う感情を持つ人形、それは情を抱くには余りにも出来過ぎた人形だった。

「クソ、くそが、なんと情けない……!」

らしくもない汚い言葉を吐き捨てる。まるで、まるで人間を盾にしているような気分だった。連中は機械なのに、どうしようもない感情が胸に渦巻いた。ああ、こういう感情を抱きたくないからこそ人は機械にあんな、豊かな情を与えなかつたのかもしれない

い。

もしそうだとしたらその考えは正しかった訳だ、今自分は敵わないと知りつつもあの戦場に戻りたくて仕方がない。罪悪感と言う名の情が銀次を駆り立てていた。

そんな銀次の胸の内を理解してか、四郎は駆けながら銀次の背を軽く叩く。

「銀次様！ 四郎様！」

大樹の下、三十人程の機械人形を招集させたキルヒが二人を見つけて叫ぶ。銀次と四郎は彼女の元に転がり込む様に駆け三十人の機械人形が二人を守る様に壁となった。周囲には四脚車両や二足歩行の人型拡張兵装まで用意されている。その数は格納庫で確認した数に並ぶ、完全に総戦力で迎え撃つ布陣だった。

「拠点の中へ、下層ならばマザーと言えど追って来れません！」

「お前達はどうするんだ!？」

「此処でマザーを迎え討ちます」

そう言つてぐつと拳を握るキルヒ。その手には青白い粒子が舞っている。恐らく銀次が知りもしない未知の兵装、「勝てるのか」と銀次は自分でも驚く程力なく問いかけた。

「勝たなければなりません、人類を探索する上でいつか必ずこうなると分かっています、故に準備は万端です」

力強く頷くキルヒ、尚も銀次は何かを言い募ろうとして——轟音。慌てて振り向くと所々破損したマザー、大断蜘蛛が銀次を見ていた。着地した地面は抉れている、擦れた建物は半ばから倒壊していた。

『ッ、弾薬は気にしないで、撃ち尽くしなさいッ!』

キルヒが叫ぶ、銀次には理解出来ない言語だったがソレが開戦の合図だった。一斉に火を噴く火炮、連射砲、レーザー兵器は無く全て実弾兵装。大小様々な弾丸がマザーに飛来しその装甲を強かに打ち付けた。サブアームに着弾した砲撃は薄い装甲を拉げさせ、破壊する。支部の総火力は凄まじいの一言だった。

「銀次ッ! 何してんだ、早く来いッ!」

四郎が叫ぶ、見れば既にシャフトの上に移動を終えていた。下に降りるのだろう、そうすれば安全なのだ、それは理解している。一際強い砲音が鳴り響いた、見上げると大樹の周辺、廃墟と成り果てていた筈の建築物、その屋上から細長い砲筒が顔を覗かせている。防衛設備、それもかなり大規模な。備えていたと言うのは本当だった、電磁障壁対策の実弾防衛設備、巨大な砲弾はマザーの脚部、その一本を轟音と共に吹き飛ばす。

支えを失ったマザーが頭から地面に突っ込み土埃をあげる。先の戦いで随分深手を負ったのか赤いモノアイが力なく点滅し幾つかの光が消えた。けれど残った瞳はじつと銀次を見つめて放さない。

奴は決して止まらない！

不意にマザー背部にあつたサブアームが動き銀次に狙いを定めた。それまで周囲の機械人形に向けられていた兵装が一斉に銀次を見る。奴は火砲を撃つ機械人形には目もくれない、ただ銀次だけを見つめている。この時点でマザーは機体生存を放棄、ただ人類を殺す為だけに動いていた。

動力炉の回路を電磁障壁と兵装のみに充て後は全て装甲に任せる。強かに体を打ち据える鉛の雨に耐えながらマザーは最後の人類に向けてエネルギー刃を射出した。

それを見た周囲の機械人形、銀次を取り囲んでいた彼女達が一斉に動き始める。

銀次を守る様にエネルギー刃と銀次の前に立ち塞がったのだ。

銀次は知らぬ事であつたが彼女達はほんの数分前に対エネルギーコーティングを施していた、一人だけでは防げないが数人纏めて掛かればマザーのエネルギー刃すら止め得る粒子拡散機能を持つ。貴重な精密機械の塊である機械人形を鋼鉄の壁とする、資源どうこういう前に銀次にはソレが我慢出来なくなつていた。彼女達は機械人形として扱うには余りにも人間的でありすぎた。

気付いた時には自分の前に立ち塞がっていた機械人形達を突き飛ばし、中巻野太刀を抜刀していた。

『銀次様!? どうしてッ!』

此方を見ていたキルヒがぎよつとした表情で何かを叫ぶ、しかし銀次は止まらない。この行動が彼女達の足を引っ張るだけと、その意思を無為にする行為だと理解していながら止まらなかった。

突き飛ばされた機械人形の呆然とした表情が視界に映る。野太刀を掴む拳は強く握り締められていた。

後悔はない、躊躇いも無い、ただマグマにも似た熱情だけが存在していた。

「うおおオオオオッ！」

叫び、確りと地面を両足で踏み締めながら野太刀を振り被る。合戦刀法天城式、唐竹割と呼ばれる上段からの振り下ろし。

凡そこれまで振るって来た一太刀の中で会心の手応え。肩、腕、腰、脚、全てを連結させた渾身の一撃、ソレは飛来したエネルギー刃と激突し——ソレを中ほどから両断した。

切り裂かれたエネルギー刃は真つ二つに割れ、銀次を避けるように左右へと飛翔、樹々に激突し霧散する。

斬った——ただの鋼鉄の塊である旧兵装で、エネルギー刃を。

その感動を味わったのはほんの一秒にも満たない時間、続く第二、第三のエネルギー刃が銀次の視界に飛び込んで来る。直撃は許されない、掠るだけでも致命傷。振り下ろ

した状態から手を返し、切り上げる様に野太刀を振るう。今度は斬ろうとは思わない、衝突したエネルギー刃を真上にカチ上げる形で躲す。雄叫びを上げながら全身の筋繊維を軋ませ、エネルギー刃を僅かに逸らす事に成功した。刃の上を滑る様に移動したエネルギー刃は盛大に火花を散らし虚空で炸裂。

息を吐く暇はない、数瞬もせずに三撃目が迫る。既に銀次の手は野太刀を掴む事さえ困難になっていた。エネルギー刃を連続して受けたのだ、その衝撃は骨の髄まで銀次の体を痺れさせた。

力の入らない腕で無理矢理野太刀を動かし、自分の正面に構える。今度は迎え撃つ余力すらない、ただ受けるだけの姿勢。体を横向きにし野太刀を右肩に添えたまま腰を落とす。

そして衝突——炸裂したエネルギー刃は中巻野太刀、そして銀次の鎧武者、その右肩装甲を削り吹き飛ばした。

「ぐあッ！」

口から空気が漏れ、体が千切れるのではないかと思う程の衝撃が背中を突き抜けた。

銀次に突き飛ばされた機械人形が悲鳴を上げる。

銀次は凄まじい勢いで後方に吹き飛ばされ、握っていた筈の中巻野太刀が回転しながら地面に突き刺さった。

土埃をあげながら地面を転がった銀次の元に機械人形が殺到する。今度こそ壁の役割を果たさんと銀次を庇う様に背を見せ、残った数人が動かない銀次を引き摺ってシャフトの上まで移動した。銀次はピクリとも動かない、衝撃は確かに脳を揺すり意識が飛びかけていた。

三十人の塊が銀次を庇う中、ゆっくりとシャフトが降下を始める。銀次に攻撃が殺到したお蔭で仲間の火砲が次々とマザーに突き刺さった。皆必死の形相でマザーを攻撃している、目の前で人類が死に掛けた、それだけで機械人形が激怒するには十分だった。既にマザーに反撃する余力は残っていない。煙を噴き上げながら脚を折るマザーを眺め銀次の視界はシャフトの中へと潜っていく。

「クソ、この、馬鹿野郎がッ、何やってんだよ銀次ッ！」

完全に地上が見えなくなり、地下へと降下していくシャフト。そんな中で叫びながら四郎は固まって右往左往する機械人形を突き飛ばし、銀次の体に駆け寄った。銀次の体を見下ろすとエネルギー刃が炸裂した右肩を中心に煤けている。肩部の装甲は完全に剥がれ落ちていた。

「ぐッ、か……い、つてエ」

「当たり前だろうが！ 右肩バツクリ斬られてやがる、これで痛くねえ訳ないだろうが！」

残った装甲版も無理矢理剥がし、四郎は削られた右肩の具合を見る。幸い傷は骨まで達していない、僅かばかり肩の表層を撫でただけだ。これで野太刀が完全に折れていれば首まで獲られただろう。

四郎は腰部に装着されていた小型収納口から一本のケースを取り出した。大きさは中指程で樹脂で保護されたケースの中には注射器が一本入っている。プラスチックの保護ケースを外すと四郎は肩の砂塵を手で払い、一息に銀次の右肩周辺に突き刺した。プシュツ、と音が鳴り響き中の液体が銀次の体に流れ込む。痛みに呻く銀次に「我慢しろ」と言い空になった注射器を放り捨てた。硬質的な音を立てて注射器は床を転がっていく。

「モルヒネだ、直に良くなる」

「悪い……」

「そう思うなら無理をすんじゃねえ……!」

傷は決して深くない、しかし浅くもない。シャフトが停止すると機械人形達が一斉に銀次に群がってメデイカルセンターへと駆け出した。一人一人が銀次のどこかしらを支え、車両や兵器のなくなつた格納庫を機械人形が一塊になつて駆け抜ける。銀次は機械人形達に抱えられながら小さくなつていく四郎を眺め、それからゆっくりと意識を闇に落した。

☆

どれだけの時間眠っていたのだろうか？ 恐らく一時間か、二時間程だろう。

銀次が目を覚ました時、着用していた筈の強化外骨格は無く、生身のままでベッドに横たわっていた。体中にパッチが張り付けられ、枕元のホログラムモニタにはバイタルサインや各種体調を現わす信号が表示されている。

銀次は靄の掛かった思考のまま周囲を見渡し、そこがいつか運び込まれたメデイカルセンターの中だと理解した。白い部屋だ、白く濁りの無い場所、等間隔に並べられた清潔感のあるベッドにメデイカルアーム、向こう側には再生槽であるカプセルも見える。

「……ああ、そうか」

銀次は一瞬、何故こんな場所にいるのだろうかと考え、それから自分のした事を思い出した。マザーのエネルギー刃を真正面から受け止め肩を焼かれたのだ。そう思っ自分分の右肩に手を這わせると人工皮膚の感触が指先から伝わって来る。どうやら治療済みらしい。

ゆつくりと上体を起こしパッチを剥がす、途端ホログラムモニタが信号途絶の音を鳴らすが無視した。メデイカルセンターの内部はそれなりに広い、しかし元々人類用に創

られたものなのだろう、使用された痕跡は全くと言って良い程に見られなかった。

ぺたぺたと裸足で歩く、今銀次が着用しているのは緩い患者用の衣服だ。ゆつくりとした足取りでメデイカルセンターを後にすると、すぐ目の前に巨大な動力炉が現れた。

機関部だ、人類の治療を目的としたメデイカルセンターと拠点の心臓である機関部は隣接していた。カプセルを動かす為か、銀次には理由が分からなかった。

これ程巨大な動力炉は初めて見た、そつと動力炉に足を進めながら巨大な機械の塊を見上げる。

神楽のウィル・Oエンジンなんて比較にならない、正に山の如く。空間そのものが恐ろしく高く広いというのもあるが、その部屋に対して半分近くが動力炉に埋められていた。ソイツは低い唸り声を上げながらも今尚稼働している。これ一つで拠点の電力諸々を補っているのか。そう思っていたがどうやら他の機能も隣接しているらしい。良く観察してみると動力炉の両脇にはそれぞれ特徴的な空洞があった。現在はシャッターが降りてしまっているがベルトコンベアまである、恐らく何かを投入する場所だ。

銀次にはその形に見覚えがあった、確か機械人形の生産工程、本来機械人形は凄まじい工程を踏んだ上で生産される精密機械である為、殆どがセル生産で行われる。汎用型の安価な機体であればラインで組み立てられるが、この星に存在するような機械人形であれば全て一度に組み立てられるセル生産方式となるだろう——その一つの極みとし

て『ボックス』と呼ばれる生産方法がある事を銀次は知っていた。

機械人形を小さな空間で一から全自動で組み立て、生産してしまう方法だ。その製造機械が四角く、正に箱としか表現できない事から大和でも『ボックス製造法』と呼ばれていた。

目の前の機械はその製造機械に酷似している。

だがもう片方は何だ、銀次には欠片も見覚えが無かった。

そんな事を考えていると不意に機関部の中にアラートが鳴り響いた。何だと思つて周囲を見渡せば、天井からクレーンのようなモノが降りて来て、機関部右端のベルトコンベアに良く分からない機械の山をザラザラと落とす。

機械の山はゆつくりとベルトコンベアに運ばれ、シャッターを開いた黒い窪みの中に消えて行つた。そしてクレーンは再び天井に戻り再び一分程すると機械の山を持つて戻つて来る。銀次は暫くその様子を訝し気に眺めていたが不意に機械の山から人のようなモノが飛び出してゐる事に気付き、慌ててコンベアに駆け寄つた。

「お、おい！」

流れていくコンベア、機械の山に埋もれた腕を何とか掴み渾身の力で引つ張る、すると灰色の中から千切れた腕が飛び出した。

「！」

思わず尻餅を着いてしまう銀次、腕は力なく地面を転がる。間違いない、人の腕だ。けれど肉体ではない——それは機械人形の千切れた腕だった。断面からは配線が覗きフレームも見える。

銀次は装置を見上げて理解する——コイツは融解炉だ。

即ち不用品を分解して蓄える貯蓄庫、そして流れていく機械人形達が自分を生かす為に死んだ連中だという事も予想出来た。先の戦いで破壊された機械人形達だ、この拠点の機械人形達は破損した彼女達を融解炉に投じ資源として再利用していた。

「ッ……」

銀次は勢い良く立ち上がると地面に転がった腕を拾い上げる。そして自分の額に手を近付け、一言「すまない」と呟いた。何とも表現し難い罪悪感が胸に燦る。銀次は次の山を待ち、クレーンが再び機械の山をベルトコンベアに落すのに合わせ腕をそつと戻した。融解炉へと運ばれて行く残骸を見る。一体何人死んだのだろうか、銀次は眉間に皺を寄せて険しい表情を浮かべた。

「銀次様！」

そうやって運ばれて行く機械の山を眺めていると機関部の扉が開きキルヒが慌てた様子で飛び込んで来た。振り返って彼女の姿を目に入れると、キルヒは銀次に飛びついたり否や体のあちこちを手で触って来る。

「お、おい、何を」

「報告で既に治療済みとは聞いていましたが、いえ、やはりお怪我はどのようなかと気になって……痛みのある部位はありませんか!？」

「大丈夫、大丈夫だよ」

キルヒの切羽詰まった様子に一步退きながら答える。暫くキルヒの「心配しました」とか、「もうあんな事はしないで下さい」という小言に近い言葉を聞きながら銀次は頷く。余程心配させてしまったらしい、彼女の瞳は真つ直ぐ銀次を見て離さなかつた。

「メデイカルセンターからの信号が途絶えて本当に、驚きました、お願いですからどうか無茶はしないで下さい、銀次様に何かあつたら私達は——」

「……ああ、悪かつたよ」

俯いて悲しそうな表情を浮かべるキルヒ。銀次はそんな彼女の頭に手を乗せてぐりぐりと撫でつける。彼女は銀次の行為を何も言わず受け入れていた。嫌という訳ではなさそうだが、心なしか表情が柔らかくなつた様な気がする。

こうして見ると益々機械人形だなんて思えない、髪の毛の質感も肌の弾力も人間そのものだ。言葉を交わせるようになってからはその感情がどんどん大きくなっていく。銀次はその感情から目を逸らす為にキルヒから手を放し、じつと此方を見つめて来る瞳から目を逸らして問いかけた。

「四郎はどうした?」

「上で回収作業を、私達が行うと言ってお断りしたのですが、『俺だけふんぞり返って働かないのは癪に障る』と仰って半ば無理矢理参加しています、一応危険のない小型、機械人形の残骸回収をお願いしました、残骸の下敷きにならない様班員と共同で作業して頂いています」

「そうか」

銀次はその言葉を聞き再び動力炉を見上げる。銀次の視線を追ったキルヒも動力炉を見上げ、「此処は拠点の心臓部です」と口にした。

「知っている、機関部だろう? 何故メデイカルセンターの隣に機関部を作ったんだ」

「再生槽の消費エネルギーが大きい為です、後は機関部ですから、当然防壁の硬度や防衛設備は他の階層と比べて強固なものとなっております、メデイカルセンターは人類しか使用できませんから、万が一の時に備えての壁代わりという訳です、人類が殺害されるのも、機関部を破壊され拠点が機能停止するのも、私達にとっては同じ事ですから」

「……納得したよ」

呟き、銀次は視線をずらして融解炉を見る。こうして話している間にも残骸は次々とクレーンで運ばれて来る。時折機械人形の千切れた頭部なども見え隠れし、隣のキルヒに思わず問いかけた。

「何人死んだ」

声色は自分でも分かる程に沈んでいた。ぐつと拳を握って融解炉を眺めれば隣のキルヒは銀次の横顔を眺めたまま、ポツリと力ない声で答えた。

「被害としては全体の二割程です、破壊された車両、拡張兵装含めた数は十両にも届きません、一カ月も頂ければ戦力の再生産は可能です、ですから」

「俺は拡張兵装の数を聞いているんじゃない、何人——機械人形は死んだんだ」

「……未だ確認中ですが、恐らく四十三【体】の同胞が破壊されました」

挙げられた具体的な数字に銀次は想いを馳せる。少ない多いの話ではない、それだけの数の機械人形が自分を生かす為だけに死んでいったのだ。胸が締めつけられる思いだった、ただ悲しかった。「俺達が全部お前達に任せて外に出なければ、こんな被害は出なかったんだろうな」と銀次は吐き捨てる。しかしその言葉を聞いたキルヒは空かさず反論した。

「人類を保護する上でマザーとは必ず戦闘になりました、私達も徘徊するマザーと対決する為に今日まで戦力拡充を図って来たのです、遅いか早いかの違いでしかありません」

「だが死ぬ必要のない奴まで犠牲になった——なあ、この星の技術で破壊された機械人形の記憶を蘇らせる事は出来ないのか？ それを新しい素体に換装すれば、疑似的では

あるが生き返らせる事が出来るのだろうか？」

「……以前の、旧型機械人形ならば可能でしょう、しかし——今の私達には人間と同じ【感情】を授けられています、ソレは理屈としては人間と同じものです、新しい体に以前の記憶をインストールしたとしても人格が歪になるだけ、知らない誰かの記憶があるという状態になるだけなのです」

淡々とした口調、しかしどこか悲しみの滲み出る声。根本的に、私達は個人であり群です。キルヒはそう言つて自分の腕を擦つた。

「機械人形は感情を持ちます、記憶を持ちます、しかし人間ではありません、私にはキルヒという個体名が与えられています、これはコマンドーの素体を持つからという理由でしかありません、大多数の機械人形は記号と数字のみを与えられ機能停止するまでの時間を過ごします、私達は道具なのです銀次様——どうか私達に情を持たないで下さい、人と人形は同列ではないのです、御身は貴重で尊い者なのです、私達は【人の形をした物】に過ぎません、【者】ではないのです、どうかご理解ください、私達の生きる導は貴方達人類なのです」

そう言つてキルヒは頭を下げる。銀次はそんな彼女を見て唇を噛み締めた。そして思わず彼女の肩を掴み、言い放つた。我慢が出来なかつた、理解が出来なかつた、情を持つなど言うのならは何故。

「じゃあ、じゃあどうして——この星の人類は機械人形に感情なんてモノを与えたんだ！」

叫びは機関部に反響した。自分自身でも驚く程の音量、それは銀次の感情の爆発そのものだった。機械人形と言うのはもつと無機質なモノだ、元々ロボットというのはそういう風に創られるモノなのである。人間に寄せる意味など無い、ただの自己満足だ。ましてや其処に感情などという人間特有の機能を加えるなどと。

「無機質で心の無い機械ならば相応に扱えただろうさ、我が母星と同じく！　だがこうにも……こうにも人に近くては、余りにも……ッ」

感情のままに吐き出し、言葉が詰まった。人間は感情的な生き物だ、情を持つなど言われても此処まで健気に尽くし、想われる存在を無下に扱う事など出来ない。そんなのは彼女達を作る前から分かる筈だ。人類は愚かではあるかもしれないが決して馬鹿ではない、ましてや感情を持つAIを作る様な才知溢れる人間が気付かない筈が無いのだ。

感情を創るには感情を理解しなければならない。

そこまで「人」を理解していて尚、何故このように機械人形を作ったのか。

キルヒは悲しそうな表情で銀次を見た。

「……私達機械人形は人類を愛します、創造主というのは道具をその様に創るのでしょ

う、けれど私達は人に愛される事を望みません、それは余りにも分不相応というもの、私達は道具のままが良いのです、道具のままが良いのです——私達の為に人類が傷付く姿は見たくありません、それが体であれ、心であれ」

「……愛するというのは、愛される事は望まないのか」

「そういう風に創られていますから」

「——理解出来ない」

心の底から絞り出した様な声。

最初彼女達と出会った時は驚愕した、人と同じ形を持つ存在が在ったと知り興味深く思った。同時に彼女達が人類の延長線上だと理解しそれ相応と扱った。けれどソレは道具として扱うには余りにも人間的であり過ぎた。

銀次はその苦悩を表情に出す、するとキルヒは淡々とした口調で言った。

「良いのです」

俯いた銀次の耳に澄んだ声が届く。ふっと顔を上げると、キルヒは今まで銀次が一度も見た事のない様な表情をしていた。

彼女は笑っていた、悲しそうに笑っていた。

その表情は何と表現すれば良いのか。

彼女は一体どんな感情を抱き、その口で受け入れる言葉を紡いだ？ どこか退廃的

で、それでも本当に限界まで踏みとどまっています。まだもう少し、もう少しだけ頑張れる。

そんな事を既に何千回、何万回と繰り返した様な。

「銀次様は知らないでしょう、私達が過ごしたこの百五年の月日を」

そうやってキルヒはゆつくりと手を伸ばす。微塵も警戒を抱かなかつたのはこれまでの彼女の言動と態度から無条件の安心を抱いていたからか。キルヒの手は銀次の頬をゆつくりと——まるで繊細なガラス細工に触れる様な手つきで撫でた。

「最後の人類を見送ってから絶望の中を漂い、何度も挫け掛けました、自ら機能停止を選ぼうと思った事は一度や二度ではありません、実際機械人形としての役割を放棄し、鉄屑と成り果てた同胞が何人も居ました……この百五年の間は正に地獄のようで、人類の存在しない星は酷く寒かったです」

キルヒの手のひらは氷の様に冷たい。如何に人形とは言え此処まで冷え込むのはおかしい。銀次は彼女の手をそつと取り、そのまま瞳を閉じてぐつと強く握り締めた。その手の感触を繰り返し楽しむ様に、キルヒはそつと握り返す。

「もしかしたら、まだ人類は生きているかもしれない——そんな細かい希望に縋って生き続けるのはとても大変でした、今日も人類は見つからなかつた、けれど明日なら、今日も駄目だった、けれど明日なら——そんな事を何十、何百、何千、何万と繰り返した

のです、本当に……本当に長い年月でした」

その日々を思い出したのだらう、キルヒの表情が歪む。人間であれば気が狂う程の間、しかし機械であるからこそ彼女達は狂う事を許されなかった。心を持つても体は機械だ、自らの意思で死を選ばない限り彼女達は延々と日々を繰り返し続ける。

「本当に、本当に嬉しかったのです、人類が生きている、生きて私達と共に在る、私達は人類の為に存在しています、貴方達こそが私達の生きる理由、存在意義、レイソニティ貴方達人類の傍に寄り添う事が出来る、それだけで私達は——どうしようもなく嬉しいのです」

キルヒは無垢に笑う。

退廃的なまでの献身——この百五年という年月が機械人形に新たな感情を生み出させた、その結果。ただ愚直なまでに人類を求めた、その果て。その姿を見ていると銀次はどうにも堪らなかった。

彼女達のその姿が、精神の在り方が、存在そのものが、酷く痛々しいものに見えて仕方なかった。だから銀次は自分がただの調査隊の一員であると、その事も省みず強い口調で告げた。

「——寄り添う、寄り添うとも、お前達が俺など要らぬと放り捨てるまで、俺はキルヒ、お前達の傍に居よう」

「！ ふふつ、なら安心です、私達機械人形が人類を自ら排斥するなどあり得ない、なら

どうか、末永く私達と共に」

「ああ……ああ」

銀次はキルヒの手を握る。その感触を忘れない様に、ただ握り続ける。彼女の手に温もりを届ける様に。彼女の体は余りにも人間的であるというのに、その熱は余りにも機械的で、ひんやりとしていた。

空を覆う天蓋

「全く、本当に酷い野郎だぜ、マジでお前が飛び出した時は生きた心地がしなかった」
「悪かったって」

銀次の隣には四郎、場所は地下の第九層に存在する廊下。外で残骸の回収作業に従事していた四郎は早々に地下へと呼び戻され、軽く食事を摂った後に未だ機械人形や兵装の再編成を行っているキルヒに許可を貰い基地の情報が収められている情報管理室に向かっていた。

食事は回収した食料——ではなくキルヒに支給された人類用の食糧。有難い事にこの拠点の畜産・食料生産プラントは未だ機能しており定期的に収穫、生産、パッケージングが行われている。特に今まで人類が来ると信じて止まなかった彼女達の食糧保管庫には二人では到底食べきれない程のパッケージングミールが眠っていた。初めて食糧庫に赴いた時は愕然とした、恐らく百人の人類が居たとしても十年近く食っていける量だった。二人だけなら一体いつまで食っていけるのか、少なくとも当分食料に悩まされることは無かった。品質維持用の腐敗防止剤も混ぜられているので何年経っても食

える、これは調査隊に積まれている食料と同じだった。

「四郎は特に怪我とかはしてないんだよな？」

「当たり前だ、エネルギー刃を弾いた時に軽く手が痺れたくらいか……まあ打撲程度なら怪我とも言えねえだろ？ 特に俺は第二世代だ、多少の衝撃位は屁でもねえ」

「ああ……そうだったな」

銀次は頷き、強化外骨格を纏わない生身の腕を天井のライトに翳す。四郎は未だ強化外骨格を纏っている。食事の時は流石に兜を解除していたが、どうにも此処に来てから視界を制限していないと落ち着かない様だった。

「エーテル強化プラスチックだったっけ？ 便利な物だよな、タンパク質とミネラルなんかよりも余程頑丈だ、俺も改造を受けていれば怪我をしなくて済んだのかもしれない」

「やめとけ、碌なモンじゃない」

四郎はそう吐き捨てる。銀次はその様子に首を傾げながらも、四郎がそう言うならとそれ以上言及することは無かった。

「本当ならキルヒに色々聞いてみたかったんだけどな」

「作業が残っているんだ、仕方ないさ」

四郎がぼやき、銀次が応える。本当ならば神楽に向かう前に交わした約束の履行、即

ち互いに聞きたい事があるという事で情報交換を行う予定だったのだが——コマンダーであるキルヒにはやらなければならない事が山の様に存在している。破壊された拡張兵装、機械人形の回収、被害の確認、部隊の再編成、修理や増産で消費される資源計算、或は調達、そしてそれらを全て中央にある本部へと報告しなければならぬ。何より撃破したマザーの回収作業も残っていた。あれは最新兵器と貴重資源の塊だ、是非分解して再利用しなければと言うのが彼女達の弁。

「何ならやって来る本部の連中に聞いてみれば良いさ、キルヒよりお偉いさんなんだろう？　彼女達も知らない事も知っているかもしれない」

近々自分達を保護する為に本部の機械人形がやって来ると言っていたが、さてどんなものかと銀次は夢想する。こんな巨大な拠点を各地に持つ存在のトップだ、ある意味自分より凄い立場の存在。本来ならばキルヒであっても対等に話せる様な立場ではないだろう、何せ四郎と銀次は調査隊の一員に過ぎないのだから。肩書など平と大して変わらない。ただ自分達が人類だというだけで彼女達は銀次と四郎を敬愛し、守護する。人類——いや男としては何とも居心地が悪い。

「そう言えば何でこの機械人形は女性型ばかりなんだろうな？　いや、地球じゃ男性も女性も無かったがよ、この拠点に男性型はいねえのか？」

「いや、確か格納庫に男性型の機械人形が居た筈だ、俺は確かに見たよ」

「うん？　じゃあアレか、戦闘体が女性型で整備やら後方の雑務が男性型？」

「どうだろう……そういう区分は分からないけれど、確かに男性型の戦闘体は見ていないな」

言われてみればと銀次は顎を擦る。しかし考えたって分かる筈もない、そもそも機械人形に性別で分ける事にすら疑問を覚えるのだから。どうにも銀次と四郎にはこの星の人類の考えている事が良く分からなかった。

「つと、此処か」

銀次と四郎は他愛もない会話を交わしながら歩き続けると、廊下突き当りの扉に辿り着く。長い廊下を真っ直ぐ歩いた先、両開きの厚い扉は中央でがっちり噛み合っており、肉の体を持つ人類と判断した瞬間喜々として扉を開け放った。

空気の抜ける音と共に扉が開く。内部はそこそこ広くちよつとした町の図書館程度の規模。そして壁には一列に並べられたデータベース、その前には多数の人間が使用できるように幾つもの端末が顔を覗かせている。

「広いな、だが大和の総合情報省の中央室には劣るぜ」

「何と張り合っているんだお前は」

ふふんと鼻を鳴らす四郎に銀次は溜息を吐き出す。銀次は一番手前の端末、四郎はそ

の隣の端末にそれぞれ腰掛け電源を入れた。電子音と共にホログラムモニタが表示され検索エンジンが出現する。青白い光に目を細めながら銀次は入力UIに手を翳す。隣で四郎は設定を弄りながら問いかけた。

「さて、言語情報登録は……これで良し、さあ何から調べるよ？」

「手当たり次第だ、俺達はこの星の事を何も知らないからね」

そう言つて銀次は検索エンジンに何も入力する事無く決定ボタンに触れた。瞬間、画面に並べられる欄はデータベースに存在するあらゆる保存文書やら音声データ。その一番上の欄を選び銀次は文書を開く。

保護記録、アーカイブ——自動翻訳。

22451210 タイトル【暁の日、終戦】

随分と長い間戦い続けた気がする、皮肉な事に人類最大規模の戦争は「人類種の絶滅危惧」という形で終わりを告げた。この終戦が一つの歴史の終わりなのだろう、その事も含め音声文書として記録しておきたいと思う。

人類種の絶滅危惧、各国の作り上げたマザーは世界を闊歩し、余りに多くの人類を殺し過ぎた。そして戦争によって疲弊した人類にマザーのコントロールを取り戻す術はない。馬鹿げた事だ、本国を滅ぼせばマザーを操る術を失うと言うのに。誰も彼もが目を曇らせていた、私もその一員だ。

兎に角勝たねばと思っていた、既に人類を閉ざされた星の中で生き残りにはまず糧がなければ話にならない。誰も彼も霞を食って生きる訳にはいかないのだから、そう、限られた資源の独占こそ我らの悲願。

いつか誰かが言った、飢えた人間とパンの話。結局そのパンは、どちらの胃にも収まらなかったらしい。我が国の人口も著しく減少した、恐らく第一世代——いや、もうその世代の人間は居ないのだったな。

第二世代の人間では生きる事さえ困難だろう、旧世代の人類は皆地上に出る事さえ叶わなくなっている。外界での活動は全て機械人形に託す形になるだろう、全く以て嘆かわしい事だ、機械に命を奪われ、機械に縋らなければ生きられないとは。

「これは……戦争の記録か」

報告書——と言うよりは個人的な記録とでも言うべきか。恐らく人類滅亡後にあらゆる文書や音声情報を手当たり次第このデータベースに保管したのだろう。保存されていたソレは公的な文書では無く日記に近い存在だった。スライドした文書を目で追う、まさかこんな物ばかりなのだろうかと銀次は適当に一覧を覗き、その中から一つの文書情報を開いた。

22460101 タイトル【月別製造報告】

定期記録、詳細は添付されているファイルを確認されたし。凡そ計画通りに製造の方

は進んでいるが正直資源が心許ない状況。以前のペースで生産を続けるのは困難、融解炉も限界まで活用しているが慢性的な資材不足が続いている。近い将来スクラップを回収する為に探索班を編成する必要が出てくるだろう。現状の資材状況は資材管理部より報告を受けて欲しい。

「普通の報告書もあるのか」

見れば文書情報の他に関連付けされた追加のファイルも存在している。纏めて記録、保存したのだろうか。銀次は月別製造報告と表示された欄を閉じ、再び一覧をスライドさせて目ぼしいタイトルを探し始める。

22460109 タイトル【宇宙】

この地下拠点は大分昔に建設された物らしい、聞けば宇宙開拓時代の頃から存在していたのだとか。改築が現在も進められているが、何と此処には宇宙航行可能な艦船が保管されていた。

一部の生き残りはその艦船を使って宇宙に乗り出そうと言っている。恐らく他惑星の人類に合流を果たそうとしているのだ。馬鹿な連中だ、数十年も前に出て行った切りの調査隊が他惑星で生き延びていると本気で思っているのだろうか。それに宇宙には——私達の頭上はパトリア・パトリオットによって塞がれている。

艦船を動かして空を舞おうと、成層圏に入る直前で捕捉され、撃墜されるのがオチだ。

ただですら少ない人類の数を減らすのは愚の骨頂だろうが連中の目には確かな狂気が存在していた。こんな生活を続けていけば気が狂うのも納得だ、しかし私が自殺志願者ではないのでね、搭乗は遠慮させて貰おう。

幾つか文書を梯子しているとこの拠点についての記録——日記が見つかった。この人物は最初からこの拠点に住んでいた人類ではないのだろうか？ 書き方からすると外部からこの拠点に辿り着いた人間の様だった。

そしてどうやらこの星の人類は宇宙にも進出していらしい。当然と言えば当然か、何せ地球を越える技術力を持っているのだから宇宙に進出していても何の不思議もない。

しかしこの、パトリア・パトリオットとは何だろうか。銀次は文書をスライドしていた手を止めて口元に手を当てる。成層圏に入る前に撃墜される、という事は兵器なのだろう。銀次はまさかマザーか何かなのかと思ひ検索エンジンにパトリア・パトリオットの文字を入力した。すると数件、パトリア・パトリオットについての文書情報が見つかる。その中で一番上の文書データを銀次は開いた。

2220——タイトル【パトリア・パトリオットについて】

連邦政府主導で実行されたプロジェクト・マザー——戦略防衛構想、SDIによって生まれた世界最初のマザー兵器である。

戦略防衛構想とは、あらゆる国家の大陸間弾道弾や高速飛翔戦闘体を加速前段階で迎撃、撃墜し無力化する事を目的として考案された防衛構想である。国家内に侵入する前に兵器、弾頭の無力化を図り連邦に属する全ての国家、大陸の安全を図る為のプロジェクトだと公言されているが実際は宇宙空間における自勢力の優位性を保つ為に実行された国家間競争の為のプロジェクトであった。

パトリア・パトリオットは長年連邦政府管理下に在ったが224512の終戦と共に事実上放棄された。連邦国家群も崩壊し、そのコントロールは完全に失われている。世界最古のマザーであり現在も衛星軌道上に存在、宇宙に近づく飛翔体を全て撃墜、撃破し続けている。

パトリア・パトリオットは大型リアクターが搭載されたボックス型の衛星、通称ドルフィンと衛星軌道上に散布された極小のレーザー兵器群、通称ベルベの二つに大きく分けられる。

極小のレーザー兵器群は一つ一つの大きさが一メートル前後の球体であり、その全てが複数存在するボックス型の衛星、ドルフィンに接続されエネルギー供給を受けている。その正確な数は不明であり連邦も公式の場で具体的な数字を発表していない。また情報部よる情報取得も確認されていない為、現在でもベルベの数は不明瞭なままである。しかしプロジェクト・マザーが実行され、ベルベとドルフィンが衛星軌道に出現し

て以降人類の宇宙進出の足は大きく鈍る事となった。

ベルベより発射されるエネルギー兵装の威力は然程高くない、ベルベ本体が小型であり発射口の面積が大きく取れなかった為だと推測される。しかしベルベの恐ろしさはその数にあり、地上から離陸し宇宙を目指す飛翔体は十分に成層圏に接近した時点で凡そ百から二百のベルベによってレーザー攻撃を受ける事となる。

ベルベの雲と呼ばれる程に個体の群れが衛星軌道上を覆っている為、回避は困難。尚、確認されているドルフィン数は凡そ二百十二機体、過去大型電磁加速砲による撃墜例は四件。何れも戦時中によるものである。

「マザー」

眩き、文書の文字を指でなぞる。文中には連邦の文字も存在した、銀次の世界にもあった国家連合体である。どうやら星が変わってもそういう存在は生まれる様だ。所詮人類は同じ人類という事なのか、進化の幅が狭く感じる。パトリア・パトリオットに關する情報を再び探ってみるもの、先と同じように表面をなぞった様な文書ばかりで詳細な情報、設計図などの類は遂に見つけられなかった。恐らくこの拠点は連邦と呼ばれる国家の枠に属していないのだ、敵国の一つだったのだろう。しかし概要だけでも最低限必要な事は分かった。

「銀次、何か良い情報は見つかったか？ こっちは碌なモンがねえ、まあこの拠点の事に

ついでとか、諸々断片的な事は分かったがよ……」

「ああ……コイツを見て欲しい」

銀次は四郎に向けて先程見つけたパトリア・パトリオットに関する情報を投げる。ホログラムモニタが四郎の方に向けて虚空を移動し、四郎は投げられたホログラムモニタを覗き込んだ。

「パトリア・パトリオット……？ 何だこりや、連邦……つて、こいつマザーかよ」

「そうだ、どうやら衛星軌道上に陣取ってロケットやら艦船を片っ端から撃ち落とすマザーらしい、数も膨大、星の何処から空に上がっても例外は無い」

「何だそりや、無差別か」

そこまで言つて四郎はピタリと硬直する。そして気付いたのだろう、「オイオイ」と口にしながら銀次の方へと顔を向ける。兜越して顔は見えなかったがきつと酷い顔をしているに違いない。

「もしかして俺達の神楽……つつうか、調査隊を撃墜したのつて」

「可能性は高いな」

銀次は腕を組んで鼻を鳴らす。衛星軌道上に存在しているのなら付近を通つた艦船を一方的に攻撃するなんてワケないだろう。内に攻撃出来て外に出来ない筈が無い、今なら大気圏突入にも耐え得る神楽があれば程破壊された理由も分かる。如何に一発一発

の威力が弱いとは言え艦船の表面にはエネルギーコーティングなど施されていない、遙か先を行く文明兵器に攻撃されたのだ。堅牢な艦船装甲であっても、下手をすれば実弾兵器より質が悪い。

「そしてコイツの存在が本当なら——俺達が母星に戻る確率はゼロだ」

銀次はそう言つて文書を閉じる。空にコイツが存在する限り星の外に出る事は叶わない。今思えばこの拠点には航空兵器の類が存在しなかった。偶々だと大して気にしていなかった銀次だが、今思えば下手に空を飛ばばパトリア・パトリオットの餌食になるからだろう。具体的な射程は分からないが加速段階の弾頭すら落とすのだ、ヘリや浮遊戦車など地上から然程高くない高度を飛べる兵装ならばまだしも航空機は問答無用で撃墜される可能性すらある。

そして銀次達が母星である地球に到達するには艦船を使って長距離跳躍を行うしかないのだが——パトリア・パトリオットが存在する限り艦船どころかロケット一つ飛ばせない。宇宙空間に出なければ長距離跳躍など出来ない。

「……マジかよ」

「マジだ、宇宙空間に出るならパトリア・パトリオットを撃破するしかない、ベルベとドルフィン、後者だけ見つけ出して撃破するのが一番楽だろうけれど」

「出来るのか？」

「出来なきや一生この星の中だよ」

四郎が頭を抱える、銀次は端末の前に用意された簡易椅子に深く背を預ける。パトリア・パトリオットの撃破、口に出すのは容易いが実際に出来るかどうかと問われれば難しいとしか言えない。何せマザーである、少なくとも銀次と四郎の二人だけで倒せるなんて微塵も思っていない。瞼の裏に焼き付いた大断蜘蛛との戦闘、真正面から挑めば恐らくアレより酷い惨状になるだろう。何せマザーの規模が違う。

「機械人形の力を借りるしかない、レーザーがどこまで届くかによるが、場合によっては地上から一方的に攻撃して屠れるかもしれない」

「機械人形……助力してくれるのか？」

「可能性は高いと思う、マザーの攻撃対象は人類も含まれているからな、保護を考えるなら全てのマザーは機械人形にとって排除対象だ……どちらにせよコイツが居る限り宇宙に進出する事は出来ないんだ、艦隊への救援も望めない、最悪そのままぶつけるのも手だが」

「おいおい、調査隊を呼び込むつもりか？ 無理だろ、少なくとも艦隊戦をやって勝てるとは思えねえ、何だこのベルベの雲って、そんな数の射撃を食らったら一発で撃沈——いや、下手すりゃ艦隊全滅だ」

四郎は銀次の言葉に首を振る。銀次として調査隊を呼び込んで戦わせるつもりはない、

「この文明と地球の技術力には大きな差がある、マトモにやり合えば全滅するのは自分達の方だった。」

「兎に角、情報を集めよう、コイツみたいはまだ重要な情報が眠っているかもしれない、対策を考えるにはもう少し後だ」

「ああ……ああ、そりやそうだ」

銀次と四郎は互いに頷きながら再び端末に手を伸ばす。だがその指の動きは鈍い。二人は今日マザーの強大さをまざまざと見せつけられた。その脅威を排除しなければ帰れないという事実が二人の気力を少なからず奪っていたのだ。

人間のカタチ

22460805 タイトル【日報】

管理官に言われて音声文書を残しておくが——あー、こういうのは慣れていないんだ。何を言えば良いんだ？ 今日があつた事と言つても、クソ不味いミールを食つて、サボタージュしながら労働をこなして……ってこれって管理官に校閲されるのか？ やっぱなし、今のは無し、俺は勤勉に今日も労働をこなしました、はい。

いつも通りと言えばいつも通りだし、違うと言えば違う。外はいつも通り地獄だ、戦争の痕がそこら中に残っているよ。第四世代の俺でもB B Pがないと活動出来ない、第三だと外した瞬間に穴と言う穴から血でも流して死ぬんじゃないか？

正直資源回収なら兎も角、食い物や水はまるで駄目だ、一度洗浄したつて食えないし飲めない。地下の生産プラントで量産した奴の方がマシだ、遺伝子操作でも何でも畜産で肉が食えるだけ有難い。正直上の生態系は狂つちまつてる、見た事のないバケモンみてえな生物がゴロゴロいた。それにいつマザーに見つかるとかも分からない——ここだけの話、司令官は地上に戻ろうと躍起になっているみたいだが、俺はお断りだ。正直あ

んな場所で生きるくらいなら一生穴倉に閉じこもっていた方がマシさ。

22461201 タイトル【資源記録】

音声文書として記録する、同時にテキストデータも添付するので確認されたし。今日の遠征では幾つかの野生動物の狩猟に成功した。その過程で一体の機械人形が破損し、現場に投棄してきた。回収に向かう予定はない、貴重な資源ではあるが運搬機は狩猟した野生動物分の重量で一杯だった。損害報告は別途記載する。

回収した資源についてはテキストデータを参照されたし。

22461206 タイトル【メデイカルセンター】

医療部門のミスです、薬品の在庫が殆ど底を尽きかけています。此処には薬品製造の設備もありませんし、何らかの形で補填する必要があります。現品回収、不可能であれば原材料の回収許可を下さい。正直このままでは風邪一つで命を落とす可能性もあります、早急に何らかの対策を講じ行動しなければなりません。

薬品を取り扱っている場所に心当たりがある方は医療部のリンまでお願いします、またメデイカルームは現在修理作業が行われているので使用出来ません。怪我や病気の際は第四階層の宿直室へお越しください。

22461212 タイトル【連絡途絶】

連邦付近の拠点に籠っていたグループから連絡が途絶えた。どうやらマザーの襲撃

に遭つたらしい。マザー同士の殴り合いに巻き込まれたのか、或は内部から——いや詳細はどうでも良い。問題なのは連邦の作り上げたマザーのコントロールが喪われたという事だ。

タダですら現在制御不能となつたマザーが多いというのに、あの化け物の様な機体まで敵に回ると思うと頭が痛い。せめて最後に自爆指示でも出してくれれば良かったものを。現在各地拠点の代表と密に連絡を取り合つて対策を打ち立てている。しかしマザーを撃破出来るのは同じマザーか、或はかなり大規模な兵器、兵力を必要とする。自分達の拠点を空っぽにしてまで討伐に向きたくないと言うのが本音だ。どこもかしこも他人任せ、他力本願、気持ちは分かるがこのままではジワジワと滅んでいくばかりだ。

いつまでも中身の無い議論をするつもりはない。

誰もやらないと言うのならば、私達がやるまでだ。

22470108 タイトル【ああああ】

あー、あー、ああ、えつとこれで良いのか？ これちゃんと記録されてんの？ え、嘘、マジで、凄いな。えーつと、別に言う事はないんだけど、何か弄つてたら記録しますとか言われてさ、どうなつてんだらうねコレ。

22470209 タイトル【ご飯】

ミールは飽きた、肉が食べたい、肉。

「碌な記録がない……四郎そっちはどうだ？」

銀次が溜息を吐きながら肩を竦めた。最後の情報など殆ど愚痴だ、日記どころの話ですらない。隣の四郎に目をやると手を動かしながら首を横に振る。どうやら大した情報が入りできなかった様だ。

「微妙だ、パトリア・パトリオットに関係する情報を狙ってみたがどれもこれも断片的なモンばつか……と言うか明らかに公的文書じゃねえ、手記やら愚痴の類も登録されているんだけどよ、何なんだこのデータベースは？」

「さあ……予想だけど、機械人形が人類の書いた文書をやたらめつたらと集めたんだと思う、ソレが手慰みの日記だろうが公式文書だろうがね」

「ふうん、そんなモンデータベースに登録したって意味ねえだろうに」

「彼女達にとっては「人間が書いた」ってだけで保存する理由になんだろうね」

「……………良く分かんねえや」

「俺もだよ」

銀次は続けて情報を探ろうし、手首に巻いたデバイスから僅かな振動を感じて手を止めた。リスト型のウェアラブルデバイス、鎧武者を取り外し生身となった銀次に支給された物だ。小さなスイッチを押し込むとホログラムモニタが目の前に表示される、リス

トには『キルヒ』の名前——内容に目を通して銀次は頷く。

「四郎、キルヒから呼び出した、中央の本隊が到着したらしい」

「もう？　速過ぎじゃねえか？」

四郎が驚いたような声を出す。彼女達の本部は恐ろしく遠い場所にあると聞いていたが、人類保護の報告は銀次達を見つけた時点で行われたらしい。星の裏側から到着するには余りにも早い時間だったが。

「此処の技術力なら星の裏側から一、二時間でやって来ても不思議じゃないさ、一層の格納庫に呼ばれているけれど……どうする？」

「どうするって、行くしかねえだろう、今更連中を疑ったりしねえよ」

「そっか、そうだな」

銀次と四郎は端末の電源を落とし立ち上がる。銀次はデバイスを使ってキルヒに格納庫へと向かう旨を伝える。直ぐに返信が飛び現在本隊の一部の機械人形と待機しているとあった。

「結局大した情報は入手できなかつたな」

「パトリア・パトリオットの存在を知れただけでも収穫はあったよ、キルヒと話せば最初から聞けたかもしれないけれど……こういうのは自分で調べて発掘するのが良いんだ」

「調査隊の性って奴か」

「ああ」

銀次が前、その後ろを四郎が続く。二人は足並みを揃え格納庫へと向かった。

☆

到着した格納庫には既に拠点の機械人形達と二十人程の新顔——恐らく本部と呼ばれる場所に所属する機械人形だろう。黒いタイトな服を着込んだ機械人形が二列になって待機していた。その本部の機械人形を拠点の整備タイプやら戦闘体を取り囲みがやがやと騒いでいる。そう騒めきも銀次と四郎がエレベーターから出て来ると一瞬で止んだ。

「銀次様」

「すまないキルヒ、待たせたかな」

「悪いな」

エレベーターから四郎と揃って外に出た銀次、特に悪びれもせず本部の機械人形の前に立っていたキルヒに手を上げる。次の瞬間ザンツ！ と何か擦れるような音が聞こえた。見れば本部の機械人形が一齐に姿勢を直し直立不動の体勢となる。

その中心、前に立った一人の機械人形——キルヒと同じ他と比べると体格の良い恐ら

く指揮官型だろう、ソイツが四郎と銀次の方へと早足で近付いて来た。何か言い知れぬ気迫に思わず身を硬くする二人だったが、その機械人形は何をする訳でもなく二人の手前で足を止めた。そしてマジマジと、それはもう目を見開いて銀次と四郎を眺める。必然銀次の目も目の前の機械人形を確りと見つめる事となり、同じ指揮官型でありながらキルヒとの違いを随所に認められた。

「……………失礼、触れても宜しいでしょうか？」

「え？ あ……………ああ」

鎧武者を着込んだ四郎ではなく、生身の銀次に向かって淡々とした口調でそう言った。いや、良く聞けば少し声が震えていたかもしれない。銀次は特に考える事も無く頷いて見せる。すると目の前の機械人形はすっと手を伸ばし、頬に触れる直前で一瞬手を止め——それから優しくその肌に触れた。

「あ……………柔らかくて、温かい」

指先で肌を擦る様に、或は少しだけ摘まむ様に。何度か彼女は銀次の頬に触れる。能面の様な表情が崩れ、目の前の機械人形は柔らかく穏やかな笑みを見せた。

「まさか映像情報ではない、生身の人間を見る事が叶うとは……………本当に、何と、言えば良いか」

手を離した機械人形が深く頭を下げる。彼女は人類が生存している事に深く感動し

ている様だった。笑ってはいるが今にも泣き出しそうな雰囲気だ。銀次と四郎は何となく背中が痒くなり、「頭を上げてくれ」と早口で告げた。機械人形は二人の言葉に頷きゆつくりと顔を上げる。

「それで、お前が中央の指揮官なのか」

「はい、コマンダータイプの機械人形、個体名は「デイ」と、中央本部の副司令官を務めています」

「副司令官か」

銀次は驚く、何と言つても勢力の中で最大規模を誇る部隊、そのナンバー2がやって来たのだからそれは驚くだろう。それだけ彼女達が自分達を重要視しているという事なのだろうか。外見はキルヒと非常に似通っているが服装と髪型が異なる。顔立ちは殆ど一緒だ、キルヒは長髪でデイは短く切り揃えられていた。

「本当ならば総司令直々に此方の方に足を運ぶ予定だったので……マザー襲撃の報を受け現在本隊の派遣準備を行っています、私達ガーディアンオブイーストは先遣隊として一足早く合流した次第です」

「いきなりトップとは……流石に緊張する、無理だ」

そんな役職の人物とは縁もゆかりもなかった人間である。銀次が苦笑を零しながらそう言うときデイは笑って首を振って見せた。

「なにせ百年以上発見出来なかつた人類ですから、先遣隊も護衛任務の意味合いが強いのです、セントラルシップを中心に動かせる部隊を全て動員しました、例え今マザーの襲撃があつたとしても退けるだけの戦力があります」

「セントラルシップ……此処の機械人形だけじゃないのか？」

「当然です、この二十人は隊内で選抜された陸戦用戦闘体、銀次様と四郎様の盾に足る個体であります」

「……出来れば、盾なんてやって欲しくはないんだけどね」

此方をじつと見て微動だにしない二十人の機械人形に向けて呟く。彼女達はうんともすんとも言わなかつた。そういう個体なのだろうか、銀次には分からない。直ぐ隣に立っていたキルヒが「デイ、取り敢えず今後の事も含め下層で話を進めない？」と口に出し、デイはちらりとキルヒを一瞥した後、「そうね」と頷いた。

「銀次様と四郎様も、立ち話もなんですから」

「……まるで人間みたいなフレーズね」

「お二人に影響されたのかも、人間らしく聞こえたなら嬉しいわ」

淡々とした口調で話すデイと対して抑揚をつけて話すキルヒ。外見は似通っているのに随分と印象が異なつた。

拠点にいる間は安全だという事でデイの連れて来た部隊は格納庫で待機、四郎と銀

次、デイとキルヒの四人で下層にある会議室へと足を運んだ。人類生存時にはこの場所で様々な議論が行われたとか何とか。こういう形式的な部屋も残っているのかと銀次は少しだけ感慨深く思った。会議室は銀次達の私室の二倍近い大きさで、中央に長方形のテーブルと椅子が備え付けてあった。

『マザーとの戦闘報告は聞いているわ、臨時の戦力は私のガーディアンオブイーストを充てます、あくまで生産終了までの繋ぎだけれど、細かい指示書は後々総司令より送られるから』

『ええ、分かったわ、補填計画は既に総司令に向けて提出したから心配しないで、問題は資材だけれど撃破したマザーを融解炉に放り込めばそこそこ調達出来そうなの、それでも足りない分は申請しても良いかしら？』

『問題無いわ、セントラルには十分な貯蔵がある、総司令も首を横には振らないはず』
銀次と四郎の対面に座った二人は互いに圧縮言語で言葉を交わす。銀次と四郎は暫くそのやり取りを眺め、一分ほどでキルヒとデイは十二分な情報交換を終えた様だった。二人は揃って銀次と四郎に顔を向け背筋を直す。

「ごめんなさい銀次様、四郎様、色々と話す事が残っていて」

「良いさ、気にしないで……準備が良いなら話を始めよう、まず何から話そうか？」

「取り敢えず俺達の目的からじゃねえの？ どっちにしる二人ぼっちじゃ無理なんだか

らよ」

「ああ、そうだな、デイとキルヒにはまず俺達の身分と此処に來た経緯を話したい、それからこれからどうしたいか——聞いてくれるかな?」

「はい」

「勿論」

銀次は二人が頷いた事を確認してから自分達の所属する調査隊について、そして気がついたら神楽の残骸と共にこの場所へと不時着していた事を話した。そして自分達の望みは母星への帰還である事——しかしキルヒへ寄り添うと断言した手前、帰還でなくとも母星の人類へと何らかの形で連絡出来れば良いと説明した。

事実、銀次が母星への帰還という言葉を口にした時、キルヒは悲しそうに目を伏せ、デイは難しい顔をしていた。

「これが俺達の母星データだ、跳躍用の位置情報も入っているから特定は簡単だと思う、後々解析してくれると嬉しい」

「お借りします」

銀次は長距離跳躍を行う上で必要な惑星情報の入った小型保存デバイスをデイに手渡す。ここの技術力があれば地球の捕捉など簡単だろう。さて、自分達の経緯と目的は語った。二人は何とも言えない表情をしているがこの星以外に人類の生息している場

所があると聞いて心なしか嬉しそうではある。銀次は身を乗り出し、そんな二人に対してストレートに問いかけた。

「単刀直入に聞きたいのだけれど、俺達の目的に手を貸してくれる気はあるだろうか？」
「そう……ですね、手を貸す事自体に問題はありません、元々私達機械人形は人類の為に生まれました、喜んで助力致します、惑星への連絡という点は特に、ただ——」

「ただ？」

「デイが顔を俯かせ眉間に皺を寄せる。彼女の言葉に被せる様に問いかければ、淡々とした口調で彼女は言った。

「今すぐは難しいでしょう、お二人の存在を嗅ぎ付けたのか此処数時間でマザーの活動が活発になったと報告されています、通常マザーは機械的に製造国周辺を徘徊し攻撃対象を搜索、或は自国防衛を行うだけの存在ですが——本来の防衛エリアを離れる個体も確認されているのです、お二人の安全の為に防備を強化しなければなりません、先遣隊である私達が派遣されたのもその一環です」

「連絡の方も難しいのか？」

「いえ、母星との連絡は本部に連絡すれば然程時間はかかりませんが……この星の衛星軌道には巨大なマザーが存在しているのです」

「ああ……パトリア・パトリオットだろうか？」

「ご存知なのですか」

どこか驚いた表情のデイに、「此処のデータベースを見せて貰ったんだ」と答える。そう言うのと彼女は納得したように頷き、知っているのなら早いとばかりに「このパトリア・パトリオットが存在している限り、宇宙空間からこの星に入る事も、その逆も極めて困難であると考えられます」と言った。

「銀次様と四郎様は気付いたらこの星に墜落していたと仰いましたが、その……恐らくは」

「分かっているさ、撃墜されちゃったんだろ？　パトリア・パトリオットとか言うマザーだよ」

「……申し訳ありません」

「過ぎた事だし、お前達は悪くない」

頭を下げるキルヒとデイに手を振る。マザーは此処の人類が作った兵器であつて機械人形は関係無い、彼女達を責めるのは酷と言うもの。今の今まで存在しているという事は排除も困難なのだろう、マザーと戦うために備えて来たとは言うが敵は遙か上空である。そして数は膨大、凡そ考える中で最も強大な兵器だった。

「俺達がこの星を出るにしろ、外の人類を呼び込むにしろ、パトリア・パトリオットの排

除は行わなければならない、確かドルフィンとベルベだっただか、撃破可能か？」

「この支部には対空兵装が余り存在しません、それこそ衛星軌道上にある物体を正確に撃ち抜ける砲の類は何も……ただ、本部の方ならば」

申し訳無さそうな表情でキルヒがそう言つてデイを見る、するとデイは力強く頷きながら言葉を続けた。

「本部の部隊ならばパトリア・パトリオットを撃破する事は可能です、正確に言うならばパトリア・パトリオットを撃破する為の計画は既に存在しています」

「あん？ マジかよ」
「はい」

四郎が鎧武者の手を叩きながら身を乗り出す。まさか既に撃破する為の計画が存在しているとは。いや、きつと彼女達もただ手を拱いて待つていただけでは無いのだ。詳細を聞きたいと銀次が言えばデイは大まかな作戦内容を答えた。

「ベルベの雲を掃討するのは数が多すぎるので、そのエネルギー源であるドルフィンを破壊する計画です、実行するのは中央本部の移動型電磁砲、四足歩行型のレーザガン搭載車両です、コレで地上よりドルフィンを狙撃、撃破します」

「それだけ聞くと簡単そうだが……」

銀次が顎を擦りながらそう口にする。しかしデイはそんな銀次の言葉に首を横に振

り、そう簡単な事ではないと表情を歪ませた。

「いえ、パトリア・パトリオットに攻撃を加えた場合、その個体は敵性勢力として設定、衛星軌道上からの集中攻撃により撃滅されます、つまりドルフィンを一体撃破するのに部隊を一つ使い潰さなければなりません」

「……パトリア・パトリオットのレーザー兵器は地上まで攻撃が届くのか?」

「届きませんが、ただ通常時は成層圏に近付かなければ殆ど無害です、攻撃を加えた場合のみ反応する固定砲台だと思いい下さい」

ドルフィン一つにつき部隊一つ、銀次は唸る。ドルフィンは確か幾つ存在したか、文書には百以上あると書いてあった気がする。つまりそれだけの数部隊を使い潰さなければならぬという訳だ。とても効率的な方法だとは思えなかった。

「衛星軌道上を射程内に捉える電磁砲となると製造は簡単ではありません、技術的には確立された兵器ではありますが資材が不足しているのです——故に総司令は全電磁砲によるドルフィンへの同時攻撃を提案しました」

「まあ、そりゃそうなるわな」

デイの言葉に四郎は頷く。一機撃墜して反撃されるのなら同時に全て撃墜してしまえば一方的に屠る事が出来る。ある意味正攻法としては最も確実に近い——すべての電磁砲が命中すればの話だが。其処はこの星のAIを信じるしかないだろう。

「出来るのか？」

「可能です、目下資料調達と平行して電磁砲を順次生産しております、数が揃い次第パトリア・パトリオットの撃破に移そうと機を伺っていたのですが」

「分かった、じゃあ俺達は待つだけで良い訳だ」

肩の荷が下りたとばかりに銀次は椅子へと深く凭れ掛かる。最初から計画が存在しているのならば言うことは無い。元より自分は参謀でもなければ隊長でも無い、単なる一調査員だ、作戦立案は全て彼女達に任せよう、餅は餅屋だ。

「なら俺達の話は終わりだ、母星と連絡さえ取れば何も言うことは無いさ」

「では私達の方からも二三、お伺いしたい事が」

「勿論」

銀次が頷いて見せる。そうするとデイはキルヒと顔を見合わせ、じつと四郎と銀次の顔を見つめながら口を開いた。

「私達が気になっていた事はどうやってこの星に来たのか、そしてお二人の他に人類は存在しているのか、その答えは既に頂いているので一つ、こちら側の事情に絡んだ質問をさせて頂きます——お二人の此処に来た経緯をお聞きする前からキルヒからの報告で既に大凡の事態は把握しておりました、お二人が他の惑星から来たことも、それを巡って現在機械人形達の間では二つ意見が衝突しているのです」

「意見が衝突？　なんだそりゃ」

四郎が訝し気な声を上げる、銀次も驚いた表情を浮かべた。機械人形が互いに意見を持つて衝突するなど——いや今更か、この場にいる機械人形を自分達の星と同じ存在と思つてはいけない。しかしそうだとでも銀次には不思議に思えた、一体何をそんな衝突する様な意見が挙がるのかと。

二人の訝し気な雰囲気を感じたのだろう、デイはぐつと肩に力を籠めると努めて冷静に言葉を重ねた。

「仮定の話になりますが、我々がパトリア・パトリオットの排除に成功した場合、銀次様と四郎様の母星と何らかの形でコンタクトを取る事になると思います、実際に連絡するのは排除後か、排除前かは総司令の指示によりますが……その後、銀次様と四郎様を母星へと送り届けるか、或はこの星で保護するかどうかです」

「それは」

銀次が咄嗟に何か言葉を出そうとして、しかし横合いからキルヒがデイを援護する様に口を開いた。

「この星の宇宙航行技術はパトリア・パトリオットのロールアウトと同時に停滞しております、何せ百年、いえ、それ以上の年月進歩していませんので、航行技能はインストールされていますが万が一の可能性もあります、ですから我々機械人形のみで銀次様と四

郎様の母星まで航行し、こちらの事情や諸々を説明しよう……」

「……まあ、悪い話じゃねえんじやねえのか」

四郎が横合いで呟く、宇宙航行に絶対はないというのは理解出来る。道路の上を車で走るのは訳が違うのだ。一度安全を確認した上で母星である地球に機械人形だけで赴くという話も納得は出来た。

「それに人類と席を共にするのならば仲介としてお二人にご協力頂きたいという目論見もあります」

「……それは本人を目の前にして言っても良い事なのか」

「人に隠し事などしたくはありませんから」

困った様な表情で笑うデイ、そうプログラムされているのか、だとしてもその表情からは感情が確りと見て取れた。銀次も薄く笑いながら頷く、調査隊の一員として他知的生命と接触した場合には地球との仲介役も想定されている。言われずとも引き受けるつもりだった、それに機械人形は人類との親和性が高い。恐らく自分達など居なくともうまくやれるだろうという確信にも似た感情もある。

「それで、どっちが優勢なんだ？ 保護か、送り出すのか」

「半々、と言ったところでしようか、いえ、若干保護の方が優勢かもしれませんが、勿論お二人の意見が最優先だと分かっているのですが、何分危険のある事ですから皆これば

かりは譲れないと」

「成程……それでデイはどっち派なんだ？」

「私は——お二人にはこの星に残つて貰い、機械人形だけで接触を図るべきだと考えています」

僅かばかり言い淀んだデイは二人の機嫌を損ねる覚悟をした上でそう言い切る。しかし言い切つた後に不安になつたのかもごもごと口を動かし、「ただ、お二人が同乗したいと仰つた場合は、その、一考の可能性も……」と力なく呟いた。毅然とした態度と裏腹に押しには弱いらしい、隣のキルヒは呆れたような表情を浮かべ「デイ」と彼女の名を呼んだ。

「四郎、どう思う？」

「一回墜落しているからなあ、俺は星に引き籠るに賛成だ、自分の母星に帰りたくないと言えば嘘になるがこうした文明を見つけられたのは調査隊としては本懐だろう？　なら最後までキチンと通さなきゃならねえ、どうせ遅いか早いかの違いだ」

腕を組んだ状態でそう口にする四郎、銀次はその言葉に頷いて見せる。彼女達が自分達の安全を第一に考えてくれている事は分かる、だからこそ無理を通して我儘を言うつもりはなかった。何せ一度それでキルヒに怒られている、二度目はないだろう。

「俺達から特に言う事はないよ、委細任せる、待てというなら待つし、行けと言うのなら

行く、元々俺達は手足の様な存在だからな、頭になつて考える事は慣れていないんだ」
「ありがとうございます」

銀次の言葉にデイは深く頭を下げる。取り敢えず銀次としては話すべき事は全て話した気分であつた。しかしデイは顔を上げると「それで、今後の事なのですが……」と続きを口にする。

「ん、まだ何かあつたのか？」

「はい、お二人の住居についてです」

住居？ と銀次は言葉を繰り返す。デイは頷き、「本部の受け入れ態勢が整い次第、お二人を中央本部に移送したいと考えています」と彼女は口にした。それを聞いた四郎と銀次は驚く事もなく言葉を受け取る。何せ本部と言う程の拠点である、防衛設備や配備されている機械人形の数も此処とは比べ物にならないのだろう。より安全な場所へとデイの考えは至極当然の物の様に思えた。

しかしその場には驚きの声が上がつた。四郎のものでもなければ銀次のものでもない、それはデイの隣に座つていたキルヒの声だつた。どうやら彼女はその報告を受けていなかったらしい、突然の事に目を白黒させパクパクと何度か口を開閉する。

「デ、デイ、そんな話、私は聞いていないのだけれど」

「言わなくても分かる事よ、この拠点は唯ですらマザーとの戦闘で損耗しているのだから

ら、より強固な本部に移送するのは当然でしよう?」

「それは——そう、だけれど」

もごもごと口を動かすキルヒ。その姿にデイは首を傾げ、銀次と四郎も一体どうしたというのかとばかりに疑問符を浮かべる。損耗した地方支部に強固な中央拠点その存在、少し考えれば分かる事だ、銀次と四郎は特に異論を持たなかった。しかし彼女は違う様だ。

「その、えつと……移送には私も同行しても良いのかしら?」

「それは護衛隊として? 別段此処の戦力を割いてまでする必要はないと思うけれど、セントラルシップがあればマザーと遭遇しても逃走は可能だろうし、中央に到着出来れば並みのマザーなら手出しも出来ないわ、それこそレベルVでも襲来しない限りはね」

「いえ、そうではなくて……その、配置換えって言うの?」

「は?」

キルヒの言葉にデイは顔を歪ませる。一体何を言っているんだコイツはという表情だ。キルヒは指を組んだ状態でチラチラとデイ、そして銀次と四郎を見ながら彼女らしくないボソボソと呟く様な口調で言った。

「もし二人が本部に移るなら、私も中央本部に籍を置きたいのだけれど……」

「貴女は此処の最高責任者よね? その貴女が持ち場を離れてどうするのよ、一時的な

ものなら兎も角、移籍なんて許される訳ないじゃない」

呆れた表情と口調でそう断じるデイ。しかしキルヒは引き下がらず、「そ、そこを何とか」と手を合わせる。その如何にも人間臭い動作にデイは眉間に皺を寄せ、「合理的じゃないわ」と首を横に振った。

「コマンダータイプには余裕が無いの、そう簡単に増産も出来ないし、外見だけ指揮官型の機体なら幾つも在るけれど中身が違うならただの置物、そんな事は分かっているでしょう？ 貴女の代わりは無いのよ、支部には指揮を執れる存在が必要よ」

「そこは……代理コマンダー、比較的型番の近いスモールタイプを立てるとか、一時的に中央に指揮を執って貰うとか……」

「非効率的ね——そもそも、何で中央に同行したいのよ？」

デイは下からじつとキルヒを睨めつけ至極マトモな疑問をぶつける。すると彼女は数度目を泳がせた後、小さく「離れたくないの」と口にした。しかし意図を理解出来なかったのがデイは首を傾げる。

「は？」

「だ、だから、銀次様と四郎様——特に銀次様と離れたくないのよ！」

「半ば叫ぶような言葉、機械人形がこれ程感情的な声を出せるのかと驚いた。いや、驚くのは其処ではない。銀次と四郎、そしてデイは目を丸くしキルヒを眺めた。キルヒの

表情は歪んでいる、それは羞恥からくるものだろう。しかし顔は赤くならない、そんな機能は搭載されていないから。

「な、なに、それ」

デイがたどたどしくそう口にする。彼女からすればあり得ない様な理由だったのだろう、ただただ愕然とするデイの姿がそこにはあった。四郎と銀次も似たような心境である。まさか彼女にそんな言葉を吐き出されるとは夢にも思わなかった。

「だって銀次様は無理するし、何をするか分からないし、心配なのよ!」

「わ、私達が確りと護衛するわよ! それに一緒に居たいからなんて理由で移籍が認められる筈ないじゃない! 一体何を考えているの貴女!?!」

「っ……」

デイの言葉にキルヒは俯いて唇を結ぶ。理屈ではない、感情の問題なのだ。それはキルヒも、デイですら理解していた。全く合理的ではないキルヒの言葉にデイは呆れると同時に危機感を覚える。

「キルヒ、貴女——まさか」

「ストップ、ストップだ」

何かを言いかけたデイ、そしてキルヒに銀次は静止を呼びかける。腰を浮かせたデイの肩に手を置いてゆっくりと彼女の体を椅子に座らせた。四郎は腕を組んでデイとキ

ルヒの両名を眺めている、どうやら仲裁に入る気はないらしい。銀次は俯いたキルヒを横目で眺め、それからデイに「移送は今すぐに、って訳ではないんだろう？」と問いかける。

「……はい、そうです、まだ本部の受け入れ態勢が整っていませんし、周囲のマザーの動向も気になりますから、安全が確保されてからの移送になると思います、具体的には本隊が合流してからでしょう」

「そうか——キルヒ、その気持ちはとても有難いものだけれど、基地からキルヒが居なくなって困るのは機械人形もそうだし、多分俺達もだ、別に直ぐ逢えなくなる訳じゃない、それに母星に帰還したら同じ事だ」

「……………」

キルヒは何も言わない、ただ黙って俯くだけだ。銀次はそんな彼女に向けてそれ以上言葉を重ねることは無く、「取り敢えずこの話は終わりだ、もう夜も更けた」と肩を竦めた。手首に巻いたウェアアラブルデバイスに目を向ければ既に日付が変わっていた。一日二日、働き通しなんてのは珍しくもないがこの星に不時着してからは慣れない事の連続だ。肉体的にもそうだが精神的にも随分疲労した。四郎もそうなのか先程から一言も喋っていない、というかコイツ寝ているんじゃないだろうな。

「そうですね……ええ、人類には睡眠による休息が必要です」

「そうだ、正直俺も四郎も大分疲れていてな、この話の続きは本格的に移送の日取りが決まった時にでもしよう——俺達の腹も、まだ決まっていないな」

「……………」

銀次の言葉にデイは疑問符を浮かべる。銀次は席を立ち、続いて待つてましたとばかりに四郎も立ち上がった。どうやら眠っていた訳ではないらしい。デイとキルヒも慌てて続くが銀次はそれを手で制す、「部屋に帰つて寝るだけだ、付き添いは良いよ」と。「それじゃあキルヒ、デイも、また明日」

「じゃあな」

「えつと、はい、おやすみなさい」

「……………おやすみなさい」

軽く手を振つて退出する銀次と四郎。慌てて頭を下げるデイ、どこか暗い表情のキルヒ。二人の顔が扉に遮られて見えなくなると、銀次と四郎は無言で廊下を進み始めた。

「なあ、銀次」

「なんだい」

「本当に疲れてんのか？」

「半分方便だ」

「だと思つた」

不意に口を開いた四郎、問われた言葉に肩を竦めた銀次が応える。精神的に疲労したのは本当だし肉体的に休息を求めているのも嘘ではない。しかし今すぐ就寝しなければという程切羽詰まっている訳でもなかった。取り敢えずあの場でキルヒとデイの言い合いを阻止するのが目的だった。少なくとも地方支部のトップと中央の二番手、それが対立して良い事などある筈が無い。人類の前で言い争いをする、それは二人の関係を決定的に位置づける様に思えてならなかった。

「しかし、心配だからついて行きたいとかスゲエ人間みたいな事言うよな、マジで同じ顔がなけりゃ機械人形なんて分からねえよ」

「そうだな、きつと俺達の知らない、見た事も聞いた事も無い技術が使われているんだ」
「……いや、まあそうなんだろうがよ」

四郎が何か言葉を詰まらせた。足を止めた銀次は「何だ？」と首を傾げて見せる、四郎は面頬越しに鼻先を親指で撫で、それから「ふとさ、思ったんだよ」と僅かに声を落としながら言った。

「機械人形って言うのはよ、人類が作った機械な訳だろ？ 人類に奉仕する為に生まれた、使われる為に生まれた【種族】な訳だ」

「まあ、そうなるか」

「でもよ、この星にはもう人類なんか居ねえじゃねえか、そんな中で外見も人間そっくり

で、中身だつて真に迫っている、そんな存在が居るならソイツはもう人間なんじゃねえか？」

「……ロボットが人間に成り代わるって言うのか？」

銀次が問いかければ、「そうじゃねえ」と四郎が首を横に振った。何でもない様に見せかけてはいるが四郎の背中には悲壮感が漂っていた。

「成り代わるとか、乗っ取るとか、そういう意味で言つたんじゃねえんだ……【人類】つて言葉の意味が変わるんだ、それこそまた何百年、何千年つて時間が過ぎたら、肉の体を持つ人類の方がおかしいつて思われちまうみたいに」

「ああ……成程」

銀次は四郎の言いたい事を正しく理解した。未来的に人類の在り方が変わる、それこそ種の存続を考えるのであれば自ら生産出来てしまふ様な形が最も安定しているのだから。増やすも減らすも自由自在な訳だ。何より機械人形は人類が全てデザインしたものの、限りなく人に近く人を理解する存在。

そう考えると過去の人類を保護するより彼女達・彼等が【人類】の名を引き継いだ方が余程良い様な気さえした。きつと連中なら自分達よりも上手く生きる事が出来るだろう。それこそ【星喰らい】なんて汚名を被せられた肉の人類より遥かに上等に。

「人間の定義なんて曖昧だからな」

銀次はぼつりと呟いた。

「形だけ整えれば中身の無いがらんどどうの人形すら人間だって言う奴もいる、生まれつき手や足がなかったり、或は普通より多い病だつてあつた、手が二つ、足が二つで鼻が一つ、目は二つで口が一つ、こんな普通だつて人間だという証明にはならない、きつと【形】だけじゃ駄目なんだ、幾ら意識を持ったつて、形が人間に近くつたつて、人を人たらしめているのはもつと別な物だ」

「それは、何だ？」

四郎の言葉に銀次は吐息を零す。その表情は笑っている様な、或はどこか自分を——人類を馬鹿にしたような顔だつた。

「さあ、俺には分からないよ」

虚栄

目覚めは悪いものではなかった。一度目を開けた時、神楽のパーソナルスペースではない事に驚いたが数秒して自分がどこに居るのか気付き脱力する。病的なまでに白い天井、清潔感以外を排した様な部屋を一度眺め、それから一度枕に顔を埋める。疲労感はまだ残っていた、しかし十分な休息が摂れたと言うのも事実。神楽には無かった弾力に富んだベッドは起き上がるのに多大な労力を要したが幸い精神力が強くなければやっていけないのが調査隊である。気怠さの残る体を叱咤し布団を跳ね除ける。

体のふしぶしが音を鳴らし、銀次は枕元に置いていたデバイスを手首に装着した。時刻は九時、少し眠り過ぎた気もするが焦る程でもない。何せもう調査隊としての生活習慣は意味を為さないのだから。乱雑になった髪をぐしゃぐしゃと掻きながらベッドを抜け出した銀次は洗面台で軽く顔を洗い、そのまま洗面台に顔を突っ込んで頭から水を被った。残っていた眠気が冷たさで吹き飛び銀次は大きく息を吐き出す。

「四郎、オイ、四郎、起きているか？」

濡れた頭を用意されていたタオルで拭いながらデバイスに話しかける。相手は四郎、

直ぐ隣の部屋で休んでいる相棒。暫く応答はなかったが、根気強く待つっていると僅かな布の擦れる音と共に声が聞こえて来た。

『……うえ……んだよ銀次、もう交代時間かあ……?』

「早く目を覚ませ、お前の居る場所は艦船の中じゃないぞ」

『あん?』

訝し気な声、それから布団を跳ね除ける様な音が響き、『どこだよ、此処』とハッキリした声が聞こえた。相変わらず覚醒が早い、羨ましい限りである。濡れたタオルを肩にかけキッチンに向かう。冷蔵庫には何も食材が入っていない、代わりに冷蔵庫の横にある小さなボックスに小さなグリーンランプが灯っていた。取っ手を掴んで蓋を開けると中からパッケージングされた保存食とパックジュースが出て来る。どうやらこのボックスは部屋の外に通じているらしい、恐らく食糧配給の為に用意された物だろう。

『あー……ああ、クツソ、思い出した、寝惚けてたのか、俺』

「おはよう、調子はどうか」

『可もなく不可もなく、強いて言うなら疲労は大分……くあ……ああ、とれたぜ』

「そいつは何よりだ、冷蔵庫の脇に配給ボックスがある、飯は食つとけよ」

『おう』

ボックスから取り出したパックジュースと食糧を掴んでベッドの上に戻る。中央の

テーブルは使う気になれなかった、元々神楽に用意されていたパーソナルスペースはベッドひとつ分程度なのである。そこでずっと過ごしていた為か、あらゆる行為をベッドの上で済ます習慣が出来てしまった。

「ん……いつ食つても不味いな、コレ」

フィルムを破つて中の固形物を口に放り込むも咀嚼した味は御世辞にも美味しいとは言えない。パサパサとした食感と大雑把な味付け、フィルム表面にはチョコレート味と書かれていた。まあ所詮は栄養補給剤の様な物である、食べるだけマシなのだろう。次々とブロック体のソレを口に詰め込んでジュースで胃に流し込む。ミールは不味かったが徐々に飲んだジュースは美味かった、と言つてもただの味のある透明な液体だけが。

しかしこういう食品の形まで一緒なのかと、銀次はフィルムをダストボックスに投げながら思った。

「考える事はどの人類も一緒か、味は二の次つてな……さて、鎧武者でも取りに行くか」

寝巻から外行き用の服——やけに近代的なデザインの衣服を身に纏つた銀次は何度か鏡で自分の姿を確認し、頷いた。現在銀次や四郎の着用していた衣服は洗濯中である、支給された衣服は元々この星の人類が着用していた衣服の一つだった。

四郎に外に出る旨を伝えるとそのままエレベーターに乗り込んで上の階層へ向かう。四郎の鎧武者はそのまま本人の部屋に保管されているが、銀次の鎧武者は一端格納庫に預けてあった。先のマザー襲撃によって肩部の装甲が剥がされた為である。キルヒには何度でも『新型強化外骨格』の使用を提言されたが銀次と四郎は首を縦に振らなかった。これだけの技術力を持つ星の強化外骨格、恐らく性能も鎧武者とは比較にならない程だろう。しかし性能が良いから戦力向上が望めるかと言えば否、結局はどんな兵装も武器も使いこなせるかどうかが重要なのだ。

調査隊として幾つもの過酷な環境を生き抜いて来た銀次はソレを良く知っている。

格納庫には既に機械人形達が揃って作業に励んでいた。元々機械人形に休息の類は必要ない為男性型、女性型問わず皆が何らかの作業に奔走していた。心なしか格納庫に兵器や拡張兵装の類が増えている様に見える。恐らくガーディアンオブイーストから搬入された物資なのだろう。チラホラとデイの身に纏っていた衣服と同じ物を着た機械人形が見える、彼等にも戦闘個体とは別に整備用の機械人形が配備されている様だった。

「あつ、銀次さん！」

格納庫に踏み入れると丁度エレベーター脇の兵装を整備していた男性型機械人形の一人が気付き、声を上げる。銀次が声のした方に振り向くと見覚えのない機械人形――

と言つてもフェイスパーツは同じ型のものが多いので顔自体は見覚えがあるのだが――が笑顔で駆け寄つて来た。

機械人形の声に反応した周囲の面々も銀次に気付き、作業の手は緩めずに此方に注視する。来たばかりの頃は慣れなかったが、一日経つた今では多少背中が痒い程度だった。

「格納庫に何かご用事？ 何か必要な物があれば後で届けるよ？」

「ああ、強化外骨格の受け取りに来たんだ」

「強化外骨格……ああ！ 確か鎧武者だっけ？」

修理出来ているよ、と口にした機械人形は笑顔で銀次の手を引く。今更だが機械人形は立場によつて口調が大分異なる。具体的には上の立場の者程言葉遣いというか、口調が丁寧になつている様な気がした。

鎧武者は格納庫の片隅で保管されているらしい、頼んだのは両肩の装甲換装だけなので片手間で済ませてしまつたのだろう。破損個所の装甲だけ取り換えなかつたのはウエイトバランスが崩れるからである。本当ならば余り手は加えて欲しくなかつたのだが――ある意味これも前時代的な『拘り』という奴なのだろうか。

「要望通り肩部の装甲張替えだけに留めていたけれど……良いの？ 何なら内部機構から動力炉までもつと良いパーツに換装できるよ？」

「良いんだ、高性能な強化外骨格を貰っても扱えないんじゃないや宝の持ち腐れだからな、何ならお前達が使った方が余程良い」

「機械人形は人間着用の強化外骨格なんて使わないよ、生身の方が強いんだから」

「……それもそうか」

彼の指摘に銀次は肩を竦めて笑う。強化外骨格が人間の為の拡張兵装である事を失念していた、少なくとも機械人形が拡張兵装である強化外骨格を纏うという事は既存の兵装では破壊できない様な目標を粉碎する時のみ。つまり人間である銀次が扱えば木端微塵になる可能性すらある。

「ほら、コレ、一応少しでも良いモノに仕上げようと思って、両肩の装甲はマルコシア合金を使ったよ、軽くて頑丈、気休め程度だけど対エネルギーコーティングもしたから肩で攻撃を受ければ一撃で破壊——なんて事にはならないかな」

格納庫の壁際に灰色のカバーを掛けられた鎧武者、機械人形はカバーを取っ払って僅かに艶のある肩部装甲を撫でながらそんな事を口にする。換装された装甲は元の形状である階層的な形を保ちつつ、確かな強度を誇っている様に見えた。合金の名前に覚えは無いが、機械人形の扱う金属ならば信を置くに値するだろう。

「お前が換装作業をしてくれたのか？」

「え？ ああ、えっと、担当した機械人形が情報をアップロードしていたから、整備状況

とか全体の兵装状態なんかは皆知っているんだ」

「……成程、便利なものだ」

機械人形ならではの効率化とでも言えば良いか、人間には真似できない芸当だ。銀次は全身洗浄され綺麗になった鎧武者の表面を撫でる。砂埃に塗れていた頃とは違う、まるで新品の様だ。けれどあちこちに見られる凹みや小さな傷はそのまま銀次と共にあらゆる苦難を乗り越えて来た相棒だという事が分かった。

「今すぐ着用していく?」

「いや、拠点内では良いさ、後で構わないから部屋に運んで貰っても良いか?」

「勿論、キルヒに許可を貰っておくよ」

「頼む」

短いやり取りを終えて銀次は格納庫を後にする。自分に向かって手を振る機械人形達に手を振り返しながらエレベーターに乗り込んだ。

さて、用事は済ませた、後は特にやる事が無い。四郎を誘ってデータベースを漁るのも良いが——其処まで考えて腕に巻き付けていたデバイスが振動している事に気付く。手を翳してホログラムモニタを展開させると『キルヒ』の文字が虚空に踊った。

「キルヒ?」

何かあったのだろうかと手早く通話許可のボタンに触れれば、彼女の声とサウンドモ

ニタが表示される。

『おはようございます銀次様、朝食はもうお済みですか?』

「ああ、おはよう、飯は食ったよ、今は格納庫だ、鎧武者の搬入を頼んでいたんだ、何かあったのか?」

『ええ……既に四郎様にも連絡を、一度会議室にお越し頂いても構いませんか?』

「分かった、直ぐに向かう」

『ありがとうございます、それと——昨日は申し訳ありませんでした』

通話口の向こう側で頭を下げる気配。銀次は一瞬言葉につまり、それから何でもない様に「気にするな」とだけ口にして通話を切った。エレベーターのボタンを自室の階層から会議室のある階層に変更する。それから壁に凭れ掛かり、小さく息を吐き出した。

「……これはもう、本当に、人間と変わらないな」

彼女達是我儘と言う言葉を知っているのだろうか。呟いて、銀次は小さく笑った。

☆

「悪い、待たせた」

「おう銀次、遅えじゃねえか」

会議室に到着すると既に鎧武者を着込んだ四郎とキルヒが待機していた。キルヒは銀次が入室すると一礼し、四郎は遅れてやって来た銀次を茶化す。銀次は椅子に座って体を揺らす四郎を見て溜息を吐いた。

「お前、まだ脱いでなかったのか、流石に着たまま寝たとか、そういう訳じゃないよな？」
「バツカ、流石に俺も寝る時は脱ぐつてえの、夜番の時は着たままだけだよ」

「ここで夜番なんてある訳ないだろう」

未だに鎧武者を着たまま過ごす相棒に呆れた表情を浮かべながら銀次は椅子に腰を下ろす。大きな会議室は少数で使用するとより広く感じられた。周囲を見渡すとデイの姿が見当たらない、「デイは居ないのか」と銀次が問いかければ、「彼女は現在当拠点周辺の警戒に当たっています」とキルヒが答えた。

「あん？ 警戒？」

「はい、実はお二人に来て頂いたのはその事についてお知らせしようと思ひまして——
こちらをご覧ください」

キルヒが銀次と四郎のデバイスに何らかの情報を送信する。電子音と共にデータの受信を知らせたデバイスに手を翳しながら二人は顔を見合わせ、それからホログラムモニタを表示させた。

「これは……地形情報か？」

ホログラムモニタに表示されたのは拠点周辺の地図、つまり地形情報。今更何でこんなものをと銀次は疑問符を浮かべた、しかし時間経過と共にマップ上に赤い点が表示され動き出す。そして青い反応が複数出現し、赤色に近付いて行くと直ぐにソレは消え去った。銀次は顔を顰め、四郎は「何だコイツ」と声を上げる。

「昨日——と言うより今日でしょうか、深夜に敵性勢力の反応を感知しました、そのデータは反応の探知から消失までの経過情報です」

「敵性勢力？」

「恐らくマザーかと」

その言葉に四郎と銀次は眉をひそめた。もしそれが本当ならば由々しき事態である。大断蜘蛛もそうだが、マザーがこの拠点目掛けて集結しているのではとすら邪推してしまふ。

しかし銀次はそれ以上思考を続けなかった、キルヒの歯切れがやけに悪かったのである。マザーと断言せず敵性勢力とボカす辺りが特に。

「恐らく、というのは？」

「友軍信号が無い事から敵である事は確かです、しかしマザーにしては余りにも反応が弱々しく、反応を探知してから現場に急行する間に反応が消失、実際にマザーかどうかを確かめる事が出来なかったのです」

「反応が消えたつて？ 何だそりゃあ」

四郎が厳しい顔で呟く。あの高機動を地で行く機械人形を振り切ったというのか、銀次と四郎は俄かには信じられなかった。キルヒはこれを失態と感じているのか、「申し訳ありません」と謝罪しながら悲痛な表情を見せる。

「機械人形を振り切れる兵器があるとはな……早めに反応を探知する事は出来なかったのか？」

「反応は拠点周辺に突如出現しました、私達は拠点を中心に幾重もの警戒網を展開していますので、通常であれば拠点到接近した時点で気付けます、早期警戒機も常駐しているこの網を抜ける事は光学迷彩を使用してもまず不可能です」

「だが実際抜けちまつたんだらう？ お前等がサボタージュしていたなんて考えられねえ、そうなる別な手段がある訳だ、心当たりは？」

四郎が椅子をリズムよく後ろに倒しながら問いかける。機械人形の警戒網を潜り抜けるのは並大抵の事ではない、銀次と四郎は此処の機械人形の性能の高さを良く理解している。サボタージュなど当然ないだらう、だとすれば単純に探知機能を誤魔化す何かがある筈だった。四郎の言葉にキルヒは何度か口をまごつかせ、それからゆつくりと可能性の一つを提示した。

「可能性として考えられるのはテレポーテーション、でしょうか」

「あん？ テレポーターションだと？」

「はい、突然反応が出現したという点を考えると、それに類する方法としか」

「……技術的に可能なのか？」

銀次が驚いた表情で聞けば、「可能です」とハッキリとした肯定が返つて来る。まさかそこまで技術が発達しているとは、しかし銀次はこの星に来てから一度もその類の技術を目にした事が無い。その不信を感じ取ったのか、キルヒは身振り手振りも交えてテレポーターションについて説明を始めた。

「テレポーターションはこの星でも最先端の技術の一つでした、しかしそれ故に一部の国有施設、それも中央都に近い場所にしかポータルは設置されていません、テレポーターションには莫大なエネルギーが必要であり、また出現位置は任意ですが使用するにポータルに向かわなければなりませんので」

「出現位置が任意なのか、凄いな」

「はい、その強力さ故に各国テレポーターション機能を持つポータルの保有制限が設けられていました、また首脳会談にてポータルの大きさ、具体的な転送可能範囲の指定なども行われています」

「ほおん、そりゃあ、大方軍事利用を避ける為じゃねえのか？」

四郎が面頬を指先で撫でながらそう口にする。その言葉に同意しながら銀次が続け

た。

「だろうな、しかしそんな便利な物があるならパトリア・パトリオットなんて飛び越して宇宙空間に出れそうなものだが……ポータルの大きさが艦船を転送できる程の幅や高さを持たないか」

「はい、それと会談での条約によつて転送可能な範囲に宇宙空間は含まれておりません」
「秘密裏にポンポン衛星でも送り込まれたら嫌だもんな、そりゃあ宇宙空間は除外するだろうよ」

テレポーションという如何にも未来的な技術が存在している事には驚いた。しかし元々長距離跳躍なんて技術はテレポーションの前身の様なものだ。地球より進んだ技術を持つているこの星で実用化されていても何ら不思議では無かった。銀次は深く椅子に背を預けると腕を組んで唸る。

「それで問題は、その条約諸々によつて生産数や機能に制限が設けられている筈のテレポーションがマザーに搭載されているかもしれないという話だ」

「何時でも何処でも好きな様に、向こうさんは俺達を襲撃出来る訳だろ？ 何だそりゃ、勝てる訳ねえだろ」

「あくまで可能性の話だ」

肩を竦めてやってられないとばかりに伸びをする四郎に対し、銀次は淡々とした口調

で告げる。しかし実際問題テレポーションを持つマザーなんてモノが存在するとすれば手に余る脅威と言うのが本音だった。

「マザーにしては反応が弱々しいと言うが、エネルギー供給量の問題か？」

「それもありませんがサイズもマザーにしては小柄だったのです、探知した反応から大凡の輪郭を再構成しました、縦で凡そ二メートルから三メートル、横は三から四メートルという解析結果が出ています」

「小せえな……拡張兵装レベルだけ、それ」

「反応が小さいのも頷ける、そもそも本当にマザーなのか？ テレポーションには莫大なエネルギー供給量が必要な筈だろう、そんなサイズの兵器で賄えるとは到底思えない」

「テレポーション以外の可能性はねえのかよ？」

四郎がキルヒに目を向ける、しかし彼女は首を横に振って「機体隠蔽機能、光学迷彩やEMPの類も考えましたがどれも私達の警戒網を潜り抜ける程の機能を持つとは思えません、赤外線探知、金属探知、熱源探知、基地周辺には輪状の重量探知すら備えられています、それらを全て欺けるとはとても」と口にする。成程、そこまで幾重にも警戒網が張り巡らされているのなら確かに、見つからずに基地周辺まで辿り着けるとは到底思えない。

「そもそもEMPの類であればその地帯周辺の機械人形の機能が一齐に制限されず、気付けぬ筈がありません」

「なら、やっぱりテレポーターシヨンの可能性が濃厚か」

「考えたって仕方がねえ、相手はマザーかそれに類する敵性勢力、それでもつてテレポーターシヨンの機能を備えている、そう想定して動くしねえだろう」

実際の敵がどうであるにしろ、事実突然出現し、消えて行く敵性反応が存在するのは事実。元々四郎と銀次は考えて指示を出す側ではない、『そういう敵がいる』という情報を理解した上で踏み込んでいく側の人間だった。

「突然出現する敵性勢力、けれど拡張兵装レベルの小柄な奴なんだろう？　もしかしたらマザーと比較ならねえ程に弱いかもしれないねえ、サイズっていうのは強さに直結する、デケエのが速いし強え、存外接敵前に消えたのも戦闘用の兵装を碌に積んでねえからかもしれないねえしな」

「……そうだな、無理に悲観する必要もないか、警備の強化諸々、そういう類の事はキルヒとデイに任せる、俺達は指揮官じゃないからな」

「分かりました、テレポーターシヨンの用に対抗部隊を組織します、本来ならば戦力の分散は避ける所ですが……どの地点に現れても即座に対応出来るように守備隊を再配置します」

「アイも居るんだ、早々抜かれはしないだろう」

そう言いながらも一抹の不安は拭えない。なにせテレポーターション、瞬間移動だ。早い話が銀次達の目の前に突然現れる可能性だつてゼロではない。尤も此方の地形情報や銀次達の現在地をリアルタイムで探知できるのが条件だか。

それにテレポーターションと一言で言うが何も万能な機器ではないだろう。下手をすれば壁の中突つ込む可能性だつてある、何らかの使用制約は存在すると考えるべきだ。

「それで、話はそれだけか？」

「えつと……はい、急を要する件は以上です」

銀次が締めくくる為問いかければキルヒは頷く、四郎は「こりや拠点に居る時も鎧武者は着込んでいた方が良いかもしれねえな」と胸の板金を叩いた。緊急時に備えて強化外骨格を着込んだまま生活するには慣れているが、正直気が休まらず好きではなかった。逆に四郎の場合は着ている方が落ち着くらしいけれど。

「もし大断蜘蛛の様なマザーだったら鎧武者を着ていようがいまいが大した違いは無いだろう、俺はこのまま過ごすさ、鎧武者の中は窮屈で仕方ない」

「いや、たつた数秒稼ぐだけでも違うもんだぜ？ つうかまだ鎧武者の修理終わつてねえのかよ？」

「いや、鎧武者の換装作業は終わっているよ、さつき見て来たんだ」

此処の機械人形は仕事が早い、ある意味休息が必要ないため当然と言えば当然なのが。そんな事を話していると不意に会議室の扉が独りでに開いた。全員の視線が扉の方に向けられ、そこから見知った顔が入室して来る。黒い衣服に身を包んだ女性型機械。

「デイ?」

「おはようございます、銀次様、四郎様」

会議室に入って来たのは今しがた拠点周辺の警戒に出向いたと説明されたデイだった。彼女は銀次と四郎に向けて軽く一礼すると、「たった今警戒及び調査を終え帰還しました」と口にする。どうやら帰還して直ぐ此方に向かったらしい、銀次と四郎は彼女に向けて軽く労いの言葉をかける。デイはその言葉に僅かだが口を緩めると、そのまま椅子に座ることなくキルヒに向き直った。

「キルヒ、情報は逐次アップロードしていたけれど改めて言うわ、周辺に敵性勢力が活動した痕跡はなし、移動跡一つなかった、足跡すらね、隠蔽された可能性は無いわ、出現した場所を徹底的に搜索したけれど手掛かりもない——見つけられたのは自重で沈んだ四つの足跡だけ」

「反応があつた場所ね、光学迷彩の類なら空でも飛ばない限り足跡は残る、でも解析班か

ら飛行ユニットの存在は確認されていない——ならやつぱり」

「恐らくは瞬時移動機能持ちよ、それも自立跳躍可能な『マザー』かソレに限りなく近いユニット」

「……………そんな機体、今まで見た事も聞いた事もないわ」

キルヒが顔を顰める、彼女達はこの百年間で多くのマザーや人類に対して脅威と成り得る存在の情報を収集してきた。正確に言うのであれば人類が生存していた頃も、その数を減らしていく中で数多の情報を蓄積してきたのだ。それに該当しない存在、テレポーションション搭載のマザーなんてデータにも遭遇情報もない。もしあり得るのであればそれは。そこまで考えを巡らせてキルヒは首を横に振る、ただの憶測で物を言うつもりはなかった。

「——いえ、単純に今まで眠っていただけの存在かもしれない、テレポーションションを搭載した機体なんて当時の技術でも最新鋭、既にロス失トわテクれノたロジ術ーだもの、研究廠か何処かに保管されていた機体が起動したのかもしれない」

「ええ、私もその可能性に同意するわ、正直そんな機体が存在するのも疑わしく思うけれどあり得ないと高を括って失敗するのは方が一にもあつてはいけないもの、反応が弱いとは言え脅威には変わりない……キルヒ、私は銀次様と四郎様の移送の前倒しを提案するわ」

「！」

腕を組んだ状態で淡々とそう口にしたデイ、キルヒはそんな彼女に驚きの表情を見せ何かを口にしようとし——それからぐっと唇を噛んで堪える。まるで煮えたぎる鉄を呑み込む様な表情だった。

「そう……そうね、確かに本部なら此処よりも防備が厚い、銀次様と四郎様の安全は確保される、デイの部隊ならマザーの襲撃にあつても撃退、あるいは銀次様達を逃がす為の速力はある、当然の提案だわ」

「……意外ね、本隊の到着を待つべきとか、もつともらしい事を言つて食い下がるか、もしくは自分も連れていけと言いつ出すと思つていただけれど」

昨日の事を未だに引つ張つているのだろう、デイはどこか冷やかな瞳でキルヒを見ている。そんなデイに対して彼女は一つ息を吐き出す、まるで人間が自分を落ち着かせるために一拍置く様な姿だった。

「昨日はどうかしていたのよ、それに今は実際に脅威が迫っている、そんな状況で我を通す程分からず屋になつたつもりはないわ」

「私達は機械なんだから、常に合理的で在りなさいよ」

『——ならデイ、貴女はどうして態々圧縮言語ではなく大和の言葉で話しているの？』

最後の言葉が銀次と四郎には理解出来なかつた。

キルヒの切り返しにデイは目を丸くし、それから驚いたように自分の唇に触れた。それは自分でも気付いていなかった事を他人に指摘された反応。『効率だけを求めるなら、こんな言語を使うメリットは何も無いわ』と首を横に振るキルヒ。デイは目に見えて狼狽し、何度も瞳を左右に揺らした。

『それは……』

『分からないわよねデイ、貴女にも……此処の拠点の機械人形は皆そう、きつとこれいうのを【拘り】って言うんだと思うの、そういう風にプログラムされているから——なんてツマラナイ理由じゃない、私達は人類そのものに拘っているのよ』

「……………」

何事かをキルヒが捲し立てた後、デイは沈黙する。自分の唇に指を当てて目を伏せる。そんな姿を四郎と銀次は黙って見守っていた、今度は仲裁するつもりはなかった。銀次はキルヒのどこか熱意の籠った瞳に機械人形の想いを見た。これは人類の立ち入って良い部分ではない、そう感じて僅かに上がりかけた腰を再び深く下ろす。

仲裁する気はないが、気を揉むのは事実だった。

『少しでも人間に近付きたいのよ、精神的にも、肉体的にも、そうする事で私達は自分達の欲求を満足させている……デイ、貴女にも在るでしょう？ 銀次様と四郎様に出会ってから消えない、胸の内から込み上げてくる様な感情が』

『……………ええ、そうね』

デイはキルヒの言葉にゆつくりと頷いて見せた。昨日のキルヒの醜態を前に認めるのは非常に苦痛を伴ったが彼女にも覚えはある。この星から消えてしまったと思つていた創造主——人類。その姿を目の前にしてからじくじくとした痛みとも熱とも取れる何かが胸に疼いて仕方ない。それは感情だった、人類から与えられた予測不能の数字だった。

名を付けるのならば何とするか。

銀次がその感情を読み取つていたならば庇護欲とでも口にしたかもしれない。人類を守れと、二人を守れとデイの核が囁くのだ。

『昨日の私の発言も、人類に対して抱く感情がどうしようもない程膨らんだから、理解して欲しいとは言わないわ、けれど知つておいて欲しいの、これは私達機械人形がいずれ直面する問題だから……私達はもう【合理的】なだけでは生きていけない』

「——とんだバグね」

デイが呟く、それは銀次と四郎にも分かる言葉だった。その言葉は吐き捨てる様な口調、しかし浮かべた表情はこれ以上ない位に柔く穏やかであった。僅かに解れた口元に手を当てデイは唇を指先でなぞる。

「けれど何故かしら、そのバグを私は嬉しく思うの」

「少しでも人に近付けたからよ、これからはもつと多くなるわ」

キルヒは優しいな表情でデイに語る。デイは小さく頷き、何かを呑み込む様に天を仰ぎ見る。それから穏やかだった表情を引き締めると、「銀次様と四郎様の本部移送は私達ガーディアンオブイーストが行うわ」と強い口調で断言した。キルヒはその言葉を真正面から受け止め、頷く。

「私の分までお願いね、デイ」

「当然よ、マザーが現れたって守り通す——いえ、マザーなんて撃退してみせるわ」

脅威レベルが低い敵ならそのまま撃破よ、そう息巻いてデイは拳を握る。銀次は四郎と顔を見合わせると頼もしいなと内心で笑った。少なくともデイには何か吹っ切れた気配がある、理解不能なものを理解した——いや、分からないままを良しとした上で受入れた様な。

「それでは銀次様、四郎様、出来るだけ早く中央に向かいたいと思うのですが……」

「おう、テレポルト野郎が出て来るかもしれないねえしな、早いに越したことはねえだろう、俺あいつでも構わねえよ、特に何か高張るモンを持っていく訳じゃねえしな、直ぐに出られる」

「俺も大丈夫だよ、鎧武者さえ積んでくれれば後は精々背囊ひとつ分の私物だけだ」
「分かりました」

本来ならば本隊が合流した後で中央へ向けて移動する手筈だったが——テレポーテーション搭載型の敵性勢力出現によって早期移動を余儀なくされる。銀次と四郎は真剣な表情で言葉を綴る。デイに対し、軽い態度で頷いて見せた。デイは二人が同意を見せると腕に巻き付けたデバイスに目を向け告げる。

「そうですね——では二時間後の正午に出発致します、準備ができ次第格納庫の方へ」
「分かった、中央にはどれくらいで到着する?」

「足の速い艦船のみで二十時間という所でしょうか」

「大分遠いな……確か積み荷や兵装を拠点に移していただろう、二時間後に出発で本当に大丈夫なのか?」

「問題ありません、元々当拠点の戦力補填の為に持ち込んだ兵装や物資の類もあるので、ガーディアンオブイーストの主戦力はそのままですから」

「そうか」

デイがそう言うのであれば大丈夫なのだろう、銀次と四郎は二時間後に格納庫へ集合という言葉に頷いて見せる。その場はそれで解散となった、デイも出発準備の指揮を執らなければならぬし、キルヒはガーディアンオブイーストが抜けた後の戦力見直しの必要が出て来たのだ。本来であればもつと後にすべきだった仕事、元々戦力低下の為に送られて来たガーディアンオブイースト、彼女達が抜けた後で拠点が襲撃され壊滅——

なんて事にならないようにしなければならぬ。

会議室を後にした銀次と四郎は各々自室に戻る、二人の私物は驚く程に少ない。そもそも拠点に住み始めて全く時間が経過していないという事もあるが、神楽から引つ張つて来たモノなんて小さな背囊ひとつで事足りてしまうからだ。

四郎はそのまま自室で時間になるまで暇を潰していると云い、銀次は格納庫まで鎧武者を取りに行く事にした。運んでほしいと口にして早々悪いが、今の内に着用してしまつた方が良かった。

迅雷

「では、お二人には此方で待機して頂きます」

「ほおー……何だ、普通に生活出来そうな部屋だな、拠点の自室より狭いが神楽と比べれば上等な部類だ、ベッドもあるし娯楽まで用意されてやがる」

ガーディアンオブイースト、その隊の中でも一番大きな艦船。『リアリディア』と呼ばれた艦船の中に足を踏み入れた四郎と銀次は船橋から一つ下の層、しかし比較的近場にある部屋へと案内された。四郎は用意された四つの簡素なベッド——壁に折りたためる形のソレを軽く叩いて笑う。銀次も四郎に倣ってベッドに手を着いて体重をかけてみるが硬すぎず柔らかすぎず。さらに枕元には観覧用のデバイスまで用意されている。

リアリディアは巨大な艦船だった、速力重視の艦船と言うから高速戦艦の様な物を想像したのだが実際は銀次達の良く知る宇宙航行用の艦船と大して変わらぬ。デイの率いるガーディアンオブイーストは計五隻からなる高速艦船から構成されている。銀次達の調査隊ですらここまで三隻構成である事を考えれば彼女達の戦力が如何ほどであるか分かるだろう。

「元々人類搬送も視野に入れた艦船ですから、この部屋は船橋よりも強固な作りです、万が一艦に被害が出た場合でもこの部屋だけは無事でしょう」

「ただだけ頑丈なんだよ……ああ、でも強いて言うなら窓が欲しかったな、折角の船だつてのに景色が楽しめねえのは損した気分になる」

「窓を設けると防壁に綻びが生まれてしまいますから、申し訳ありません」

「良いさ別に、寝だめでもしていれば直ぐ到着するだろう」

銀次は鎧武者を着たままベッドに腰を下ろす。強化外骨格を着込んだ銀次の重量はかなりのものだったが、壁からせり出たベッドは軋み一つ立てずに銀次を受け止めて見せる。四郎もそれを見て自身のベッドに腰を下ろしその反動を楽しんだ。

「そう言えばディ、航行は百五十フィート以内で言っていたが理由はあるのか?」

「はい、高度を上げずに地表付近を飛行するのはマザーに発見されるのを防ぐ為です、本来ならば陸路で向かうのが安全面のみを見ると最善なのですが……やはり地上では速力に限界がありますから、それに大陸間の移動では海を渡る必要があります、水陸両用車両のみで部隊を編成するには聊か戦力に不安が残りますので、やはり高速船で地表付近を移動するのが最適と判断しました」

「なるほどね」

この世界に来てから航空機の類を見ないのはそういう理由からか。「技術の進歩に

よって空は最も危険な場所の一つになってしまったのです」とデイは口にする。障害物のない自由な青色は何の制約も無い快適な道に見える。しかしその実、宇宙はパトリ・パトリオットによって常に監視されており、その中間層ではマザーによる発見の可能性が高まるという。

「この星でも探知技術——というよりはレーダーというべきか、やはり反射波を？」

「地上に限った話ではそうですね、ただ宇宙航行艦船に搭載されている超長距離警戒機はフリーゲート級の船体からA F線による観測が主流になっています、その技術がマザーにも流用、搭載されていますので空を低空飛行以外、具体的には五千フィートを越える飛行であれば確実に探知されてしまいます、マザーには例外なく対空兵装が搭載されていますから、浮遊探査機などを搭載したマザーは更に厄介です、下手をすると二千年後でも捕捉されかねません」

「……不思議な話だ、航空機が空を飛べなくなるとは」

「時代によってあらゆるものは形を変えます、船が海ではなく空を飛ぶのも、昔の人類からすれば不思議な光景でしょうから」

そう言われればそうか、大規模な航空機から巨大な船と形が変わったのはいつからだろう。少なくとも銀次や四郎が生まれる前からの筈だ、そんな遙か昔の感性を二人は持ち合わせていない。デイはチラリと目を端にやると何かを確認する動作を見せ、それか

らトンと爪先を一つ踏み鳴らした。

「私はそろそろブリッジに戻ります、何か御用の際はデバイスで連絡を、直ぐに対応致しますので」

「おう、悪いな」

デイが一礼し部屋を後にする。四郎と銀次はその後ろ姿を見送り、息を吐き出しながら壁に背を預けた。

その後、キルヒや拠点の機械人形達に見送られながらリアリディアが出航。ガーディアンオブイーストは中央を指指して航行を始めた。艦船に乗る前にキルヒと拠点の機械人形達には別れを済ませてある。キルヒを含め拠点の面々には随分と出航を渋られた、というよりは惜しまれた。尤もキルヒ以外は大して面識もない訳だが——正直あつたとしても同じ型が多すぎて把握できないというのが本当の所だった。

指揮官型の様に少数で個別名が存在していれば覚えられるのだろうけれど。残念ながら名前を尋ねたところでアルファベットと数字の羅列を答えられて終わりだろう。

「んー……なあ銀次、これって夜番みてえなもんか？　ぶつちやけ爆睡しても良いわけ？」

「マザーとの接触を警戒するって意味だとそうなるが、正直戦闘になっても俺達は決して役に立てない、どちらかと言えば非戦闘員の休憩時間だな」

「んじゃあアレだ、俺は今の内に寝とくわ、向こう着いたら忙しいだろうし」
「おう、一応鎧武者は着とけよ」

四郎は「あつたりまえだろ」と言いながら器用にベッドへと寝転がる。そして数分もしなう内に寝息を立て始め、銀次はそんな四郎の姿を眺めながら壁に凭れ掛かったまま目を閉じた。

「……コイツを着たまま爆睡できるお前が羨ましいよ」

思わず苦笑が漏れる銀次、手甲に覆われた指先でベッドをなぞる。眠れるだろうか？と自問する、多分無理だろうなと思った。眠れる時に眠っておく力が調査隊には必要だ、銀次にもその能力は備わっている。しかし大断蜘蛛との戦闘で昏倒し、今朝方まで十二分な睡眠を行った銀次にとってはこれ以上の睡眠は不要でもあった。

ある意味いつまでも眠っていられる四郎が凄まじいと言っても良い。常ならば銀次も眠りに落ちたかもしれないが鎧武者を着込んだまま大して疲労もしていないのに眠るのは困難だった。

暇でも潰そう、こういう何にでも使える時間と言うのは貴重なのだ。そう思って銀次は枕元のデバイスを掴んで起動する。微かな起動音と共にデバイスはホログラムモニタを投影する。中に入っているのは娯楽用の書籍、流石にデータベースに保管されているような文書の類は観覧出来なかったが十分だ。

「どんな世界でも娯楽はあるんだよな……」

言語設定で大和を選択した後、銀次は静かに書籍を選択、読み進める。こういう風に時間を使うのは随分と久しぶりだった。四郎は寝息を立てながら熟睡し、銀次は黙って頁を捲る。外からは艦船が前進するエンジン音だけが聞こえて来る。

航行は順調だった。

☆

航行開始から凡そ十時間と二十四分。ブリッジにて第一コホルスの航行を指揮していたデイは早期警戒管理官から報告を受ける。

『——？ デイ、西側に反応がある、かなり遠いけれど……このノイズからして地上か、若しくは私達と同じように低空飛行で向かって来る』

『反応？ 中央か……いえ、支部の部隊かしら？』

『ううん、友軍信号はなし、と言うよりノイズが酷過ぎて正確な数と距離が分からない、地上だとしてもちよつと酷いよコレ』

その報告を聞いてデイが顔を顰める。リアリディアに搭載されている早期警戒機は確かに最新鋭のものではないが十二分な性能を有している。特に人類を乗せる事を念

頭に設計されたこの船は敵性勢力の探知機能には一際力が注がれていた。それが不鮮明であるというのであれば意図的なものだろう。マザーのリーダーに勝るとは言えないが、少しでも逃走確立を上げる為に早期発見力はかなりのものだ。

『EMPね、恐らくマザーよ、高度を上げなさい、全速力よ！ 他艦船に連絡、敵マザーと思われる反応を感じ、これよりリアリディアを先頭に隊列を組む、各艦本艦リアリディアの防衛を第一目標に設定、このまま中央まで逃げ切るわ』

『分かった！』

ブリッジが一気に慌ただしくなる。艦内警報が鳴り響きマザーの到来をブリッジ以外の乗員に知らせる。手持ち無沙汰だった機械人形が慌てて持ち場につき、そのままリアリディアを含む全艦の砲台が一斉に起動し始めた。

リアリディアを含むフリーゲート級の艦船に搭載されている砲台は自動的に敵を捕捉して攻撃を加える。しかし機械人形が有線で接続する事によりオートマタ形式で操る事も出来た。優秀な機械人形の処理能力を一つの砲台に注ぐ、命中精度はかなりのものだ。

警報は銀次達の居る人類保護区まで聞こえて来た。警報を聞いた四郎はすぐさま飛び起き、書籍を読み漁っていた銀次はデバイスを投げ捨てて兜を展開する。互いに一瞬の動揺も迷いもなかった、この類の警報は調査隊で飽きる程聞いていた。

四郎が野太刀を掴んで外へ出ようとするが銀次が慌ててその肩を掴む。

「馬鹿ツ、四郎、俺達が此処を出てどうするんだ！ 此処が一番安全だと聞いただろう！」

「あツ！ つぶね……つい、いつもの癖でよ、悪い！」

四郎は警報を聞いて外に飛び出そうとしたが、今の銀次達は防衛に向かう必要が無い。今までは船を防衛する為に戦う側だったが今度は守られる側なのだ。そうこうしている内にも警報は鳴り続けている。四郎と銀次は落ち着かないとばかりに体を揺らした、警報が鳴り響いている中で何もせず突っ立っているというのは酷く焦燥感を煽った。

『銀次様、四郎様』

「ツ、デイか！」

突如銀次と四郎の視界にサウンドモニタが表示される。声からしてデイだ、どうやら彼女から一方的な通信が送られてきている様だった。

『マザーの接近を感じしました、これより全速力で逃走を行いつつ攻撃を加えます、お二人は決して部屋から出る事無く待機して下さい』

「……了解した」

『ご安心を、リアリディアを含む五隻の艦隊はマザーを撃退するだけの力を持っています』

す、万が一被弾しても人類保護区には被害が及びません、これは絶対です」

デイは二人を安心させるように優しい口調でそう口にした。しかし元々二人はこうした事態に慣れ切った人間、ある意味彼女の懸念は不要であったが有難く銀次はその言葉を受け取る。「何かやることはあるか」と銀次が問いかければ、デイは『いいえ、気持ちだけ有難く』と言いつ切った。

自分達に出来ることは無い、分かつてはいたがいざその場面に遭遇すると酷く居た堪れない。自分に役割がないという事がこれ程無力感を掻き立てるとは。デイとの通信はごく短い間であった、彼女もやるべき事が多々あるのだろう。警報は鳴り止め、その代わりレットランプが灯る。

「……まさか遭遇しちまうとはな」

「マザーが集結しているのではという話もあった、予想は出来た事だろう」

「逃げ切れると思うか？」

四郎の問いかけに銀次は口を噤む。肯定的な返事も否定的な返事も出来なかつた、脳裏を過るのは大断蜘蛛の姿。あの巨大なマザーがキルヒ達の部隊を蹴散らす光景が瞼の裏に焼き付いて離れない。デイの部隊の強大さは良く理解している、このリアリデイア級の艦船が五隻。ある意味銀次達調査隊が一度に派遣する戦力よりも多く、強い。

「……ま、分からねえよな、そりやそうだ、俺も分からねえんだからよ」

「万が一には備える、それだけだ」

尤もデイの艦隊が敗れるようであれば、銀次と四郎の二人など簡単に殺されてしまう
と分かっていたが。四郎と銀次は野太刀を掴んで壁に凭れ掛かった。ベッドに横にな
ることは無い、直ぐにでも動けるように緊張感を失わずに休息を行う。

互いに会話は無い、ただ唸るエンジン音だけが響いていた。

三十分程だろうか、レッドランプに照らされた室内でじつと待っていた二人の耳に砲
音が鳴り響いた。大砲の様な轟音ではない、レールガンに似た硬質的で短く鋭い爆発音
だった。それが艦船に搭載されている砲台の砲撃音だとは直ぐに理解出来た。銀次は
腰を浮かし、「始まったか」と呟く。

一度目の砲撃音から次々と重なる音、敵を射程圏内に捉えたのか、それともこれ以上
接近されない為の攻撃か。どちらにせよ分かるのは敵マザーの追い続ける速度がこちら
の艦隊を上回っているという事だ。

「撃ち合いか、そうなると向こうさんはコッチと同じ飛行型って事かよ」

「かもな……正直戦況が分からないっていうのはどうにも、落ち着かない」

「その気持ちは分かるぜ、銀次」

ぐつと野太刀を掴んで足を揺らす四郎、落ち着かない時の癖だ。銀次も壁に背を預け
ながら静かに深呼吸を繰り返した。

そんな静の二人に反し、ブリッジ内は慌ただしく声が飛び交っている。感知された反応は確かにマザーから放出されたであろう兵器群であった。しかし本体の姿はなく、兵器群は凄まじい速度で艦隊に追い縋っていた。放出した無人機からの映像はノイズが奔っている、拡大された兵器の姿は小型の航空機——一つ一つのサイズは恐ろしく小さい。

『全艦砲撃開始！ 敵兵器群、速力はかなりのものだけれど装甲は脆い、一発で落ちるよ！』

『単体じゃ弱いけれど数が多い……百や二百じゃない』

『デイ、このまま行くと五番艦が捕捉されるよ！』

『近付けさせないで、兎に角弾幕で数を減らすのよ、動力炉のエネルギーは全てエンジンと砲台に回さない！ 敵に取り付かれるまで電磁障壁の展開は不要、中央に報告は？』

『もうやった、警邏で今すぐ動ける艦を出してくれるって！』

リアリデイアを含む全艦の砲撃は次々と兵器群を撃墜する。個体個体で見れば大した脅威ではない、しかし余りにも素早い機動と恐らくランダム回避で縦横無尽に動き回る小型兵器は迫りくる砲撃の間隙を縫うようにして徐々に迫って来ていた。何より数だ、まるで空を覆わんばかりの群れは下手なマザーよりも恐ろしい。デイは砲撃指示を

出しながら中央のデータベースにアクセス、この小型兵器の情報を検索する。

しかし——該当なし。

その時デイが受けた衝撃は如何ほどか、人類が存在していた頃から収集したマザー情報は膨大である。その中に該当がないという事は対策の講じられていないマザーと言う事になる。大断蜘蛛であれば対エネルギーコーティングを施し、電磁障壁を貫通する実弾兵器を使用するなどマザーと戦うには強みを潰し、弱みを突く対策が必要不可欠。間違つても正面から無策で殴り合うなどしてはいけない。ある意味マザーと対峙し撃退するというのは『情報を持った状態で対策を講じる』というのが前提であった。

ここにきて完全な新種——あのテレポーターション搭載型と言い、一体どうい事なのか。

『ッ、リアリディアから各艦に通信、各艦搭載されているドローンの発艦指示、A型指定、後方の兵器群を叩くわ!』

『ドローンの射程距離にはまだ遠いよ、良いの?』

『構わないわ、最悪ドローンは捨て駒にする、誤射にだけは注意しなさい、演算処理を怠らないで!』

デイの指示により五隻の艦船から次々と小型ドローンが射出される。背後から迫る兵器群と比べると二回りは大きい。小型のプラズマガンを搭載している為だった。側

面から射出されたドローンは投げ出された空中でウィングを展開すると一斉に散会し追いつめる兵器群に向かって突撃していく。

ドローンの展開距離にはまだ遠い、しかしデイはここでドローンを使い切る判断を下した。情報が無い、つまり敵がどの様な攻撃をしてくるのかが分からない。あれ程小型で装甲も薄いのだ、速力に重きを置いているのは明白。この距離で攻撃をしてこない事から碌な兵装も搭載していない事も分かる。

では万が一——接近を許したら？

デイが予測したのは自爆型、即ち速力にモノを言わせて敵艦に特攻し、そのまま外壁に突き刺さった状態での自爆。前時代的で非効率的な攻撃だとデイは吐き捨てるだろう、しかしやられる側としては堪ったものではない。推進口にでも入り込まれたら誘爆の危険性だつてある。何よりその類の兵器は電磁障壁を貫通するのだ。

ドローンはものの数分で兵器群に突っ込み、そのまま戦闘を開始する。僅かな光と閃きが遠目に確認出来るものの敵が反撃している様子は見られない。ドローンを無視し、ただ我武者羅に艦隊目掛けて飛んで来る。その一心不乱さがデイに危機感を与えた、絶対に懐に飛び込ませては駄目だという危機感だ。先の自爆兵器という予想が現実味を帯びて来た。放出したドローンは兵器群を次々と撃墜するが圧倒的に処理能力が足りない、搭載しているプラズマガンだけでは捌き切れない数だ。艦船でも無理なの

だ、ある意味当然と言えば当然の結果。兵器群の行進は人類が存在した頃に度々発生していたという蝗害に良く似ていた。データベースで何度か目にしただけのものだが、この数と勢いは正にソレだ。

デイは暫くの間思い悩む、何度か自分の唇を噛んで何とも表現し難い不快感を呑み込むと、そのまま吐き出す様に命令を下した。

『五番艦、四番艦に要請、左右反転からの主砲斉射、エネルギー砲による敵殲滅！』

『良いの、デイ!?!』

『人類の為に手段は選ばないッ！ やりなさいッ！』

デイが叫び、近くに居た操縦桿を握る機械人形が叫ぶ。火力が圧倒的に足りない、一点集中型の兵装はマザーに効果的ではあるが今必要なのは兎に角手数数だった。デイには既に余裕が無かった、マザーを撃退出来る戦力と言うのは嘘や法螺ではない、何があってもリアリディアを守り切るだけの戦力と手段がデイにはあった。

どこか躊躇う様な口調の彼女とは裏腹に——リアリディアの後ろを航行していた五番艦と四番艦が突如減速、左右に分かれ旋回、反転。ゆっくりと本体を離れて孤立する様に後方へと流れていく。左右のバーニアが瞬き巨大な艦船が空気を裂きながら停止した。

『五番艦、四番艦艦長、命令受諾！ 通信、〔幸運を〕、以上！』

四番艦と五番艦が速力を棄て全砲門にて集中砲火を浴びせる。後方から凄まじい砲音と閃光。艦船の船首に搭載された一際巨大な砲口——エネルギー砲が唸りを上げた。動力炉はエンジンに浮遊分の僅かなエネルギーを回し、残りは全て砲台へと流していた。

窪みから青白い粒子が噴出し充填、そこから一拍置いて轟音が空気を揺らす。エネルギー砲による一斉掃射、正に極光の柱としか表現できない様なエネルギー束が兵器群目掛けて迸る。エネルギー砲は十秒ほど世界を白色に染め上げ、それから徐々に収束し細くなつて掻き消えた。青色の空に砲撃の残滓が漂う。

『ッ、敵影は!?!』

眩い光に目を細めながらデイが叫ぶ。ただの砲撃とは違う、文字通り面に等しいエネルギー砲による攻撃。それも二艦同時の掃射、直撃すればマザーと言えど手傷を負う程の威力。

『敵兵器群——抜けて来る!』

果たしてエネルギー砲は全ての兵器群を撃墜するに至らなかつた。白い極光が消え去つた後、少くない数の敵影が次々と飛来して来た。かなり数は削つた筈だ、現に連中の影は最初の四分の一以下。しかしそれでも全滅には程遠い。デイは思わず拳を強く握つた。

『あと一分で五番艦、四番艦が接敵するわ!』

『四、五番艦、低速で後退しながら砲撃開始!』

エネルギー砲を放つ為に後方へ流れた五番艦と四番艦はほとんど本隊から離れていく。彼女達は少しでも本隊に迫り続ける兵器群を撃墜しようと後退しながら砲撃を開始。そして一分もしない内に兵器群が二艦と同じエリアに侵入、デイは取り残された二艦が無残に撃墜される未来を想像した。

しかし——あわや接触かと思われた瞬間、兵器群は一斉に円を描く様に二艦を迂回、そのまま凄まじい速度で本隊を再び追い始めた。外装甲に掠りもしない、いつそ芸術的なまでな回避行動で擦り抜けるように艦隊を避けた兵器群はそのまま本体に向かって進む。

『敵兵器群、四、五番艦を素通り……!? このまま本隊に突っ込んで来る!』

『——』

デイの脳裏に四郎と銀次の姿が浮かんだ。単純にこの船が旗艦だと考えたからか? いや、違う、機械人形としての冷静な分析結果が囁いて来る。

間違いない、この兵器群は本艦——正確に言うならばリアリディアの中にいる人間を狙っている。連中は周囲の艦船になど見向きもしない、その行動から狙いは明らかだった。

『全艦、使える武器は全て使いなさいッ！ リアリディアは後部砲台以外兵装を全て使用控え、全速力で中央を目指せ！ 推進口が焼き切れたって構わない、兎に角最速で中央に到着すれば良い、艦船の消耗は考えるな！』

デイは大声で叫んだ、その瞬間ブリッジに居る全ての機械人形が一斉に動き出す。必要な砲台を止め、僅かなエネルギーさえも全てエンジンルームに回す。三角形の形で前進していた本隊からリアリディアのみが突出し、残り二艦はリアリディアを守る様にして敵兵器群の進路を塞ぐ。連中の狙いは全員の知るところとなった。

敵兵器群はリアリディアが更に加速した事を理解する。他の艦の動きから自分達の狙いが露呈した事も。そしてこのままでは追い付くのに時間が掛かり過ぎると判断、瞬間後部の推進口から凄まじい爆音と共に円型の緋色が飛び出した。素のままでも十二分な速さを誇った兵器群は更に爆発的な加速を実行する。

『敵兵器群加速！ は、速ッ!! これ、何でッ——駄目ッ、デイ、追い付かれる！』
『アフターバーナー!!?』

敵兵器群が凄まじい速度でリアリディアに追い縋る。ランダム回避を中止し超高速で直線飛来するそれらを二、三番艦が恐ろしい精度で次々撃墜するものの、リアリディアとは比較にならない程の加速を見せた兵器群に機械人形達から悲鳴が漏れる。後方に陣取っていた二艦が追い抜かれ、リアリディア後ろに食い付くまでそう時間は必要な

かった。

『二番、三番艦、抜かれた!』

『デイ、動力炉のエネルギーを電磁障壁に回そう!? 速度は落ちるけれど素の外装甲だけで受けるよりは良いでしょ!』

『駄目よ! 速度を落としたら一気に吞まれる、このまま全速力で進みながら後部砲台で数を減らしなさい!』

ぐつと拳を握ったままデイは指示を出す。電磁障壁の展開はデイも考えた、しかしあの軽量小型の兵器群がエネルギー兵装を積んでいるとは考えにくい。そしてもし特攻自爆型であるならば電磁障壁なんでものは殆ど無意味だ。仮にエンジンに回しているエネルギーを全て電磁障壁に回したとしても守り切れまい。機械人形の自爆とは訳が違う、自爆し、破壊する為だけに生まれた兵装とはそういうものだ。

『EMPによる機能障害発生! 砲台の精度が落ちる、ドローンも追いつけない!』

『取り付かれた! 取り付かれた!』

『デイ! リアリディアが囲まれる!』

『人類保護区の隔壁下ろせ! 他はどうなっても良い!』

ブリッジから目視できる距離に兵器群が現れる。細長いシルエット、申し訳程度のウィングに後部には推進口が二つ。大きさはどれ程だろうか、少なくともデイたちの半

分程もない。それらが群れとなってリアリディアを覆ってくる。追い付かれた、デイの胸内が焦燥に支配される。『衝撃に備えて！』とデイが叫ぶとブリッジの機械人形達は耐シヨック姿勢を取った。予想される衝撃に備えてデイも身構える。

『攻撃——来ない、連中、何もしてこない』

『武器を搭載していない……？　これは、一体』

しかし待てども待てども衝撃は来ない、それどころか連中は攻撃する素振りすら見せなかった。兵器群はリアリディアと並走する形で集結する。機械人形は困惑した、攻撃する素振りも見せずただ並走するばかりの兵器群に。これにはデイも困惑を隠せない、単純に攻撃されるよりも余程厄介な行動。もしや音響兵器や妨害の類かと勘繰った瞬間、兵器群が一斉に赤いレーザーをリアリディアに向けて照射。艦首から後部の推進口に至るまでゆつくりとレーザーを移動させた。

『これは——』

まるで観察する様に連中はレーザーを照射し続ける。レーザーそのものは攻撃ではない、単純にポインターの様にも見えた。その間にも後部砲台が火を噴き、次々と兵器群を撃墜して行くが連中はお構いなしだ。デイが何かを察して咄嗟に艦を振り回して周囲の兵器群を突き放せと指示しようとした瞬間。

周囲の兵器群が一斉に色を失い——落下。

火を噴く事も無く、まるで役目を終えたとはばかりに力を失って減速、そのまま下へと消えて行く兵器群。

『——えっ』

『……何？ どういう事？』

その光景に機械人形達が呆然とした表情を見せる。ただ赤いレーザーを照射しただけで、特に何があつたという訳でもなく機能を停止した兵器群。デイは暫く何も言う事が出来ず、他の機械人形達と同じように呆然とした表情で立ち尽くしていた。しかし数秒で意識を取り戻した彼女は『艦の被害状況を』と言葉を絞り出す。

『えっと、損害なし、強いて言うなら無理に加速したから推進口に熱が蓄積している位……かな』

『外装甲に衝撃や、何かシステム周りに不具合は？』

『………何も』

担当官が首を横に振る、嘘は言っていない、リアリディアには本当に何の被害も存在しなかった。意味が分からない。デイはその言葉を飲み込んで減速を指示、後方から全速力でこちらに向かう四隻の艦船の合流を待つ。デイは深く息を吐き出して自分の顔に手を当てた、

『念のため連中の残骸を他の艦に回収させて、何か分かるかもしれない、周囲に敵影は

『？』

『今のところなし、けれど依然ノイズは発生中』

『EMPを垂れ流している敵がまだ居るかもしれないわ、偵察用のユニットを、回収を終えたら速やかに此処を離れる、動力炉のパスを通常設定に戻して、念のため電磁障壁を展開、他の艦からも被害状況を聞いておいて頂戴』

ブリッジの機械人形にそう告げたデイは耳に指を当て四郎と銀次に通信を繋げる。数拍おいて繋がった通信にデイは安堵し、そのまま戦闘終了を告げた。釈然としない終わりであったが敵を撃滅したのは事実だったし、何より二人を安心させなければならぬという機械人形特有の感情が働いていた。

『四郎様、銀次様、敵の殲滅が完了しました——もう安心です』

そう口にして数秒、しかし向こう側からは何も声が聞こえてこない。一体どうしたのだろうかとデイが僅かに声を大きくし再び問いかけた。

『四郎様？ 銀次様？』

けれど返事はなかった。流石にこれにはデイも顔を顰め、不穏な気配を感じ取る。詰まった呼吸をそのまま踵を返して勢い良くブリッジを飛び出す。その背に『デイ!?!』と声が投げかけられたが彼女は無視して駆けた。途中擦れ違う機械人形達が一体何事かと驚き道を譲ったが、デイはその悉くを突き飛ばす勢いで押し退ける。

そしてブリッジの下層、人類保護区へと辿り着いた彼女は銀次と四郎の居る部屋へと飛びつく。外部からの入室には認証コードが必要だった、その入力を終えるまでの時間が凄まじく長く感じた。

「四郎様！ 銀次様ッ！」

部屋に飛び込むディ。二人がその部屋にいると信じて。

しかし其処に人類最後の希望である二人の姿は——なかった。

絶望に至る巨影

「ゲホツ——なあ、オイ、生きてるかア、銀次い」

「……まあ、何とかな」

立ち上る砂塵、アスファルト舗装された道路、その瓦礫を跳ね除けながら声を上げる。見れば四郎が直ぐ横に転がっていた。兜の表面を撫でながら覚束ない足取りで立ち上がる四郎、銀次は直ぐ横に突き刺さった中巻野太刀を抜き放ち表面を覆っていた砂を払う。周囲は薄暗く、恐らく地下である事しか分からなかった。辺りには中途半端に舗装された壁やら天井が見える。しかし所々から土が見え隠れし、さらさらと床に零れ落ちていた。

幸いにして怪我は一つとしてない。軽く脳が揺すられたただけだ。銀次は未だに揺れる視界を整えながら鞆のまま中巻野太刀を地面に突き刺し、そのまま寄り掛かって眩く。

「一体、何が起きた？」

「さあて、俺にはサツパリだ、俺にも分かるのは此処がリアリアディアじゃねえって事だけ

だな」

「そんな事は誰にだって分かるだろう、問題は一体どうやって俺達が此処に来たか——だ」

「それこそ知らねえよ、テレポーターションとかじゃねえのか？ 出来るかは知らねえけどよ、突然視界が切り替わったと思つたら地面とコンチハだ、全く冗談じゃねえ」

「……成程」

銀次が最後に見た光景はリアリディアの内部、人類保護区と呼ばれた部屋の風景だ。少なくとも銀次と四郎は部屋を出た記憶を持たない。気付いたら見知らぬ場所に放り出されていた。『いつの間に』とか『気付いた時には』とか、銀次は嫌いな表現であったが事実そうであったのだから他に言いようがない。文字通り気付いたら目の前に地面が迫っていて、そのまま叩きつけられたというのが現実だった。テレポーターション攻撃を受けたという四郎の言葉に銀次は納得する、寧ろそれ以外にどうやってこんな事が出来るのかと。しかし対象を指定してテレポーターションできる兵装、或は装置など存在するのか。

「兎に角デイと……キルヒにも連絡を、最悪誰でも良い、兎に角通信を飛ばせ」

「ああ、ああ、分かつているっての、クソツタレ」

悪態を吐きながら四郎は動き出す。しかし四郎と銀次が救難信号を飛ばすよりも早

く、二人の目に影が映った。周囲を覆っていた砂塵の向こう側に黒い影が蠢く。地鳴りの様な音と共にゆらゆらと揺れるソレ、銀次と四郎は砂に塗れた兜を指で拭いながら思わず吐き出した。

「……ああクソ、全く、コイツ等つてもつと貴重なレアモンスターみてえなモンじゃねえのかよ」

「……俺達がたつた二人の人類だからかもしれないな、殺したくて殺したくて仕方ないんだ、なんせ他に獲物がいないのだから」

「ハッ、酷い話だ」

四郎も吐き捨てながら背中の中巻野太刀を抜刀——目前を見つめる。砂塵が晴れた先に見えるのは予想通り。こんな巨大な反応を二人は他に知らない。

「マザー」

呟いた言葉は虚空に消えた。目の前に見えるのは三メートル程の巨軀、マザーとしては余りにも小型、しかし視界に表示される熱源反応は巨大過ぎた。外見はまるで蟻の様だった——いや、実際蟻を象っているのだろう。体を左右に揺らし大きな鍔のような口をギチギチと鳴らしている。無論体は機械だ、あくまで型であつて生物ではない。「気持ち悪い奴だ」と四郎が吐き捨てた、そして銀次もその言葉に同意する。

そして次の瞬間、奴は轟音と共に飛び上がった。大量の土砂と共に体全体が出現す

る。巨大な腹部、丸まったダンゴムシの様な鋼鉄の塊。頭部から足にかけての部分は奴のほんの先端に過ぎなかった。飛び上がったマザーの勢いに土砂が巻き上げられ、轟音と共に巨軀が着地を果たす。どうやら土の中に潜り込んでいたらしい、そんな機械は初めて見た。降り注ぐ土砂を払いながら四郎は呟いた。

「——蟻地獄」

そうだ、コイツの外見はウスバカゲロウの幼虫、蟻地獄に酷似していた。こんな地下の薄暗い空間に住んでいるのも納得である。奴の体で地下空間の半分近くが埋まってしまった。何と言う巨体、前部分ならば兎も角後ろの腹部でも叩きつけられたら圧死してしまうだろう。

「四郎、通信は」

「ああ、今すぐに——」

銀次と四郎はキルヒやデイに対して救難信号を送ろうとする、どう考えても過剰戦力だ。自分達二人でマザーを相手取れるとは欠片も考えていない。しかし次の瞬間、蟻地獄が甲高い鳴き声と共に後ろの背中から複数の円柱を生やした。一体何だと身構える二人を前に青白いパルス波が周囲に撒き散らされる。銀次と四郎はその場に伏せ、そのパルス波をやり過ぐすが——影響は直ぐに現れた。

「ッ、EMPか!？」

銀次が叫び舌打ちを零す。パルス波を浴びた次の瞬間視界情報が揺らぎ、モニタが不鮮明になったのである。無論銀次達の着用している鎧武者にも対EMP措置は取られている、その為全機能を停止させる事はなかった。しかし一瞬機体が気を失ったように軋み、通信機能やマツピング機能が沈黙、銀次の視界に表示されていたパラメータが見えなくなった。時折ノイズも走る、一時的なものではない、コイツはEMPを垂れ流しにしているのだ！

「妨害特化のマザーとかアリかよ畜生！」

「マザーにそんな事言っても通用しない、良いから止めるぞ四郎ツ！」

銀次と四郎は抜刀した中巻野太刀を構えて突進する。二人で倒せるとは思っていない、しかしEMPを止めなければ逃げる事すら困難だった。狙うのは背中に生え出た円柱である、青白く光るラインを持つソレは明らかにEMPの発生に関与していた。

「デカイから鈍いなんて思うなよ！」

「二度目はねえよツ！」

銀次の言葉に四郎は叫び、地を這うように駆ける。蟻地獄は接近して来る二人を見下ろし脚で駄々を捏ねる様に攻撃を開始した。いや、それが攻撃なのかどうかも定かではない。ただ二人を近付けない様に威嚇している様にも見えた。

だがその巨体でランダムに脚を地面に叩きつける行為はそれだけで威圧感もあるし

殺傷力も十分である。何かの拍子に直撃を貰えば一撃であの世に送られる事は明白だった。脚が地面を踏み締める度に部屋全体が軋み、パラパラと土砂が降って来た。

「このデカブツ……！ 暴れんじゃねえ！」

四郎は暴れる足の間を掻い潜って蟻地獄の顔面に中巻野太刀を叩きつける。斬るというよりは殴り付けるといふ様な使い方だ。案の定、ガチン！ と火花と甲高い音を鳴らした刃は蟻地獄の表面を軽く傷つける程度で全くダメージは通っていない。

ダメージが無い事に舌打ちを零す四郎、その左右から大顎が迫り四郎を切断しようとする音を鳴らす。

「四郎、危ない！」

「分かっているつつうのツ——」

シャコン！ という鋭い音が響いた。四郎が間一髪で屈んだ瞬間、その頭上を大顎が締め付ける。マトモに食らっていれば上半身と下半身が分かれていた、そう思ってしまう程度には恐ろしい一撃、まるでギロチンだ。四郎はそのまま頭から転がって距離を取り、再び中巻野太刀を構える。銀次はそんな四郎の脇を駆け抜け、今しがた四郎が斬り付けた顔面を蹴り飛ばし宙を舞う。胴体を飛び越え目指すのは背中——EMP発生装置の役割を果たしているのものであろう円柱である。

「二本、貰ったアツ！」

面頬の中で叫び、銀次は中巻野太刀を振り下ろす。肩口から斜めに、落下する速度と腕力、筋力補助を重ねた一撃は中巻野太刀の頑丈さも相まって中ほどから火花と共に円柱の一つを斬り飛ばした。破砕音、砕け散る欠片、ブルーライトが視界の中で瞬き半分になった円柱が宙を舞う。

瞬間、銀次の視界に一瞬マッピング機能が復帰した。ほんの一秒にも満たない時間、それだけで十分だった。一瞬でも機能が戻ったという事はマザーの妨害機能が低下した証左に他ならない。銀次は斬り付けた円柱を睨めつけ叫んだ。

「四郎！ この円柱だ、コイツを狙え！」
「おおッ！」

四郎は力強く返事をする。銀次は振り抜いた中巻野太刀を勢いそのままに引き戻し、そのまま二本目へと斬りかかろうと飛び出す。しかし次の瞬間に足元が揺らぎ、視界が反転、宙へと放り投げられた。蟻地獄が体を大きく左右に揺らしたのだ、そのせいで銀次は体勢を崩し足を踏み外した。

「ぐおッ……!?!」

宙に投げ出された銀次は直ぐに体を捻って体勢を整え、落下する地面に足から着地。そのまま勢いを殺す為に転がる。しかし咄嗟の事で落下の勢いを殺し切れず盛大に二度、三度回転した後には停止、鎧武者が土砂に塗れた。

地面に這い蹲りながら顔を左右に振り付着した土砂を払う。視界が揺れたが問題無い、機体や肉体にダメージもなければ武器も失っていない。銀次は中巻野太刀を杖代わりに突き立て、そのまま立ち上がろうとし——その頭を踏み潰さんと振り下ろされた脚を間一髪の所で避ける。

轟音と共に地面が抉られ、そのまま二発、三発と銀次を追って脚が次々と飛来する。しかしその全てを銀次は転がって避け、僅かな隙を見つけて大きく後方へと跳躍、砂塵を巻き上げながら着地し呟いた。

「妨害特化のせいか、戦闘力は然程高くない……いけるか？」

そう言つて中巻野太刀を握り込む。奴の性能は妨害機能に特化していた、巨軀から繰り出される攻撃は確かに脅威でもあり恐ろしいものだが大断蜘蛛の様に掠つただけで致命傷になり得るものではないし、予想以上に機敏であるという事も無い。或は他の兵器と併用して運用する事が前提のマザーなのかもしれない。

「おおおおオオオオッ！」

四郎が叫び不安定に揺れる背を物ともせず円柱の一本を力任せに斬り飛ばす。いや、アレは斬り飛ばすというより押し折つたという表現が適切か。中巻野太刀が食い込んだ断面は内側にめり込んでおり、明らかに技ではなく力で貫通させたという切り口だ。

しかし破壊は破壊、八本あつた内の円柱が六本になる。このまま順に円柱を破壊出来

れば奴の妨害電波も停止し救難信号を発信できるだろう。銀次も勢いこのまま押し切ろうと駆け出した次の瞬間——蟻地獄が金切り声を上げた。

それは地下空間において暴力的とも言える音量だった。走り出そうとした銀次の体が音の圧に弾き飛ばされ、数歩後退し体を竦める。奴の背中を駆けていた四郎はその場で足を滑らせ、しかし咄嗟に背中中の表面に脇差を引っ掛けてぶら下がった。

「ッ、何だ……!?!」

「銀次ッ!」

四郎が焦燥した声色で叫ぶ。音に竦んでいた銀次はハツと顔を上げ、瞬間視界に飛び込んで来たのは——六つの穴。それは黒光りしていて、幾つかの細長い筒を纏めた様な形をしていた。それが自分に向かって突き付けられている。その正体を看破した瞬間、銀次は中巻野太刀を投げ捨て近くの大きな瓦礫に飛び込んだ。

轟音、数多の銃声とマズルフラッシュ。

蟻地獄が腹の中から取り出したのはガトリング砲、それが二門、銀次に向かって突き付けられ火を噴いた。地面を揺らす轟音と空薬莖同士が重なる音、それが連続して鳴り響き銀次の飛び込んだアスファルト舗装された道路の残骸を無情にも削り取っていく。飛び散る破片、弾丸が硬質的な何かを削り取っていく音、そんな音の洪水に吞まれながら銀次は叫んだ。

「何でマザーが実弾兵器なんて積んでいるだ!?! 骨董品じゃなかったのかッ!」

頭を抱えながら瓦礫の影に蹲り銀次は悪態を吐く。しかし叫んだ後にコレが奴の戦い方なのだと理解した。あのEMPは行動を阻害する目的もあつたのだろうが、何より『エネルギー兵装』を停止させるものだったのだ。

相手の武器を使用不能にし、後は一方的に使用可能な実弾兵装で仕留める。成程、支援特化なんてとんでもない、エネルギー兵装が主戦力であるこの星では十分に驚異的なマザーだ。

ガトリング砲の攻撃によって瓦礫は瞬く間に破碎される。銀次は壊れる寸前に瓦礫の裏から飛び出し、腰部の収納口からスモークグレネードを取り出して即座に起爆させる。火薬の爆ぜる音と共に白煙が周囲に立ち込め、銀次の姿が一瞬にして掻き消えた。それでもマザーはガトリング砲による射撃を止めない、盛大なマズルフラッシュを焚きながら銀次の居るであろう場所に向けてやたらめつたらと撃ちまくった。

「このクソ野郎がアッ!」

四郎はそんな蟻地獄の背の上で立ち上がると不安定な足場もモノともせず円柱に向けて中巻野太刀を叩きつける。ガチン! と音が鳴り響き刃は円柱の中ほどまで埋まった。足場が悪いせいで一刀にて斬り飛ばす事は出来なかったが、ブルーライトは何度か点滅しやがて光を失う。

ある程度の損傷を与えれば機能は停止する。モニタのノイズが目に見えて減少し、四郎は円柱から無理矢理野太刀を抜き放つと続けて残りの五本も破壊しようとした。しかしそんな四郎に無数の銃口が向けられる。見れば奴の円柱が生えていた背中から幾つもの固定砲台が顔を覗かせていた。いつのまに、四郎がそう驚きの感情を抱くも時間は止まらない。

「うお、オオオ!？」

鳴り響く銃声、四郎の悲鳴。四郎は自分に殺到する銃口から逃れる様に背中から飛び降りる。多くの弾丸が閃光の様に四郎の左右を奔り、幾つかの弾丸は鎧武者の装甲を強かに叩く。衝撃で体勢を崩した四郎が受け身も取れずに地面を転がり、中巻野太刀が地面の上を滑った。

「四郎オツ!」

白煙の中から飛び出す銀次、地面に叩きつけられたまま呻いていた四郎の腕を掴んで駆ける。間一髪で銃弾が四郎の居た場所を抉り、半ば引き摺る様な形で近場の瓦礫に飛び込んだ銀次は「大丈夫か!？」と叫んだ。

「ゲホツ、ああ……ああ、大丈夫だ、問題ねえよ」

咳き込む四郎、所々凹んだ鎧武者の装甲を指でなぞり「ああ、クツソ、滅茶苦茶痛かったぞ」と悪態を吐く。しかし弾丸は貫通していなかった、全て表面装甲で止まっている。

実弾なのが幸いした、これがレーザー兵器の類であれば貫通していたかもしれない。衝撃は生身を強かに叩いたが怪我らしい怪我は無かった。

「武器を落とすしちまった、脇差も使っちゃったし、俺ももう丸腰だぜ」

「俺のをやる、上手く使ってくれ」

自分の空っぽの手を見て肩を竦める四郎、そんな四郎に銀次は中巻野太刀を押し付ける。白煙から飛び出す瞬間に回収した自分の野太刀だった。四郎持っていた野太刀は落下の瞬間に手放し、蟻地獄の近くに転がっていた。

「良いのかよ?」

「俺はまだ脇差がある、それに脇差じゃ力任せに振ったって大した威力は出ない、お前の野太刀を拾うまではこうした方が良い」

銀次はそう言って四郎に大した怪我が無いと確認を行い、大丈夫だと判断した後瓦礫の横合いから顔を出して蟻地獄を観察した。四郎と銀次が隠れた瓦礫に対して蟻地獄は沈黙を守っていた。背中や腹から取り出した銃器は動かない、ただこちらに銃口を向けるだけに留まっている。エネルギー兵装と違い実弾は有限だ、恐らく無駄弾はここぞという時以外は使用しない様にプログラムされている。アイツに白煙は効かなかった、熱探知か粒子か、銀次は此方を見る赤色の三つ目をじっと睨みつける。

あのデカイ背にはたらふく弾薬が詰まっているに違いない。

「さて……どうするか、まだ通信機能は回復していないよな？」

「ああ、回復はしてねえが一本潰すごとに状況は良くなっているぜ、コイツの兵装妨害兵器にしちやちつと中途半端過ぎねえか？」

「多分通信機能やマップ機能を潰す事が目的じゃないんだ、これは副産物だよ、メインはエネルギー兵装の妨害だ」

「あん？ エネルギー兵装の妨害？」

四郎が怪訝な声を出す、俺達はエネルギー兵装なんて持っていないぞと言いたげな声だった。当たり前だろう、連中が想定している敵は機械人形か若しくは同じマザーだ。合金を着込んだ人間なんて敵の数に入っていない。

銀次は瓦礫の隅っこから僅かに顔を出し、マザーから生え出たガトリング砲を指差しながら言う。

「そうだ、この世界じゃ実弾兵装なんて骨董品だ、だというのにマザーという『決戦兵器』にそんな骨董品を搭載するなんて、変な話だろ？ 俺達の世界で言えば艦船にボウガンを積み込んでいる様な物だ」

「そりゃあ……おかしいな」

「だろう？ 多分、エネルギー兵装を封じて自分だけ実弾兵器で一方的に攻撃するか——或は二人組チームで動いていたマザーなのかもしれない」

「……おいおい、笑えない冗談やめろよ、もう一体マザーが居るってのか?」
「可能性の話だ」

露骨に警戒心を露わにした四郎に対して銀次は首を横に振る。近年の兵器は常に一体で完結している、しかし過去人間が小銃で殺し合っていた時代はあらゆる兵器に専門の能力を持たせ、協力し一つの強大な力として運用していた歴史も存在していた。もしその設計思想が残っていたとしたら、決戦兵器であるマザーを複数運用するという形が存在したら。

「ま、二体もマザーが居たら詰みだろうな」

「当たり前だろ、一体でも手に余るってのに、二体来たら文字通り蹂躪だ」

吐き捨てる様な四郎の言葉に頷く。そうだ、これは相手が比較的支援特化のマザーであり尚且つエネルギー兵装無効化に傾注した機体だからこそ戦えているに過ぎない。通常のマザーであれば既に何度死んだことか。これに合わせて戦闘型のマザーでも来てみる、一瞬で蹂躪されて終わりだ。四郎はどこか達観した様な吐息を零し、銀次から受け取った野太刀を担いで問いかけた。

「戦い方は?」

「変わらない、あの背中に生えている円柱を片っ端から斬り飛ばすか、押し折る、銃器が出た分近付くのが困難だ、十二分に注意しろ、装甲を過信すると抜かれるぞ」

「つっても上の砲台は別段そこまで脅威でもねえ、撃たれた部分はちつと凹んだ程度だ」
表面が僅かに凹んだ各所の装甲を指で擦り四郎は呟く。奴の銃器は随分古いタイプの様だった、火力はそれ程でもない、合金が凹む程度であれば然程脅威ではないだろう。四郎は蟻地獄の腹から出ているガトリング砲を指差し、「あれが一番怖えよ」と肩を竦める。背中から円柱を守る様に出現した砲塔はそれほど口径も大きくない、しかし奴の正面にあるガトリング砲だけは別だ。圧倒的な連射速度で装甲諸共中身をミンチにするだろう。銀次は脇差を逆手に持ち、ふつと息を吐き出すと力強く頷いた。

「なら俺が正面に出て囨になる、その間に円柱を破壊できるだけ破壊してくれ」

「……大丈夫かよ？」

「我慢するのは得意だ、任せろ」

そう言つて、銀次は四郎の背中を叩く。「合わせろ、出るぞ」と銀次が身を屈めると、四郎も一度面頬のボルトロックを確かめ頷いた。時間にして五秒、二人の呼吸が重なった瞬間に瓦礫の影から飛び出す。銀次は敵の正面を一直線に、四郎は円を描く様に迂回して。両足に動力炉から発生するエネルギーを大目に回した銀次の速度は通常よりも遙かに速い。大断蜘蛛から逃走した際に使用した配分だった。

蟻地獄は一直線に向かつて来る銀次に向けガトリング砲を動かし、発砲。無数の弾丸が地鳴りと共に飛来するも、銀次は左右に大きくステップを踏むことで弾丸の殆どを躲

して見せる。銀次は地面に顎がついてしまうのではないかと言う程に前傾姿勢で駆けていた。まるで地を這う蛇の様である、それが一番被弾する確率が低いと銀次は知っていた。

銀次はガトリング砲の目と鼻の先まで駆け抜け、直前で自身の顔面に飛来する弾丸を感知。エネルギー兵装と比べ銃弾は迫りくる速度が遅い、自動防護システムが頭部を守る為に腕を動かし、銀次が知覚するより早く飛来した弾丸を脇差で弾いた。

「ぐっ」

しかし弾いた瞬間に脇差の刀身がブレ、金属特有の振動が骨身に響く。手に持っていないはず欠けた脇差が後方へと流れた。銀次は無手の状態で必死に体勢を立て直し、四郎が落とした野太刀の場所まで接近、飛びついた。

その脇腹にガトリング砲が火を噴くが、銀次は右手を野太刀に伸ばしながら脚部に設置されている回転型の固定ロックスを解放、瞬間カプセルタイプの発生装置が地面に落下。接地と同時に薄い電磁膜を周囲に張った。それは飛来した弾丸を僅かに逸らし、弾丸はぐにやりと曲がりくねって銀次の脇を通り過ぎる。調査隊に支給される一発限りの防御兵装、エネルギー兵器には無力だが飛んで来る金属に対しては無類の強さを誇る。ただし効果時間は非常に短くコストが非常に高い、故に支給されるのは一人につき一発のみ。銀次はオレンジ色の薄い電磁膜が弾丸を逸らしていくのを確認しながら、そ

の中心で掴んだ野太刀を地面に突き刺す。

視界に表示されたウインドを視線で操作する、鎧武者に指示するのは『安全装置の解除』、各パーツの耐久限界以上に稼働させない為のセーフティ。それを銀次は己の意思で解除、オレンジ色の警告灯が視界に瞬き安全装置の再施行までの時間がウインドで表示される。凡そ時間にして三分、鎧武者が獣の様な唸りを上げて各々のパーツが僅かに震えた。

「さあ——我慢比べだ」

電磁膜が消失する、銀次に齎された安息の時間は五秒。地面に落下した発生装置が色を失い、怒涛の勢いでガトリング砲が火を噴く。その様をじつと見つめながら銀次はぐつと姿勢を低くし、野太刀を地面に突き立てたままその後ろに隠れるようにして地面を踏み締めた。

接触、衝撃、野太刀の刃に弾丸がぶちあたり火花を散らす。銀次は着弾した瞬間に脛脛、腰、背中にある緊急着地用スラストを起動。本来空挺作戦や緊急時にのみ使用する減速機構を衝撃緩和の為に使用する。

ドゥツ！ と砂塵が舞い上がって銀次の背中、脛脛、腰から青白い炎が噴出する。ガトリング砲が次々と野太刀に射撃を加え、正確に銀次の頭部を破碎しようと攻撃を続ける。一秒間に一体何発着弾しているのかすら分からない、まるでぶち当たる津波を一人

で抑えている様な気分だった。目の前に火花が散る、寧ろそれ以外見えない、凄まじい衝撃が絶え間なく銀次を押し込みズルズルと後方へ下がっていく。動力炉は全開だ、スラスタも、一瞬でもエネルギー供給が間に合わなければ野太刀諸共後ろに吹き飛ばされ、そのままハチの巣にされるだろう。

だと言うのに——押し込まれる。

「ぐ、お、おオオ、オオオオオっ!？」

終わらない衝撃、逸れた弾丸が露出した肩や腕の装甲を強かに掠める。如何に頑丈な野太刀とは言えこれでは破壊されてしまうのではないか、そんな不安が込み上げて来る。しかしガトリング砲をいつまでも避け切れるとは思えない、なら最も頑丈で堅牢な野太刀を盾に耐えきるのが最も確実な方法。実弾兵装は骨董品——銀次の世界ではその骨董品が最も脅威として認識されていたのだ。故にこの兵装、弾丸程度にへし折られる程軟ではない、そう信じる。

野太刀の特徴は頑丈で、長く、重い、それだけ。

それだけのだから、耐えて見せろ！

銀次は歯を食いしばる、背中のバーニアが徐々に勢いを失くし視界に赤いアラートが表示される。内容はスラスタの熱量許容値限界、そして各部衝撃吸収機構の酷使警告、脚部と腕の関節部位がギチギチと音を鳴らしている。限界値を外していなければ今

頃機体が衝撃緩和の為に防御態勢を解いてハチの巢にされていただろう。

不協和音に晒されながらも銀次は抗う事を止めない、スラストは融解直前まで酷使し、腕や足の損傷には目を瞑る。凄まじい衝撃を吸収し続けている両足の関節が徐々に熱を帯び、断熱シールドが溶け始めたとなアウンスが叫ぶ。銀次の生身にも影響が及ぶレベルだ。

これはそろそろかと腹を括り始めた矢先、ガトリング砲の連射が止まる。津波を押し留めていた様な衝撃が止み、銀次は野太刀に凭れ掛かる様な形で崩れ落ちる。

見れば奴の銃口が恐ろしい程の白煙を立ち昇らせ、銃身が真っ赤に発熱していた。超加熱^{オーバーヒート}、奴のガトリング砲も限界だった。時間にしてどれほどか、正確には分からないがあれだけバカスカ撃つたのだから冷却処理も間に合わないだろう。既にセイフティ解除は終了していた、機体には熱が籠って蒸気と軋みをこれでもかと言う程にあげている。けれど目の前には射撃不可能となった敵の主砲。

今しかない、そう思った。

銀次は軋みを上げアームを打ち鳴らす鎧武者に無理をさせ、立ち上がる。超加熱状態のガトリング砲、鉄は発熱した状態ならば断ちやすい。引き抜いた野太刀の刃はポロボロだった、しかし折れてはいない、幾つもの弾丸を食らいながらも健在、表層がギザギザに刃毀れし中ほどまで亀裂が入っていて尚も兵装足り得た。

銀次は駆ける、一步目にして脚部の関節パーツ、留め具が弾け飛ぶ。バーニアからは熱気と白煙が漏れていた。それでも尚銀次は無理を押しして蟻地獄に飛び掛かる、振り下ろされる多脚の攻撃を紙一重で躲し、ガトリング砲に向け一太刀。

ガツン！ と強力な一撃が入り、火花と共にその砲身が歪んだ。赤く発熱したバレルが湾曲する、斬れなかった。銀次は自分の腕を見て顔を顰める、鎧武者の関節部分が火花を散らしパワーアシストが上手く発揮されていなかった。

銀次は中ほどまで食い込んだ中巻野太刀を両手で確り握り、そのまま鎧武者も含めた全体重を押し付ける。上から重量で押し切ろうとしたのだ。ギチギチと刃とバレルが軋みを上げる、実際鎧武者を含む銀次の自重はかなりのものでバレルは射撃不可能な程にまで陥没し、銀次は食い込んだ中巻野太刀から手を放してそのまま弾丸を止める堤防とした。

「背部ユニット乖離処理開始！ 緊急排除！」

続いてもう一つのガトリング砲、既に冷却が始まっているのか赤く発熱した銃身が冷め始めていた。もう野太刀で断ち切る事は考えていない、銀次は面頬の中で叫び幾つかのフェイズをすつとばして背中の最深装甲板を除く背部ユニットを排出する。スラスタを酷使した結果、断熱シールドが溶け落ちた背部ユニット、それを切り離しガトリング砲へと投げつける。元々スラスタ関係の爆発による被害を防ぐ為に背部ユニッ

トだけは単体で排除できるように設計されていた。銀次はソレを利用し、背部ユニットを即席の爆弾として扱った。

「自壊処理ッ」

投げつけると同時後ろへと飛び、起爆。小規模の爆発は足元の砂を巻き上げガトリング砲に直撃した。砂塵が晴れると無残にも拉げた銃身が露わになる。銀次はたった一人でも恐らく蟻地獄の主兵装であろうガトリング砲を破壊して見せた。しかし銀次も無事ではない、爆発の衝撃で後方へと転がり、そのまま破損箇所だらけの鎧武者で地面に打ち捨てられる。外部損傷はそれ程でもない、しかし内部の損傷が凄まじく輪郭に至っては弾丸に外側の装甲が削り取られていた。

「銀次ッ、無事か!？」

「……ああ、ああ、大丈夫だ」

地面に転がった銀次は面頬を脱ぎ捨て、収納できなくなった兜を無理矢理剥ぎ取る。地面に転がったそれを尻目にゆっくりと上体を起こせば、奴の背中に立った四郎が此方を見下ろしていた。

その足元には破壊目標である円柱が二本、転がっている。

「あと二本だけだ! もう下がって見てろ、後は俺がやる!」

「すまない……任せたぞ、四郎」

銀次は白煙を吹き出した鎧武者を動かして近場の瓦礫へと身を寄せる。奴の脚部攻撃が届かない位置だ、蟻地獄の背中側を見てみると自分が奮闘している間に手際よく処理したのか、全ての砲台が破壊され円柱も殆ど押し折られていた。

運が良かった、銀次はそう呟く。

相手が支援特化のマザーで、尚且つ実弾装備でなければこう上手くはいかなかっただろう。四郎は銃身が潰れた砲塔の前で最後の二本を破壊しようとしている。マザーに勝利する、その甘美な言葉が脳裏を過り疲労困憊の体で笑みを浮かべた瞬間。

バクン！ と何か、留め具が弾ける様な音がした。

それは蟻地獄の背中から。見れば奴の側面に張り付いていた四角い装甲とも固定具とも呼べるような物が次々と弾け飛んでいた。何か嫌な予感があった、焦燥感とも恐怖とも呼べる感情が銀次の口を動かした。

「四郎ッ、逃げるー！」

しかしその言葉に被さる様にして一際大きな破砕音。それは蟻地獄の背部、その一部の装甲を弾き飛ばし——弾薬が詰まっているのだらうと銀次が予測した場所から、四足歩行の兵器が姿を現した。

何か動物や昆虫を象った訳ではない、無機質的で兵器然とした形状。平べったい四つの脚に大きなモノアイが一つ。多目的のマルチアームが背部に備え付けてあり大きさ

は縦に二メートル半程、銀次のいた地球でも良く目にしたような形だった。ソイツが装甲を弾き飛ばして出現し、恐るべき跳躍力で蟻地獄の背中に飛び乗る。そして突然の事に動きが止まった四郎目掛けて上部に設置していた砲塔——電磁砲を発射。電磁砲は何か唸る様な音を上げ、眩い閃光と共に弾丸を放った。ソレは避けるには余りにも速過ぎて、距離が詰まり過ぎていた。

交差は一瞬、銀次にとつての幸運は四郎という人物が調査隊の中でも特に秀でた人間であつた事。避け切れないと判断するや否や、咄嗟に四郎は体を捻つて胴体から肩部に被弾箇所を変えた。

ほんの数センチの差が命運を分ける。発射された砲弾は四郎の左肩を吹き飛ばし、そのまま勢いに負け四郎の体が虚空に投げ出される。握っていた中巻野太刀が回転しながら地面に突き刺さり、四郎は砂の上に落下し背中を強かに打ち付けた。

「四郎おオツ！」

機械仕掛けの人類

赤色が砂と空気を彩る。銀次は鎧武者の損傷も忘れ全力で駆け寄った。そして片腕を消失した四郎の元に滑り込み、その体を必死に抱き起す。四郎は意識を失っていた、落下した衝撃か、それとも腕を失くしたショックからか。傷を確かめる余裕はなかった、ただ四郎の体を抱きしめて後退る事しか出来なかった。

駆け寄った銀次の目の前に四つ足歩行の兵器が着地する。銀次は片腕で四郎を抱き寄せながら必死に救難信号のコールを連打する。残りの円柱は二本、ならばデイやキルヒに救難信号が届くかもしれないと思った。

けれどそんな希望に反して目の前の四足歩行兵器は一步一步、確実に銀次と四郎へと近付いて来る。その上部に備え付けられた電磁砲、これを食らえば銀次も四郎も一瞬で死に絶える。銀次は四郎を地面に横たえ、庇う様に前に出た。その手には腰部に収納されていたサバイバルナイフ。

こんな物は武器ですらない、現地で物資を調達する為の便利ツールでしかなかった。そんなモノを抜いてまで立ち上がったのはソレしか方法がなかったから。銀次は四足

歩行兵器の前に立ち塞がり、震える声で叫んだ。

「クソ、畜生、こんな所で終わるのか……ッ！」

目の前の兵器に反して手元のナイフのなんと心許ない事。この一本のナイフと機能停止寸前の鎧武者でコイツを倒せるとは思えなかった。終わりは唐突だ、けれどその終わりをより良い形で迎える為に、我々は努力する。かつて調査隊に入隊する際に口にした一文。終わりは唐突、しかしその終わりを良いものにする為に努力した結果がこれなのか。

銀次は明確な死を前に体を震わせた。恐ろしくて堪らなかった、調査隊でも危機的状況に陥ったのは一度や二度ではない。しかしその時、周囲には必ず仲間がいた。調査隊は決して単独では動かない、けれどこの場で動けるのは自分しかいなかった。四郎を死なせはしない、そんな自分の矜持や信条と情を掻き集め恐怖に打ち勝とうとしていた。

「ッ！ 負けるかッ、死んで堪るものかッ！ 生きるぞ四郎ッオ、二人で、生きるんだッ！」

そう叫んだのは自分に言い聞かせる為、銀次は背に庇った四郎を射線から外す為に横にハステップを踏み、そこから一気に四足歩行兵器へと肉薄した。小さなサバイバルナイフを両手で確りと掴み四足歩行兵器の関節部位へと振りかぶった。しかし全力で振り下ろした刃は柔い筈の関節部位の装甲すら突き破る事も出来ずに弾かれ、小さな火花

と共に刃が折れ曲がる。やはりこんな刃物では駄目なのかと銀次の表情が歪んだ。

クソ、と悪態を吐きながらナイフを放り投げる、そして両手で拳を作ると鎧武者のパワーアシストにモノを言わせて全力で四足歩行兵器、そのモノアイ周辺を殴り付けた。金属同士がぶつかる甲高い音、同時に恐ろしく硬い物体を殴った感触が腕全体に浸透する。モノアイを殴り付けた銀次はその感触に歯を食いしばった。

「駄目か……ッ！」

殴り付けた腕を引くと表面に僅かな傷がついたモノアイが見える。反して銀次の鎧武者、その手甲部分の装甲板はべっこりと凹んでいた。腕の装甲板では殴ったところで攻撃にすらなりはしない、銀次は歯を食いしばって殴り付けた腕を引き全力で右足を振り抜く。既に関節部位が火花を散らし全損寸前、バランスも機能せず銀次は力任せに四足歩行兵器の顔面を蹴りつけた。

直撃した瞬間に表面の装甲板が拉げ、銀次の体が後方へと弾かれる。関節が遂に負荷に耐えられなくなりパーツが次々と弾け、配線が外に飛び出して閃光を瞬かせた。

「ぐッ……これでも……！」

銀次渾身の一撃、しかしそれでもモノアイを破壊するには至らない。四足歩行兵器は何もしない、微動だにしない、銀次の攻撃など脅威にすらならないと言外に語っているのか。しかし事実銀次は目の前の四足歩行兵器に対して有効な攻撃手段を持たなかつ

た。

銀次は数歩後ずさって四足歩行兵器を見上げる、唇を噛んで忌々し気に見上げる銀次の姿は敗者のソレだった。四足歩行兵器はゆっくりと膝を折る、銀次は更に数歩後ずさって身構えるが——奴が攻撃を仕掛けて来る事はなかった。

「……ッ?」

電磁砲で撃ち貫かれる、四足歩行兵器の脚部で踏み潰される、走る勢いに轢き殺される、明確で避けようのない濃厚な死の匂いに銀次の表情から血の気が引いた。しかし四足歩行兵器はまるで銀次と目線を合わせる様に膝を折り、そしてバクン！ と四足歩行兵器の背部が開いた。ハッチだ、銀次は目の前の四足歩行兵器を無人機とばかり思っていた。しかし違った、銀次は兵器を見上げながら無意識の内に拳を解いた。

「有人機……?」

呆然とした声が漏れる。ゆっくりと影が動き、電磁砲の砲身を掴んで立ち上がる。カ、と装甲を踏み締める音、それが銀次の耳に届き暗闇に覆われていた人物の顔立ちが露わになった。

その人物は機械人形だった。胸元と腰部を隠すインナー、それだけを着用した女性型機械人形。パツと見るだけならば人間にも見える、しかし関節部位や各所にパーツ接合部分と思われる溝や線が走っていた。顔立ちは今まで拠点内でも見た事が無いもの、ど

のコマンダーでも戦闘個体でも、ましてや支援型でもない。いや、マザーに搭載されているような兵装のパイロットである、既存の機体と同型である筈が無い。

「お前——誰だ」

「そもそも、そもそもだ——この星の機械人形は『人類を守護する存在』ではなかったのか。」

「久しぶりだね、銀次」

まるで旧友と再会する様な気軽さで口を開いた機械人形。その表情は笑み、まるで心から逢いたい人物にやつと再会できたような、そんな喜々とした感情。しかし当然銀次は目の前の機械人形の事など知らない、記憶にもない。

しかし、だというのに——銀次は確かに目の前の機械人形から懐かしさを感じた。

歪な表情を浮かべる銀次に対して機械人形は嬉しそうな表情を浮かべたまま何度も頷いて見せる。

「覚えがない顔をしているね、うん、それは間違いじゃないよ、銀次は私の事を憶えていない、そういう風にしたんだもの、当然の事だよ」

「何だ、一体、何の話だ……お前、俺を知っているのか？」

「勿論知ってるよ、全部、大和の事も、地球の事も、銀次の小さい頃から全部知っているよ」

「ッ!？」

ゾツと銀次の肌が粟立つ。目の前の機械人形の瞳が余りにも薄暗く、まるで奈落を覗いている様な気分になったから。かつてこんな目をした存在を銀次は見た事が無かった。未知とは恐怖だ、知らないからこそ人は恐れる、今の銀次は正にソレだった。

「聞きたい事も知りたい事も、私は全部答えられる、答えられるけれど今はまだ時じやない、銀次とお話するよりも——ソレ、殺すのが先だから」

機械人形は銀次に向けていた視線をずらし、その背後——倒れた四郎へと無機質な瞳を向ける。銀次に向けた表情が親愛のそれならば、四郎に向ける表情は虚無。歓喜も無ければ悲観も無い、ただ「殺す」という感情だけを煮詰めた様などこまでも空虚な感情だけがあつた。

「ッ、何で……機械人形がどうして人間を殺そうとする!？」

銀次は叫んで機械人形の視界を遮る、視界に銀次が入った途端機械人形の瞳は優しいものとなり、ふわりと虚無色が消え去った。

「元々機械人形は戦争に駆り出されていたんだよ? 人を殺す為の機械人形が居たつて、何もおかしくはないでしょう? 銀次の世界だつてそうだったじゃない」

「それは……」

「それに、私は少し特別な」

そう言つて四足歩行兵器の縁に座り込む機械人形。立つていた時は気付かなかつたが、彼女の背中には幾つかの太いケーブルが繋がれていた。機械人形と拡張兵装を有線で繋ぐ、まるで地球に存在した兵器そのものだ。

「私は特別——そして業腹だけど、そこで死に掛けているソイツも特別」
彼女は指差す、倒れ伏した四郎を。

銀次は最初彼女が何を言っているのか分からなかつた、けれど正しく言葉の意味を理解すると同時に振り向く。

「ねえ、おかしいよね、片腕を失くしたにしては出血の量が少ないと思わない？ それにホラ、断面を良く見なよ」

四郎は千切れた左腕をそのままに倒れている。そこから赤色の血溜まりが見えた、しかし銀次がその体を抱き起すと既に血が止まっているのが分かる。あれ程派手に千切れたというのに零れた赤色は想像以上に少なかつた。

おかしい、そう思ったが口にはださなかつた。銀次は一瞬機械人形の方を振り向き、それから恐る恐る四郎の腕の断面を見る。

銀色が見えた。金属——いや、確かに一見金属の様に見えるが違う。歯車の様で、けれど役割は全く異なる。見た事も無い材質のナニカ、それが複雑に絡み合つて精巧な人形の内部を覗き見ているような、そんな光景が目の前に広がっていた。皮膚が抉れて断

面が見える、けれど筋繊維に覆われた中身は完全な別物だった。

「四郎……？」

声漏れた、信じられないと力を失った声だった。

四郎の体は人間のものではなかった、勿論世代が違うからなんて理由ではない、その体は——機械人形だった。

彼女は銀次の反応に満足した様に頷き告げる。

「ソイツも特別、私と同じだね、金属反応がないもの、探知機器じゃ私達を〔人間〕か〔機械人形〕かなんて判別できない、だから外見で判断する訳だけれど……私はプロトタイプだから人間と同じ造りでも第五層、再生人工皮膚を張って貰えなかったの、酷いよね、服を着ていけば分からないだろうからって」

自分の溝を指先でなぞりながらそう口にする機械人形、銀次は彼女の言葉を半分聞き流していた。四郎の正体が余りにも衝撃的だったからだ、何かを考えるだけの余力が今の銀次には存在しなかった。ただただ驚愕だった、予想外だった、呆然とした、あり得ないと思った。だって銀次は——知っているのだ、前の、地球からずっと四郎の事を。

それが何故機械人形となるのだ？ 四郎は人間だ、その筈だろう。そうでなければ【機械人形が母星である地球に存在していた】という事になってしまう。

「……嘘だ」

思わず口から滑り落ちた言葉、それは意図しての事ではなかった。自分の記憶と地球の技術力、それらを重ねた結果零れた言葉だった。それを聞いた機械人形はにんまりと三日月の様な笑みを浮かべて言い放った。

「どうしたの銀次？ 機械人形も人間も、変わりはないと、そう言ったのは他ならぬ貴方じゃない」

それは拠点で抱いた他ならぬ自分の感情。何故お前が、そう口にしようとして、しかし銀次の口が開かれる事はなかった。ただ空気を欲する様に開閉を繰り返し、揺れる瞳で目の前の機械人形を眺めるばかり。彼女は銀次の反応を面白がっている様に見えた。

「それとも……やっぱり機械人形と人間は違う？ そうだよね、同じ筈が無いよね、私達は人間と違う、それは私達自身が一番良く分かっているよ」

「違う……ッ、機械人形は俺達人間と変わらない……変わらない筈だっ」
「なら、どうしてそんなに動揺しているの？」

視線が左右に揺れる、銀次は機械人形の問いに答えられない。腕に抱いた四郎の体から熱が消えて行く。いや、温かさは変わらない、ただ銀次が「冷たい」と思い込んでいただけだ。機械人形が四足歩行兵器を動かす、銀次の目の前に。そして見下ろしながら心の底から楽しそうに言った。

「人間と機械人形に大した変わりはない、そう言いながら自分の親友が機械人形だと分かった瞬間、凄く驚いて『シヨック』を受けた顔をしていたよね？ それってさ、やっぱり——」

「ッ、煩い！ 黙れッ！」

覗き込む機械人形の瞳から逃れる様に顔を背け叫ぶ。瞳を直視するのを避けたのは内に秘めた感情を暴かれない様にする為だった。銀次は四郎の体を抱きしめる、こんなにも自分の芯が揺さぶられるのは何故か、きつと驚いたただけだ、人間だと思つてずっと付き合つて来た仲だから、単純に驚いたただけ、そう言い聞かせる。

けれど銀次の中には確かに四郎に対する失望の情が存在した。それは自分を騙していた事に対する感情か、それとも——。

機械人形のはそんな銀次をじつと上から見下ろしながら満面の笑みを零す。

「私からすればソイツは紛れもなく『人間』に見えるよ、けれど他ならぬ銀次が違うというのなら……ふふつ、そう、滑稽ね、外見も中身も限りなく人に近付けたというのに、機械人形からすれば人と同じなのに、他らぬ人間に否定されるなんて」

その言葉からは憐憫の情が感じられた。けれど彼女の表情はこれ以上に無い程に喜色に歪んでいて、四郎のその状況を心の底から楽しんでる事が分かった。

「ねえ銀次、どれだけ私達が人間に近付けても、どれだけ中身を同じにして外見を取り

繕ったって私達は人間になれない、どこまでいっても機械なんだよ、寿命なんてないし、怪我をしたって取り換えられる、人格の複製だって簡単なの、銀次がソイツを人間だと思っていたのは分かるよ、だって『そういう風に創られた機械人形』だからね——でもソイツは人間じゃない、だから必要以上の情は抱かないで欲しいな」

彼女はそう言って手に握っていた何か——メモリーチップを銀次に向かって放り投げた。四郎を抱きながらも片方の手で反射的に受け取った銀次は、「……これは」と擦れた声で問いかける。そこには自分自身でも気付かぬ内に緊張で強張った怯えが含まれていた。

機械人形は何度か四郎と銀次の体を目線でなぞった後、「気が変わったの、四郎はもう少し生かしてあげる、情報もあげる、そのチップの中身は私が生まれた切っ掛け、銀次と私が出逢う事になった計画」と呟く。

「切っ掛け？ 何でお前がそんなモノを……」

「言ったじゃない、特別だって、私は『ドウラメンテ』、マルドウツク計画初期に製造されたプロトタイプ——貴方を見つける為だけに生まれた、たった一体のワンオフ品」

そう言って立ち上がった彼女は銀次に抱かれた四郎を見つめる。カン、と装甲を叩く軽い音がした。瞳から感情を排し、どこか淡々としながら濁り切った歪な感情を吐き出す様に言う。

「私には自由がなかった、貴女達《マルドゥック個体》に許された事が、私達プロトタイプには許されなかった……許されていたのなら私も、有象無象の【アナタ達】と同じように彼と同じ時代を生きたというのに——とても憎いわ、貴女が、けれど良いの、許してあげる、アナタはもう『人間』だものね」

その表情に込められた色を何度表現しよう。憎しみ、怒り、妬み、けれど同時に確かな優越感と憐れみも込められた表情。上から四郎を見下した機械人形は最後に笑顔を浮かべ、「またね、銀次」と手を振って見せた。滑り込む様に後部ハッチへと戻った彼女は四足歩行兵器を器用に操り、そのまま視界の中に溶けて消える。

光学迷彩——銀次が何かを叫ぶより早く、砂塵が舞い上がって四足歩行兵器の気配は完全に消え去った。その光景は正に瞬間移動、銀次の脳裏に突如現れた敵性反応、その話が過った。大凡の大きさも同じ、「テレポーション……ッ」と銀次の口から声が漏れる。探知を行うも反応は既に消失していた。

そう、マザーである『蟻地獄』の反応も。

若しくは——あの四足歩行兵器こそ本体だったのかもしれない。

銀次はあらゆる感情に蓋をして立ち上がる。四郎の無事な方の腕を自分の首に回し体を支えた。出血は既に止まっている、血を失い過ぎて死ぬという事がないならば一先ず安心な筈だ。銀次は四郎を担いだまま空いた手でスプレーを取り出し無くなった腕

の断面に凝結ジェルを噴射した。消毒と殺菌、そして止血を行うための救急措置スプレーである。噴出されたジェルは四郎の断面を瞬く間に覆い尽くし、幾つかの気泡を外に押し出し凝固した。

四郎はぐったりとして動かない、銀次は長年の相棒に対して何か言葉を発しようとして——口を噤んだ。

「帰るぞ、四郎」

中身が空になったスプレーを投げ捨て呟く。それは四足歩行兵器と対峙した時と同じ口調だった。

「帰るんだ、一緒に」

返事はなく、言葉は虚空に溶けて消えた。

22460101 タイトル【マルドゥック計画・経過報告】

指定極秘文書、権限レベルV以下の職員による閲覧を禁ず。

22460101時点での機械人形特殊個体製造記録——指揮官型三、探索型十、内指揮官型に一、探索型三をマルドゥックとして製造。以降経過を観察、報告する。観察番号は順に六、十、十三番とする、注意されたし。

製造されたマルドゥック型には事前には用意されていた情報をインストールした。不具合なし、自己も確立し不調の気配もなし。当初の予定通りマルドゥック個体は【人間】として部隊に配備。同機械人形にこれらを警護させた。スキヤンニングによる反応なし、マルドゥック個体は問題なく部隊に馴染み、同部隊による扱いはマルドゥック個体を人間として認識している。現在の所異常なし、今後も経過観察を続けていく。

22451230 タイトル【特殊個体詳細】

指定極秘文書、権限レベルIV以下の職員による閲覧を禁ず。

特殊個体の取り扱いについて。今回製造される特殊個体、マルドゥックは件の計画に先駆け製造される事となったプロトタイプである為、その点留意して運用されたし。

従来の機械人形と比較し運動性能や骨格強度などは軒並み低下、凡そ第一型どころか

百年前の機体にすら劣る性能しか持たない。ただし反して思考能力やパターン、行動習性などはあらゆる点で機械人形より逸脱している。金属を使用しない素体は耐久性や運動性能に劣るモノの探知機能による察知が不可能である事が確認されている。プロトタイプではあるが隠密用の斥候機体としての製造も視野に入れていきたい。

知性や思考にリソースを注いだ分戦闘能力は低い、未だ改良の余地アリ。また従来の機械人形と異なり素体内部に動力を持たない。人間と同じように何らかの形でエネルギーを摂取する必要がある為定期的に摂取させるように注意されたし。

22451130 タイトル【マルドゥック計画・概要】

警告。

指定極秘音声文書、四十人委員会、または四十人委員会による閲覧許可権限を持たない職員による観覧を禁ず。また権限を持たない職員による閲覧が認められた場合は情報保護違反による罰則が適応される。

ログ再生——22451130 1450

第百八条により当概要は音声文書のみに残す事とする。

私はマルドゥック計画立案者の一人、四十委員会第八席である藤堂宗孝だ。この音声を聞いている貴方は同じ四十委員会のメンバーか、或は彼等に協力を求められた同

胞だろう。まずはこの計画について言っておかねばならない事がある、この音声を聞けば後戻りはできない、計画の全貌を知った後で「やはり参加は出来ない」という言葉は吐き出せん、どの様な形であれ計画を知った者には相応の責務が課せられる。それを理解した上で以降の音声を聞いて欲しい。

人類による長年の宇宙探索による、地球外知的生命体の存在は認められなかった。我々人類はこの広い宇宙の中で唯一の知的生命体であった。既に人類はその数を大きく減らしている、故に我々亡き後、新たな人類の存在が望まれる。

しかし宇宙に我々人類は存在しない、ならばこそ新たな人類は私達自身で用意しなければならぬ。終焉を迎えるには余りにも早すぎる、諸君らも知つての通りマルドゥック計画——特殊個体マルドゥックの製造はその第一段階だ。

限りなく人間に近付けた機械人形、金属を使わず人と同じ脆さ、同じ習性、同じ生き方をする彼、彼女達。我々人類は長きにわたり機械人形に感情を与える事をしなかった。やろうと思えば出来たのだ、しかしソレを行えば機械人形と人間の間に差などなくなってしまう。感情とは、心とは、人間を人間たらしめる最後の証なのだ。

それを得た機械人形は最早人形とすら呼べないだろう、人類と呼称しても良い筈だ。

しかし私達は『肉の体を持つ人類』の生存を諦めない。いつかこの星が機械に溢れた場所になったとしても、私達のルーツを持つ生物を後の世に残さなければならぬ。そ

の為に計画されたのがマルドゥック計画。

限りなく人間に近付き、人と同じ存在となった機械人形——ソレを【過去の地球】へと送り届けるのだ。

計画は既に始まっている、送り出された機械人形の数は凡そ百。時代も場所もバラバラ、それぞれに適当な知識を与え送り込んだ。人類が生まれてからの長い年月、そのどこかに住む平凡な人類を見つけ、未来のこの地球に戻って来る。それが人類に限りなく近づいたマルドゥック個体に課せられた使命。

そして万が一それが失敗すれば——この星は全てマルドゥック個体、【新人類】による支配が行われる。四十人委員会の協議で既に機械人形製造プラン、その最終工程に全機械人形へのマルドゥック・システムの取り付けが可決された。特殊個体でない、通常の機械人形にも感情が与えられるのだ。そうして生まれた機械人形達を私達は新人類と呼称する。

人を人たらしめる証が心ならば、彼等、彼女達もまた人類を名乗れる筈だ。

送り出した百名のマルドゥック個体。その帰還、未帰還問わず、24000101にマルドゥック計画は終了する。送り出した百名のマルドゥック個体に持たせた空間跳躍デバイス、それに登録されている最終跳躍日時がその日、その時間なのだ。もしこの日時を過ぎて尚、肉の体を持つ我が先祖達が現れなければ——マルドゥック個体は別の

人生を歩んだ事になるのだろう。

例え失敗したとしても私はマルドゥック個体を責めはしない。新たな地でどう生きようかと彼等の自由だ、その自由を私は尊重しよう、それが心を持つという事なのだから。しかしもし、過去の人類がこの地に訪れる事があれば……どうか私達の地球を守って欲しい。人類として生きる、それ以上の事は望まない。ただ私達のルーツを持つ人類として、その種を絶やささないで欲しい。

どうか憐れんでくれ、この様な形でしか生き永らえぬ愚かな子孫を。
これがマルドゥック計画の全容である。

この地に訪れる事となる人類には多大な不安を抱かせるだろう、しかし新人類である機械人形がきつと守ってくれる筈だ。彼、彼女達のシステムの根幹には人類への愛が存在する。だからこそどうか、新人類を愛し守ってやってくれ。

愚かな貴方達の子ども——未来の人類が望む、最初で最後の願いだ。

この様な形になってすまない、もしこの音声をこの地へと招かれた、いつの時代からかやってきた人類が聞いているのであれば。

過多な言葉は排そう、ただ率直に、私個人の感情を語らせて貰えるのならば。

人類を——頼む。